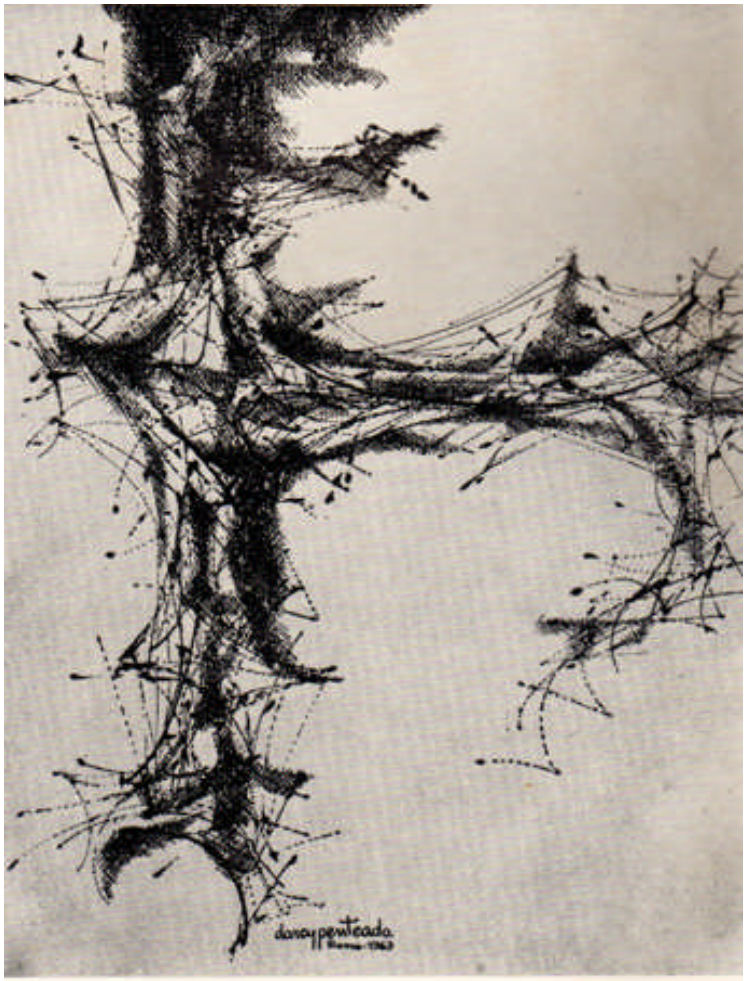
日本語（１２）

中級用

ダルシー＝ペンテアード（Darcy Penteado）

独学の画家、ダルシー＝ペンテアードは、一九二六年、サンパウロ州サン　ロッケに生まれた。一九四八年、最初の個展を開いた。その後、サンパウロ近代美術館、サンパウロ・ビエナル展、伯米協会などに出品している。外国では、スイス、ポルトガル、アルゼンチン、北米などで個展を開いた。これまでに、近代美術サロン・パウリスタ賞、ゴベルナドール・ド・エスタード賞（州知事賞）その他、数々の賞をうけている。

現在は、ブラジルとヨーロッパを往復しながら芸術活動にたずさわっており、イタリアや、フランスの有名ガレリアにも作品を送っている。



ダルシー・ペンテアードの絵

日本語（１２）

中級用

目　次

詩

一　小詩二編　セシリア＝メイレレス

二　よごれた手　カルロス用＝ヅルモンデ＝アンドラーデ

三　山のあなた　カール＝ブッセ（上田敏　訳）

四　流離の歌　ゴンサルベス＝ジアス（古野菊生　訳）

古都

一　オウロ・プレット　堀　辰雄

二　西の京

日本の美

一　日本の芸術

二　現代の日本

むかしの劇

一　能と狂言

二　羽衣（口語訳）

三　いろは

地球
一　土と岩石
二　鉱物
三　地下資源
四　地球の外と内
五　地球の歴史と生物
伝記を読む
一　ロンドン元帥
二　野口英世
—劇—桃源にて　武者小路實篤
詩と語録
一　千曲川旅情の歌　島崎藤村
二　江南の春
三　孔子のことば（論語）
国家と世界
一　国家
二　兵役について
三　国を愛する心
四　国際連合
日本の古典
一　源氏物語　紫式部
二　枕草子　清少納言
三　徒然草　兼好法師

宇宙の果てまで
一　太陽と月
二　太陽系
食品と薬品
一　食品と栄養
二　薬品のいろいろ
海の外へ
一　貿易について
二　船の将来
三　造船所をたずねて
卓球台を作る
文学
一　くるみ割り　永井龍男
二　地蔵の話　長与善郎
課外
一　サントスへの遠い道
二　ひも　ギード＝モーパッサン
三　ことばのきまり（その三）
四　文の種類
五　現代かなづかいの要領
六　送りがなのつけ方
七　これからの敬語

＊谷間のともしび　西原武三訳詞・アメリカ民謡
＊ボルガの舟引歌　堀内敬三作詞　ロシア民謡
＊オールド　ブラック　ジョー　緒園凉子作詞
＊あおげば尊し
巻十二　新出・読替　当用漢字表

詩

一　小詩二編

セシリア＝メイレレス

1

風が吹き過ぎる
夜は　すっかりとり乱し
木の葉が散る

なにか　思索でもあるのだろうか
この夜に
この風に
散っていく　この木の葉に

2

ふしぎな　はげしい風が
ばら色の木を　吹いてとおった
そして　木をベールのようにゆさぶった
あなたの持つ　広いベールのように

小鳥たちは　空へ飛び去った
けれども花々は　地上に残った

（新ポル語　Ｃｅｃｉｌｉａ　Ｍｅｉｒｅｌｅｓ）

二　よごれた手

カルロス＝ヅルモンデ＝デ＝アンドラーデ

わたしの手は　よごれている
水で洗っても　だめ
せっけんをつけても　むだ
わたしの手は　よごれている
もう　なん年も前から　よごれている

ああ　幾夜
この手を洗い　みがいたことだろう
水晶　ダイヤのような手というのではない
わたしの欲しいのは　白い　ただの手
よごれのない　清らかな人間の手

三　山のあなた

カール＝ブッセ

上田　敏（訳）

山のあなたの空遠く
「幸い」住むと人のいう
ああ　われ　ひとと尋（と）めゆきて
涙さしぐみかえり来ぬ
山のあなたになお遠く
「幸い」住むと人のいう

（新ポル語　Ｃａｒｌｏｓ　Ｄｕｒｍｏｎｄ　ｄｅ　Ａｎｄｒａｄｅ）

四　流離の歌

ゴンサルベス＝ジアス
古野　菊生（訳）

わがふるさとに　椰子（やし）ありて
サビアひたなく　そのかげに
ここにしてきく　さえずりの
似るに由無き　うれいかな

わが大空は　星に富み
ひろ野に花の咲ききそい
いのちあふるる森ありて
めぐみ　ゆたけき　わが生活（たっき）

ゆうべさみしく　忍び寄る
幸（さち）多かりし　かのくによ
わがふるさとに　椰子ありて
サビアひたなく　そのかげに

ふるさとにのみ　あまたなる
妙（たえ）なるものの　ここになし
ゆうべさみしく　しのびみる
幸多かりし　かのくにより
わがふるさとに　椰子ありて
サビアひたなく　そのかげに

（新ポル語　Ｇｏｎｓａｌｖｅｓ
Ｄｉａｓ／ｓａｂｉａ）

な召しそ　神よ　わが魂（たま）を
ふるさとに　わが　かえるなく
このくにに見ん　すべもなき
麗しきもの　え得もせで
サビアひたなく　かの椰子に
また　あうことも　あらずして

一　ブラジルの詩人

一八二三年、マラニョン州に生まれる。ポルトガルのコインブラ大学卒業後、政府より派遣されて、ヨーロッパを巡る。一八六二年、病気療養のため再び渡欧したが、希望を達成することができなかった。一八六四年帰国し、故郷マラニョンで死亡した。彼の主要作品としては、「プリメイロス・セグンドス・ウルチモスの三カントス」「セスチリョス・デ・フレイ・アントン」「ジュッカ・ピラマ」「オス・チンビーラス」などがある。

二　ブラジルの現代詩人

一九〇一年、リオ・デ・ジャネイロに生まれる。一九二三年最初の詩集「ヌンカ・マイス・エ・ポエマ・ドス・ポエマ」を発表した。一九三八年、アカデミア・ブラジレイロのコンクールに応募した詩集「ビアージェン」は、賞賛を博し彼女の文名を高め、現在詩作活動をさかんに行なっている。主要作品として、「バーガ・ムジカ」「マール・アビソルド」「レトラット・ナツラル」などがある。

三　ブラジルの詩人・ジャーナリスト

一九〇二年、ミナス・ゼライス州に生まれる。詩人・ジャーナリストとして、現在大いに活躍している。主要作品には、「ブレジョ・ダス・アルマス」「ポエジアス」「コ

ンフイソンエス・デ・ミナス」「ア・ローザ・ド・ポーボ」「ポエジア・アテ・アゴーラ」「クラロ・エニグマ」などがある。

古都

一　オウロ・プレット

マノエル＝ロドリゲス＝ロッペスの率いるバンデイラの一隊は、カザー・ダ・カスカ地方の探険を終えて、パライバ平原へ向かい帰途についた。ある日、一隊が岩山に囲まれた低地に野営したときのことである。隊員の一人、ヅアルテ＝ロッペスは、食器を洗うために、小川の縁へおりていった。何気なくあたりを眺めていた彼は、見なれない黒い石が、幾つもころがっているのに気がついた。手に取ってみると、ずしりと重く、ただの石くれとは思われないので、その一つを拾い、故郷のタウバテーまで持って帰った。そして、よく調べてみると、その石くれは、まぎれもなく金を多量に含んだ鉱石であった。小おどりして

〈オウロ・プレット〉

喜んだロッペスは、雨期のあけるのを待ちかねるようにして、数人の仲間を誘い、あの岩山に囲まれた低地へ出かけて行った。彼らは、そこに小屋をかけ、金の採集に全力をあげた。

ロッペスが金鉱を発見したといううわさは、またたく間にひろがっていった。南部の人々は、ロッペスの足跡を踏んで、続々とこの低地に集まってきた。そして、ここに村ができ、やがて都市にと膨張していった。それは、十七世紀の終わりごろで、後にオウロ・プレットと名づけられ、金の産地として、広く知られるようになった。

地下から掘り出される金によって、オウロ・プレットは豊かな都市として栄えていった。壮麗な市街が建設され、ブラジル一流の学者・芸術家・宗教家・富豪が集まり、高度な文化を誇った。

オウロ・プレットは、また別の意味で重要な役割を果たした都である。

カピタニヤ時代に作られた黄金の都、オウロ・プレットの名に心を揺り動かされ

（新ポル語　Manoel Rodorigues Lopes／Paraiba／Bandeira／Ouro Preto／Casa da Casca／Duar

te Lopes／Taubate／Capitania）

た北部の人々は、多くの危険をおかして、この地にやってきた。北部と南部との人人の風俗習慣が混然と一体をなし、オウロ・プレット独特のものが形成されていった。これを芸術についていえば、教会・劇場、その他の主要建築物に、また、そこにまつられてある聖像や、施された壁画、彫刻などに、見ることができる。

世に「アレイジァジニョ」と呼ばれる有名な彫刻家、アントニオ・フランシスコ・リスボアが病苦とたたかいながら、愛と祈りをこめて刻んだ数々の彫刻も、オウロ・プレットが誇る芸術品である。

それらは、ロマンチック風・ゴシック風・ルネサンス風・バロック風などの様式が、さまざまに混じりあっている建築物と共に、ブラジル芸術のゆかしさを物語るものである。

オウロ・プレットは、古都、芸術の都というばかりでなく、教会の多い都としても有名である。市内には、十三の荘厳な教会があって、朝夕響きわたる鐘の音に、昔のはなやかさをしのぶことができる。

これらの教会と共に、目を引く建物は、カーザ・ダ・オペラと、インコンフィデンシァ博物館がある。カーザ・ダ・オペラは、オウロ・プレットが、その繁栄を誇ったころ、

世界各国の有名な音楽家を迎え、華麗な舞台を繰りひろげたものである。インコンフィデンシア博物館には、ミナス・ゼライス出身のブラジル独立の英雄たちに関するものが、多く陳列されている。

二百年の昔、文化の都として栄えたオウロ・プレットも、金の産出が減少するにつれて、今では静かな山間の古都となっている。

オウロ・プレットの都を間にはさんで、金の掘り尽くされた鉱山と向かいあう山の頂上に、イタコロミーと呼ばれる二つの岩が立っている。ツピー語で、イタは石、コロミーは女の子という意味である。これは、さながらに女の子が大岩に寄り添っている姿をなしている。

その栄枯のさまを、じっとながめてきたイタコロミーは、今も、そのすべてを胸に秘めて、オウロ・プレットを見おろしている、この古都の守り神ででもあるかのように。

（Aleijadinho／Antonio Francisco Lisboa／Casa da Opera／Inconfidencia／Minas Gerais／Itacolomi）

二　西の京

堀　辰雄

いま、秋篠（しの）寺という寺の、秋草のなかに寝そべって、これを書いている。いましがた、ここのすこし荒れた御堂にある伎芸天女（ぎげいてんにょ）の像をしみじみと見てきたばかりのところだ。このミュウズの像はなんだか僕たちのもののような気がせられて、わけてもお慕わしい。失（あか）い髪をし、おおどかなお顔だけすっかり香にお灼（や）けになって右手を胸のあたりにもちあげて軽く印を結ばれながら、すこし伏せ目にこちらを見下ろされ、いまにも何かおっしゃられそうな様子をなすってお立ちになっていられた……。

ここはなかなかいい村だ。寺もいい。いかにもそんな村のお寺らしくしているところがいい。そうしてこんな何気ないお堂のなかに、ずっと昔から、こういう匂いの高い天女の像が、身を潜ませていてくだすったのかとおもうと、本当にありがたい。

秋篠の村はずれからは、生駒山（いこまやま）が丁度いい工合に眺められた。

もうすこし昔だと、もっと佗（わ）びしい村だったろう。

何か平安朝の小さな物語になら、その背景には打ってつけに見えるが、それだけに、ここもこんどの仕事には使えそうもないとあきらめ、ただ伎芸天女と共にした幸福なひとときをきょうの収穫にして、僕はもう何をしようというあてもなく、秋篠川に添うて歩きながら、これを往けるところまで往って見ようかと思ったりした。

が、道がいつか川と分かれて、ひとりでに西大寺（さいだいじ）駅に出たので、もうこれまでと思い切って、奈良（なら）行の切符を買ったが、ふいと気がかわって郡山（こおりやま）行の電車に乗り、西の京で下りた。

西の京の駅を出て、薬師寺（やくしじ）の方へ折れようとするとっつきに、小さな切符売場を兼ねて、古瓦のかけらなどを店さきに並べた、陀（わ）びしい骨董（こっとう）店がある。いつも通りすがりに、ちょっと気になって、その中をのぞいて見るのだが、まだ一遍もはいって見たことがなかった。が、きょうその店の中に、日があかるくさしこんでいるのを見ると、ふいとその中にはいってみる気になった。何か埴輪（はにわ）の土偶（でく）のようなものでもあったら欲しいと思ったのだが、そんなものでなくとも、なんでもよかった。ただふいと何か仕事の手がかりになりそうなものがそんな店のがらくたの中にころがっていはすまいかという空頼みもあったのだ。だが、そ

こで二十分ばかり粘ってみていたが、唐草文様（からくさもよう）などの工合のいい古瓦のかけらの他（ほか）にはこれといって目ぼしいものも見あたらなかった。なんぼなんでも、そんな古瓦など買った日には重くって、持てあますばかりだろうから、又こんど来ることにして、何も買わずに出た。

裏山のかげになって、もうここいらだけ真先きに日がかげっている。薬師寺の方へ向かってゆくと、そちらの森や塔の上にはまだ日が一杯にあたっている。

〈薬師寺東塔〉

荒れた池の傍をとおって、講堂の裏から薬師寺にはいり、金堂や塔のまわりをぶらぶらしながら、ときどき塔の相輪（そうりん）を見上げて、その水煙のなかに透かし彫になって一人の天女の飛翔しつつある姿を、どうしたら一番よく捉（つか）まえられるだろうかと角度など工夫してみていた。が、その水煙のなかにそういう天女を彫り込むような、すばらしい工夫を凝らもた古人に比べると、い

まどきの人間の工夫しようとしている事なんぞはなんと間が抜けていることだと気がついて、もう止める事にした。

それから僕はもと来た道を引っ返し、すっかり日のかげった築土（ついじ）道を北に向かって歩いていった。二、三度、うしろをふりかえってみると、松林の上にその塔の相輪だけがいつまでも日に赫（かがや）いていた。

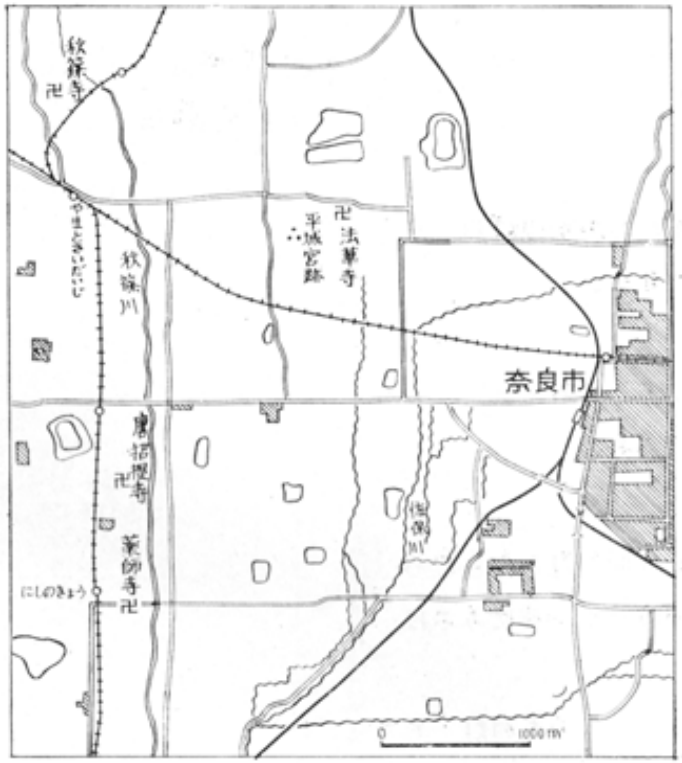
裏門を過ぎると、すこし田圃があって、そのまわりに黄いろい粗壁（あらかべ）の農家が数軒かたまっている。それが五条という床しい字名の残っている小さな部落だ。天平（てんぴょう）のころには、恐らくここいらが西の京の中心をなしていたものと見える。

もうそこがすぐ唐招提寺（とうしょうだいじ）の森だ。僕はわざとその森の前を素どおりし、南大門も往き過ぎて、なんでもない木橋の上に出ると、はじめてそこで足を止めて、その下に水草を茂らせながら気もちよげに流れている小川にじいっと見入りだした。これが秋篠川のつづきなのだ。

それから僕は、東の方、そこいら一帯の田圃ごしに奈良の市のあたりにまだ日のあたっているのが、手にとるように見えるところまで歩いて往ってみた。

僕は再び木橋の方にもどり、裏手から唐招提寺の森のなかへはいっていった。

金堂も、講堂も、その他の建物も、まわりの松林とともに、すっかりもう陰ってしまっていた。そうして急にひえびえとしだした夕暮のなかに、白壁だけをあかるく残して、軒も、柱も、扉（とびら）も、一様に灰ばんだ色をして沈んでゆこうとしていた。



〈西ノ京駅付近の地図〉

僕はひとりで金堂の石段にあがって、しばらくその吹き放しの円柱のかげを歩きまわっていた。それからちょっとその扉の前に立って、このまえ来たときはじめて気がついたいくつかの美しい花文を夕暮のなかに捜して見た。最初はただそこいらが数箇所、何か剥（は）げてでもしまった跡のような工合にしか見えないでいたが、

じいっと見ているうちに、自分がこのまえに見たものをそこにいま思い出しているのに過ぎないのか、それともそれが本当に見え出してきたのかどちらか、よく分からない位の灰（ほの）かさで、いくつかの花文がそこにぼおっと浮かび出していた……。

僕はきょうはもうこの位にして、ここを立ち去ろうと思いながち、最後にちょっとだけ人間の気まぐれを許して貰うように、円柱の一つに近づいて手で撫（な）でながら、その太い柱のまんなかのエンタシスの工合を自分の手のうちにしみじみと味わおうとした。僕はその上きふとその手を休めて、じっと一つところにそれを押しつけた。僕は異様に心が躍（おど）った。そうやってみていると、夕冷えのなかに、その柱だけがまだ温かい。ほんのりと温かい。その太い柱の深部にしみ込んだ日の光の温かみがまだ消えやらずに残っているらしい。僕はそれから顔をその柱にすれすれにして、それを嗅（か）いでみた。日なたの匂（にお）いまでもそこには幽（かす）かに残っていた。

僕はそうやってなんだか気の遠くなるような数分を過ごしていたが、もうすっかり日が暮れてしまったのに気がつくと、ようやっと金堂から下りた。そうして僕はそのまま、自分のどこかにまだ感ぜられている異様な温かみと匂いを何か貴重なもののようにかかえながら、既に

まっ暗になりだしている唐招提寺の門を、いかにもさりげない様子をして立ち出でた。

（現代紀行文学全集（修道社刊）第四巻西日本編所載「十月」のうち、秋篠寺、西の京による。）

谷間の　ともしび

訳詞　西原武三

アメリカ　民謡

たそがれに　わが家の灯
窓に　うつりしとき
わが子　かえる日祈る
老いし　母の姿

谷間　灯ともしごろ
いつも　夢にみるは

あの灯　あの窓こいし
ふるさとの　わが家

なつかしき　母の待つ
ふるさとの　わが家

日本の美

一　日本の芸術

日本の絵画と彫刻は、東洋美術の流れの中に育ちながら、その民族性や、国土性を反映して、独自な発達を遂げてきました。これから、日本の美術について、その歴史的な変遷の概略を調べてみましょう。

最も古いものといえば、新石器時代の土器や土偶（どぐう）などでしょうが、それらは芸術品というには、ほど遠いものです。日本の芸術品としては、二世紀ごろから五世紀ごろまでの遺品に、ようやく芸術性のあるものが見られます。土器・銅鐸（どうたく）・埴輪・鏡・玉などを見ると、その形や模様に、単純ながら、日本民族独特の考え方や、感じ方をうかがうことができます。

しかし、日本の芸術が、本当に開けてきたのは、大陸の文化が伝来した六世紀の半ばごろからだということができます。

日本の美術について、これを歴史的にながめるには、一応、次のように分けて考えるのが便利です。なお、各時代の年数は西暦であらわしました。

一飛鳥時代　二　奈良時代　三　平安時代　四　鎌

倉時代　五　室町時代　六　桃山時代　七　江戸時代
八　現代

飛鳥（あすか）時代（五五二―六四五年）

この時代に大陸から仏教が日本に伝わり、それに伴って、仏教美術が渡来しました。四天王寺、法隆寺、中宮寺など、多くの寺院が建てられ、仏画や仏像がさかんに作られました。絵画では、中宮寺の天寿国（てんじゅこく）まんだら、法隆寺の玉虫の厨子（ずし）などが知られています。

また彫刻では、法隆寺の釈迦三尊（しゃかさんぞん）、百済観音（くだらかんのん）、中宮寺の弥勒菩薩（みろくぼさつ）などが有名です。

〈釈迦三尊〉

この時代の美術は、中国から来て、日本に帰化した仏師、画工及びその子孫と、これらの人について学んだ日本人たちによって作られたものです。

だから技法や形式は、それまで中国で発達してきたものですが、そこには、おのずから日本的な性格の現われが見られます。中国の美術は、どこかゆったりとした感じをもっていますが、日本のそれらは、重々しく引き締った感じを現わしています。この感じこそ、飛鳥時代の美術の生命です。

奈良時代（六四五―七九四年）

この時代の前期を美術史の上では、白鳳（はくほう）時代といい、後期を天平（てんぴょう）時代といいます。

日本では、六世紀から七世紀にかけて、中央集権の政治が確立しました。そして、大陸との交通がさかんになり、仏教は、いよいよ栄えました。

〈聖徳太子像〉

白鳳時代の絵画では、法隆寺の聖徳太子（しょうとくたいし）像と壁画があります。壁画は、一九四九年に火事で

焼けましたが、その後復元につとめております。彫刻の方では、薬師（やくし）寺の薬師如来や、日光（にっこう）菩薩、月光（がっこう）菩薩などがあります。

次に、天平時代にはいり、絵画には、壁画のような大作はありませんが、工芸品と結びついて、いろいろな名品があります。それらは、このころ建てられた正倉院（しょうそういん）に保存され、今日では、世界的に大切な文化資料となっています。中でも、鳥毛立（とりげだち女屏風（おんなびょうぶ）や、過去現在因果経などは有名です。また、薬師寺の吉祥天は、そのころの美人を描いた風俗画としてすぐれたものです。彫刻には、東大寺（とうだいじ）の大仏、唐招提寺（とうしょうだいじ）の鑑真（がんじん）の像などがあります。

奈良時代になってから、唐（とう）との交通がさかんになり、日本の美術もまた新しくなりました。飛鳥時代のきびしさを持ちながら、色どりも美しく、精密になっていて、人間的な情趣を現わすことに力が注がれています。

平安時代（七九四年―一一八五年）

この時代は、都が京都に移ってから源　頼朝が鎌倉に幕府を開くまでの間です。この平安時代の美術も、仏教と密接な関係をもって発達しました。九世紀にはいってか

ら、最澄（さいちょう）・空海（くうかい）の二人の僧が、中国から密教という仏教のおしえを日本に持ち帰りました。これが美術に影響して、前時代にきざしていた人間的な情趣を表現しようとする傾向を一層強めました。

絵画の方を見ますと、この時代の初期には、力強くたくましいものが求められて、非現実的な表現が行なわれました。しかし、中期以後には、そのころの貴族の優美な生活を反映して、感情的でロマンチックなものが現われました。また、大陸の画法を伝えた唐絵（からえ）に対して、日本独特の大和絵（やまとえ）が興ったのもこの時代です。これは、日本の風景・行事・説話などを題材としたもので、軽妙な筆の硬い方に特色があります。大和絵は、最初屏風（びょうぶ）に措かれたものですが、のちにほ文学と結びていて、さし絵として措かれ、世界に類のない、「絵巻」として発達しました。

彫刻の方は、その初期には、力強さや神秘な感じを現わそうとして、誇張的な技法が用いられました。しかし、中期以後は、貴族のはなやかな生活に歩調をあわせ、しだいに華美なものが作られるようになりました。また前代の彫刻は、金銅像、塑像、木像など、その材料が多様でしたが、この時代には、ほとんどが木像になりました。その木像も、最初のころは一本作りでしたが、後に木寄せ法が発明されて、一そう彫刻は発達しました。

この時代初期のものとして、絵画では、神護寺（じんごじ）の両界まんだら、金剛峰寺の赤不動、室生寺（あかふどうむろうじ）と醍醐寺（だいごじ）に残っている壁画などが代表的なものです。また彫刻では、法華寺（ほっけじ）の十一面観音像、虚空蔵（こくぞう）像、観心寺（かんしんじ）の如意輪（にょいりん）観音など密教美術の特色をよく現わしています。

次に、この時代中期以後の美術として、絵画では、藤原隆能（たかよし）作の源氏物語絵巻、鳥羽僧正作といわれる鳥獣戯画、土佐光長（とさみつなが）作の伴大納言絵詞（だいなごんえことば）、仏画の方では法華（ほっけ）寺の阿弥陀来迎図（あみだらいごうづ）、国立博物館にある普賢（ふげん）菩薩の像などがあります。また彫刻では、鳳凰堂（ほうおうどう）の阿弥陀如来（あみだにょらい）、金色堂（こんじきどう）の観音像などがよく知られています。

〈鳥獣戯画〉

この時代の美術の特徴は、非現実的なものから、現実的なものに移行してきたことで、これを仏画でみると、初期の神秘的な感じを現わそうとした描き方がだんだん用いられなくなって、中期以後は、背景にも、この世の景色が描かれ、仏の姿も美しく描かれるようになっています。また大和絵の発達過程を見ても、現実的な表現が強くなり、日本的な情趣と、人間的な情緒を現わすことに力が注がれています。

鎌倉時代（一一八五年―一三三三年）

この時代は、源頼朝が鎌倉に幕府を開いて、武家政治をはじめたころから、歴史に名高い楠正成（くすのまさしげ）・新田義貞（にったよしさだ）・足利尊氏（あしかがたかうじ）などが朝廷を押したてて幕府と戦い、ついに幕府を倒したころまでです。

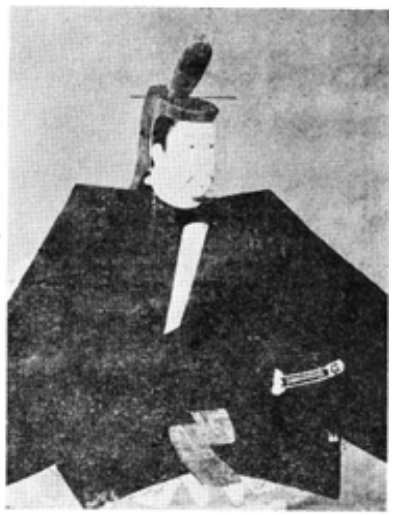
この時代のきびしい社会的な変革に伴って、社会思想は一段と現実的になりました。そこで、美術も自然とそれを反映して、理知的な傾向が強くなっています。

絵画の方では、仏画に知恩院（ちおんいん）の早来迎図（そうらいごうず）東寺（とうじ）の十二天（じゅうにてん）屏風などがあり、肖像画に藤原隆信（たかのぶ）作の源頼朝像、藤原信実（のぶざね）作の後鳥羽（ごとば）天皇の

像、藤原豪信（たけのぶ）作の花園（はなぞの）天皇の像などがあります。また絵巻には、藤原信実作の三十六歌仙（かせん）、土佐青光（とさよしみつ）作の一遍上（いっぺんしょう）人（にん）伝、住吉慶恩（すみよしけいおん）作の平治物語（へいじものがたり）絵巻などがあります。

彫刻には、興福寺（こうふくじ）の不空羂索観音（ふくうけんじゃくかんのん）像、東大寺の地蔵菩薩、三十三間堂（げんどう）の仏像、鎌倉の大仏などがあります。

〈不空羂索観音像〉



〈源頼朝像〉藤原隆信

鎌倉時代の美術で、仏像や仏画は、一般の民衆に理解しやすいように説明的な表現になり、静的なものから動的なものに変わってきました。しかし、宗教画に必要なロマン性が少なくなったため、美術としての価値は低下しました。また大和絵も、現実的で、精細なものにはなったが、その特色とする叙情性が乏しくなったため、芸術品としては、価値が低くなりました。ただこの時代で、前代よりも発達したのは肖像画で、この方にすぐれたものが多く

現われました。その他には、この時代の後期に、禅宗の渡来とともに、宋（そう）・元（げん）の画風が輸入されました。この画風は、素朴で高い精神を追求したもので、従来の日本美術に新風を吹きこんだものといえます。

室町時代（一三三三年―一五六八年）

この時代は、南北朝を経て足利氏が京都の室町に幕府を開いたころから、織田信長（おだのぶなが）が、足利氏に代わって天下を統一したころまでです。

この時代の美術は、前代後期に続いて、大陸から伝来した宋・元文化の影響を受け、大きな変化を見せました。そして、これまでの日本美術は、宗教や文学に従属したものでしたが、この時代から独立した芸術として発達し、また鑑賞されるようになりました。

絵画の方面では、禅僧の間に水墨画がおこなわれ、如拙・周文・雪舟（しゅうぶん）のような大家が現われました。また画壇には、狩野正信（かのうまさのぶ）・元信（もとのぶ）父子が現われて漢画が大成されました。そして、その後四百年の長い間、日本画壇の中心となった狩野派の基礎が築かれたのでした。一方大和絵は、前時代にょく発達を見せ、この時代には水墨画に押されて、余り進歩の跡はみえませんでした。

水墨画で有名なのは、如拙のひょうでんなまずの絵、周文の山水、雪舟の天の橋立などです。狩野派では、正信の山水、元信の将相（しょうそう）八景などが知られています。大和絵では、土佐光顕（みつあき）の直幹申文絵詞（なおもともうしぶみえことば）土佐行光（ゆきみつ）の誓願寺縁起（えんぎ）、土佐光信（みつのぶ）の北野天神縁起（きたのてんじんえんぎ）などがあります。

彫刻は、この時代に目だつほどの進歩を見せず、わずかに肖像彫刻にいくぶんか新しいものが現われたほか、能楽の発達に伴って、仮面の制作に新しい展開をみただけでした。

この時代の美術の特色は、水墨画の発達によって、従来の絵画に見られなかった精神の高さを示したことです。また漢字では狩野派が大和絵の画法を取り入れ、内容の方でも、日本的なものを豊かにしました。一方、大和絵の方も、漢画の画法を取り入れて、いわゆる土佐派という画風を作りあげました。このように大陸から伝わった美術が、まったく日本的なものに消化されたのがこの時代です。

桃山時代（一五六八年―一五九八年）

この時代は、天下の実権が織田信長から豊臣秀吉（とよ

とみひでよし）に移ったわずか四十年たらずの期間です。しかし、日本美術のうえで、他のどの時代とも違うものが現われていますので、桃山時代という名称が与えられています。この桃山というのは、秀吉が伏見（ふしみ）の桃山に城を構え、天下を治めたので、それによるものなのです。

この時代は、乱世が統一されて、安定を見せた時なので、美術に自由で生新なものが現われました。前時代から見えてきた漢画と大和絵の折衷は、いよいよその特色を現わし、金碧（きんぺき）装飾画と呼ばれる佳麗な画風を流行させました。題材に壮大なものが選ばれるようになり、強い線、濃い色彩が使われるようになりました。彫刻も、宗教的なものが少なくなり、装飾的なものがよく発達しました。

絵画では、特に屏風絵、ふすま絵、壁画が発達して、狩野派が栄えました。狩野永徳（かのうえいとく）の唐獅子（からじし）、海北（かいほう）友松のぼたんと梅の絵、長谷川等伯（はせがわとうはく）の松林図などが知られています。

彫刻では、工芸的な装飾として、琵琶（びわ）湖の竹生島にある神社の欄間、宝厳寺（ほうごんじ）欄間などが有名です。また、この時代に、彫刻と関連して発達したものに陶磁器があります。楽（らく）焼、瀬戸（せと）焼、織

部（おりべ）焼、唐津焼など、茶の湯の発達と共に大いに興隆しました。

この時代の美術の特色は、装飾画の発達です。それは、武将の造築した広大な城や邸宅の内部を飾るために求められたものでした。そして、武将たちは文雅の教養に乏しかったので、彼等に理解し易い現実的な表現のものでなければなりませんでした。そこで、前時代に発達した禅僧の水墨画に比べると卑俗なものといえますが、明るく自由な気分に満ちたものでした。

江戸時代（一五九八年―一八六七年）

この時代は豊臣氏が滅びて徳川家康（とくがわいえやす）が江戸に幕府を開いたころから、明治政府がたてられるころまでです。三百年近くも平和が続いたので文化が高まり、美術の面でも、他の時代に見られないすぐれたものが現われました。

江戸幕府が開かれ、政治の中心が関西から関東に移ったので、文化の中心もしだいに東の方へ移っていきました。

まず、絵画の方を見ますと、この時代の初期には、京都から江戸に移った狩野派が栄えました。江戸では探幽が最もすぐれていて、「帝鑑図（ていかんず）」その他よい絵

を残しています。また京都では、山楽（さんらく）が出色で、「紅梅図―ふすま絵」が知られています。漢画の流れをくむ狩野派は、室町時代以来、幕府の御用絵師として栄えたが、画風がだんだん安易になっていきました。この時代になって、こうした狩野派に対抗する在野の画家たちの活動がめざましくなりました。

その一は、大和絵を復活しようとする土佐派、琳派（りんぱ）などの動きでした。土佐派は、長い間衰えていましたが、この時代に土佐光起（みつおき）というすぐれた画家が出て、再び栄えてきました。その「うずらの図」は、大和絵に宋・元の画風を取り入れて描いたもので、絶品といわれています。その他、大和絵の系統では、住吉具慶（すみよしぐけい）、本阿（ほんな）弥光悦（みこうえつ）、俵屋宗達などの名がよく知られています。琳派というのは、尾形光琳（おがたこうりん）とその弟乾山（けんざん）を中心とする一派で、狩野派と土佐派の画風を取りあわせ、しかも新鮮な独自の画風を示しました。

その二は、中国から伝えられた南画です。江戸時代も中期になって、文化は全国にゆきわたり、教養の高い人が多くなりました。そういう人たちは文学的で詩情に富んだ南画をよろこんで迎えました。南画で、日本独特の画風を生み出した人に池大雅（いけのたいが）があります。なお南画は、この時代の後期にはいっていっそう栄え、谷文晁

（たにぶんちょう）、田能村（たのむら）竹田、渡辺崋山、椿椿山（つばきちんざん）などのすぐれた画家が現われました。

その三は、自然をありのままに写すところの写実主義を唱えた円山応挙（まるやまおうきょ）の円山派であり、その四は、しゃれた技法で注目された四条派です。この外に西洋画の影響を受けた平賀源内（ひらがげんない）、司馬江漢（しばこうかん）なども新しい画風を示して、在野画家の実力を世に問うたのでした。

しかし、なんといっても、最も近代的な在野性を示したのは、この時代の後期を飾った浮世絵（うきよえ）でありましょう。現世の風俗を描いて、広く民衆に迎えられた浮世絵が、その大衆性に応じるため、肉筆画から版画に移り、その技術を世界無比の高さに向上させたことは、日本美術のうえで、この時代最大の収穫であったといえます。

浮世絵は、はじめ丹絵（たんえ）と言われた幼稚なものが、紅絵（べにえ）に発達し、錦絵（にしきえ）となって完成しました。有名な画家としては、鈴木春信、喜多川歌麿（きたがわうたまろ）、歌川豊春（かやまとしはる）、東州斎写楽、葛飾北斎（かつしかほくさい）、一立斎広重（いちりゅうさいひろしげ）などがあります。そして、それらの浮世絵は西洋にも渡り、洋画に大きな影響を与えました。

彫刻は、桃山時代の風をうけつざましたが、封建的な三百年の流れは、新風を生みだすにいたりませんでした。

現代（一八六七年―今日）

明治になって新しい政治がはじまると共に、これまで外国との交際を断っていた日本も、世界の国々の仲間入りをし、西欧から制度・思想・科学・技術をどんどん取り入れ、近代国家として生まれ変わっていきました。それにつれて、日本の美術も西欧の影響を受け、非常な進歩と発展を示しました。

絵画の方で、まず洋画が発展しました。西洋画の影響は、前時代から見られましたが、まだ表面的なものに過ぎず、余り深いものではありませんでした。この時代になって、日本の洋画は本格的なものになりました。中でも、明治の中期に西欧留学を終えて帰国した黒田清輝（くろだきよてる）は、印象派の中の外光派とよばれる新しい技法を伝えました。そして、これに学んで、和田英作（わだえいさく）、岡田三郎助、藤島武二（ふじしまたけじ）などすぐれた画家が現われました。ところが大正時代になってから、西欧に反写実主義の画風がおこり、これが日本に伝わってきました。そして古いものを捨てて新しいものに置きかえようとする若い画家たちの活動がさかん

になり、安井曽太郎（やすいそうたろう）、坂本繁二郎（さかもとしげじろう）、梅原竜三郎（うめはらりゅうさぶろう）、藤田嗣治（ふじたつぐじ）などが現われました。そして、これらの人々を中心に、二科会、春陽会その他多くの美術団体が生まれ、いろいろな流派が生じ、それらに所属する画家は数え切れないほどです。昭和以来、大都市では毎日のように、どこかで絵画展覧会が催されていて、現代はまさに展覧会時代という感さえあります。

一方、伝統的な日本画も、これまた古典を生かし、しかも近代精神をもりこんで、新日本画としての面目を一新しました。

明治の初期には、狩野派や土佐派は影をひそめ、ただ一つ南画だけが栄えて、富岡鉄斎（とみおかてっさい）のようなすぐれた人も現われましたが、日本画は洋画に押され、衰えを見せていました。そのころ、東京大学の講師として来朝したアメリカ人フェノロサは、日本の古美術に興味をもち、その研究に力を注ぐかたわら、日本画の復興につとめました。また日本美術の持つ高い芸術性を信じ、その真価を欧米に認めさせました。岡倉天心（おかくらてんしん）は、フェノロサの助手をつとめているうちに、彼に感化され、共に日本画の復興に力をつくしました。そして、フェノロサ・岡倉天心を中心に、狩野芳崖（かのうほうがい）・橋本雅邦（はしもとがほう）などが、その運動

に参加し、それを母胎として、横山大観（よこやまたいかん）・寺崎広業（てらざきこうぎょう）・菱田春草（ひしだしゅんそう）・小堀鞆音（こぼりともね）・下村観山（しもむらかんざん）・川合玉堂（かわいぎょくどう）・竹内栖鳳（たけうちせいほう）などすぐれた画家が現われました。

この新しい日本画も、大正・昭和と年月を経て、構成や表現に新傾向を見せてきましたが、今後の世界的な絵画の流れの中に、いかにして、その独自な系譜を伝え、発達させていくか、ということが期待されています。

日本の彫刻をながめると、時代がくだるに従って次第に衰えています。明治以後の彫刻は、必ずしも前代にまさるとは言えません。彫刻の多くは、職人の仕事となり、わずかに、木彫の再興者として高村光雲（たかむらこうううん）があり、その外欧米に学んで名をなした人に長沼守敬（ながぬましゅけい）、新海竹太郎（しんかいたけたろう）、朝倉文夫（あさくらふみお）などがあります。

二　現代の日本

一九四五年に、太平洋戦争は終結しました。その時、日本の首都東京は、見るかげもない焼け野が原となっていました。その焼けあとに残っていた建物の一つに国会議事堂があります。新しい日本の歩みは、この議事堂から始まりました。主権在民の新しい憲法が発布され、永久の平和を唱えて、戦争の放棄が宣言されました。世界の移り変わりと進歩とに歩調をあわせて進む、新日本の行くてを照らす光は、この議事堂から発しているといえましょう。

〈日本の国会議事堂〉

太平洋戦争が終わった時、日本の国民は、過去の歩みを深く顧みると共に、新しい決意のもとに祖国の再建にとりかかりました。まず軍国主義や国家主義を取り除き、民主主義をよみがえらせることに着手しました。軍隊を廃

し、右翼団体を解散させました。言論や集会の自由を認め、政治運動や文化活動をさかんにしました。そして、一方では、産業、経済の民主化を進めていきました。財閥を解体させ、農地改革を行ない、労働組合法を制定して、国民の生活水準を高めるよう努力しました。教育の面でも民主化はおし進められ、その原則となる教育基本法が定められ、学制は六・三・三・四制に改められました。

こうした多くの変更や改革の中で、最も重要なことは、日本国憲法が、大きく改められたことです。それによって、法律や制度も改められ、個人の尊重と男女の平等を原則とする国民生活の基本がたてられました。戦争が終わった直後は、食料の不足とインフレーションのため、社会の秩序は乱れ、国民は生活に苦しみました。しかし、政府の行なった再建築によって、文化は進み、産業はひらけて、日本の復興は急速に行なわれていきました。

このように、日本は戦争を境として大きく変わりましたが、世界の情勢もまた、すっかり変わりました。ソビエト連邦は、戦後、急速に立ち直って、強力な社会主義国家をたてました。また、東ヨーロッパや東アジアには、ソビエト連邦の後援を得て、共産党を中心とする国々ができたので、ソビエト連邦は、世界の強国となりました。一方、アメリカ合衆国は、戦後ますます強力な国家になり、自由

主義国家群の旗頭になりました。

このように、欧米の様子は変わりましたが、またアジアの様子も一変しました。アジアの諸民族は、大戦の終局をきっかけとして、次々に独立国を建てました。インド・パキスタン・セイロン・ビルマ・マレイシアがイギリスから独立し、インドネシアがオランダから、フィリピンがアメリカ合衆国から独立しました。また中国に、中華人民共和国という社会主義国家がおこりました。

日本は、民主主義国家として、こうした世界の情勢に対処しながら、各国との国交を回復していきました。日本は、国際連合に加盟して、一九五八年には、安全保障理事会の非常任理事国となって、国際的な地位をますます高めています。

日本の国際的な地位が高くなったのは、国力の増大と、国際的な信用が深くなったことを物語るものです。国力の増大に、最も大きな役割りを果たしているのは、産業と経済の発展です。特に、鉱・工業面の発達はめざましく、生産技術の進歩と施設の充実とによって、日本は戦前の軽工業国から脱皮し、重工業国として発展しつつあります。

また、文化の面でも、固有の文化を育てると共に、世界の文化を取り入れ、各国との交流を計り、新日本文化の価

値を高めつつあります。ことに、自然科学の発達はめざましく、一九四九年には、湯川秀樹（ひでき）博士が、一九六六年には、朝永振（ともなが）一郎博士が、ノーベル物理学賞を受け、一九五七年には、南極大陸の科学的な調査に参加するなど、日本の科学研究は、世界から注目されています。

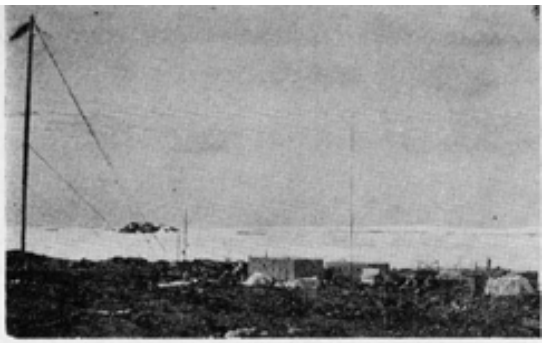
〈ノーベル賞を受けた湯川秀樹〉

文学や美術の面にも新風がおこり、美術館や劇場の建設もさかんに進められています。また映画は、国際的な水準に達して、外国に輸出され、各種スポーツは栄えて、海外への遠征も年々増加しています。ラジオ・テレビの発達は、アメリカ合衆国に次ぐといわれ、印刷文化の発展と共に、国民の教養を高めるための役目を十分に果たしています。

現代の世界文化で、最も注目されるのは、科学の進歩で、そのとどまるところを知らない前進ぶりは、人類の生活と思想に大きな変化を与えつつあります。中でも原子物理学の発達はめざましく、原子エネルギーの開発が進

められています。原子爆弾の製造、さらに水素爆弾が製造されて、戦争は人類の滅亡を意味することになりました。一方、原子力の平和利用は進められ、医学・農業・工業、また交通機関の動力としても用いられようとしています。航空機の発達も非常なもので、ジェット機の発達と、ロケット技術の進歩により、人類は、宇宙時代への第一歩を踏み出しました。

日本は、こうした世界の科学と文化の発達に歩調を合わせ、世界の平和と人類の幸福のために、たゆまぬ努力を続けています。



〈南極基地〉

ボルガの舟引歌

作詞　堀内敬三
ロシア　民謡

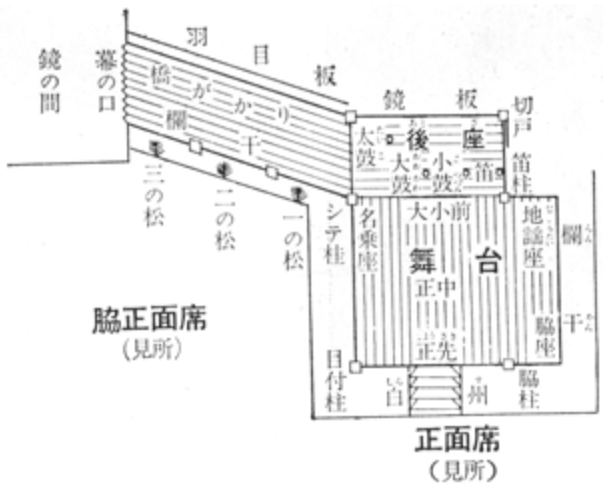
引けよ　引けよ　心を合わせ
引けよ　引けよ　歌声高く
流れて　つきぬ　ボルガの水と
たくましき　わが腕よ　力をきそえ
引けよ　引けよ　心を合わせ
引けよ　引けよ　心を合わせ
引けよ　引けよ

引けよ　引けよ　心を合わせ
引けよ　引けよ　歌声高く
みなかみ　遠き　のぞみのかたへ
はてしなき野を越えて　たゆまず進め
引けよ　引けよ　心を合わせ
引けよ　引けよ　心を合わせ
引けよ　引けよ

むかしの劇

一　能と狂言

能楽は、能とも言う。外来の舞楽や、古い伝統を持つ田楽（でんがく）・猿楽（さるがく）の能及び諸種の舞いや節（ふし）を折衷して成った仮面楽劇である。能舞台にシテ・ワキ・ツレなどの役者が出場し、謡曲を謡いながら、笛・大鼓（おおかわ）・小鼓・太鼓の囃（はや）子（し）に合わせて演じる。足利義満（あしかがよしみつ）の時、観阿弥（かんあみ）が出て、その子世阿弥（ぜあみ）に至って今日みる能楽が完成した。武家の式楽（しきがく）となり、観世（かんぜ）・宝生（ほうしょう）・金剛（こんごう）・金春（こんばる）の大和（やまと）猿楽の四流を四座と称



〈能舞台の図〉

し、ついで江戸時代に喜多（きた）流が起こった。

狂言は、能狂言という。平安時代に既に発達していた猿楽（さるがく）演劇の中、一は真面目（まじめ）で幽玄味を持つ能楽に発達するとともに、他の滑稽（こっけい）を主とする猿楽本来の要素が、更に洗練されて、能楽と共に行なわれる物真似（まね）を本体とする笑劇として発達したものが、この能狂言である。鎌倉時代に行なわれ、能楽と併行して室町時代には主要な民衆娯楽となり、江戸時代初期に大蔵（おおくら）流・鷺（さぎ）流・和泉（いずみ）流が鼎（てい）立し、能楽に伴ない幕府の式楽となった。能楽と共に番組に組入れて演ぜられ、また能楽中に狂言方として登場し能の一部を演ずる。能狂言は、祝言（しゅうげん）の心持を表わす脇狂言、能に擬した仕舞物の外、曲中の人物を標準として分類すると、大名物・百姓物・婿物・坊主物・女物・盗人（ぬすびと）物・座頭物などの片輪物・冠者物・鬼物・雑物などとなる。

次に、能の「羽衣」と能狂言の「いろは」を出しておいた。

「羽衣」は世阿弥の作で、各流で演ぜられる、代表的能ともいわれるものである。天人が、三保の松原へ羽衣を掛けて置いたのを漁夫の自竜が見つけ、持って帰ろうとするので、天人が呼びとめ哀願して羽衣を返してもらい、「東遊（あずまあそび）」を舞いながら上天するという筋であ

るが、むずかしいので、全文現代語化し、謡曲物語にしておいた。

「いろは」は、狂言のなかでも短いものである。内容解説するまでもない。くりかえし読めば、その真意は層一層、納得できて、興味がわいてくるにちがいない。

二　羽　衣　（口語訳）

ワキ　漁夫自竜
ワキツレ　漁夫の連二人
シテ　天人

駿河（するが）の国三保の松原のほとりに、自竜（はくりゅう）という漁夫が住んでいた。この所のありさま、あの万葉集に「風早（かざはや）の三保の浦わをこぐ舟の、浦人さわぐ波たつらしも」と詠（よ）まれて、波風の荒い大海を控えているが、常の景色はのどかで「千里の好山に雲たちまちにおさまり、一楼の明月に雨初めて晴る」という古詩の趣きがある。時しも春の波おだやかに、空には残んの月が見えて、朝霞（がすみ）がたなびきわたり、心無い身もそぞろにこの佳景に誘われたのか、今しも自竜は、

他の漁夫と共に住家を出、うち連れて来たのだが、朝風はそよそよ吹いて松林に通い、釣をする小舟は数知れず、波間に浮かんでいる。心もことばも及ばないながめよと、自竜はしばらく松原にたち休んでいたところ、不思議なるかな、虚(こ)空から花が降り、音楽が聞こえ、霊香（きょう）が四方に薫じわたったので、こわ、ただごとならずと、見まわすと、傍（かたわら）の松の枝に美しい衣が掛かっている。立ち寄ってよく見ると、色香がすぐれて世の常の物ではない。

〈羽　衣〉

（白竜）「いいものを見付けた。持ち帰って古い人にも見せ、家の宝にしよう。」

とて取り下ろし、立ち去ろうとする折から、どこからともなく、頭には天冠をいただき、身には見なれない衣をまとった美しい女が一人あらわれ出て、

（天人）「それは、わたしの衣です。なぜお持ちになるんです。」
　という。
（白竜）「これは拾った衣だから、取って帰るのだ。」
（天人）「それは、天人の羽衣と申して、この世の人に与えるものではありません。元のように掛けてお置きなさい。」
（自竜）「この衣の主といわれると、御身は天人でいらっしゃるか。それならいよいよ返すことはできない。末の世まで記念として、国の宝ともしよう。」
（天人）「羽衣がなくては飛ぶこともならず、天上へ帰ることもかないません。ぜひにお返しください。」
　自竜は、このことばを聞いて、いよいよ欲心が起こり、
（自竜）「知らなかったときは、ともかくも、天の羽衣と承知した上は、どうして返すことができようぞ。」
　といい、かの衣をとりかくして立退（たちの）こうとする。天人は、まるで翼を失った鳥のよう、上天しようにも衣はなし、さりとて下界に住むことのできる身でもない。とやせんかくやせんと、ひとり嘆いているが、自竜はつれなくも衣を返す様子もない。天人はせん方つきて涙にくれ、玉かずらのかんざしの花とともにうちしおれて、かの天上界にも免れられないという五衰のさまをまのあたりに見せたが、せめてもの心やりと、大空をふりさけて見る

が、霞がたちわたって天路（あまじ）も定かではない。
　あの雲の行くあたりが住みなれた空だろうかと、いたずらに雲の身を羨（うらや）むばかりである。天上にいたときは、聞きなれていた迦陵頻伽（かりょうびんが）の声も、今は耳遠い。天路を帰る雁（かり）、波の上を飛ぶ千鳥、鴎（かもめ）も慕わしく、空に吹きかう風までもなつかしく　なって嘆き悲しむ。このありさまを見た白竜は、ついに心を動かし、
（自竜）「あまりにもおいたわしい。衣をお返ししよう。」
　といったので、天人は、大よろこび。
（天人）「こんなうれしいことはありません。では、お返しくださいますか。」
　という。
（白竜）「まず、お待ちなさい。聞き及んだ天人の舞の一曲をこの機会に拝見したい。その上でお返ししよう。」
（天人）「衣が戻り、天上に帰れる喜びに、御身の望みをかなえて、この世のなごりに、おもしろい天上の一曲をかなでて人間界に伝えていくことにしましょう。しかし、衣が無くては舞も舞われませんから、まずそれをこちらへお返しください。」
（自竜）「もし、あなたに、衣をお返ししたら、舞も舞わずに、そのまま天にお上りなさるだろう。」
（天人）「いいえ。そのような疑いは、人間にこそあれ、天

には偽りというものはありません。」
自竜は、大いに恥じて、
（白竜）「恥ずかしいことを申しました。さらばお返し申しましょう。」
とて、羽衣を返すと、天人はこれを身にまとって霓裳羽衣（げいしょううい）の曲を舞い始めた。わが日本の神事に行われる東遊（あずまあそび）の駿河舞（するがまい）は、天人の故事によるということだから、このときが始まりなのかもしれない。
さて天人は、まず天（そら）ということばの起原を説き、この天にある月宮殿の事におよび、このご殿には、白衣の天人、黒衣（こくえ）の天人、おのおの十五人が役を定めて毎月夜々の奉仕をするのだが、わたしもその中の一人である。今、天上に住む身を分けて、かりにこの日本に下り、月宮の神舞を伝えるぞと語った。さていよいよ歌曲に移り、折から春霞のたなびくのどけさには月の世界の桂（かつら）の花も咲くであろう。ことに風はこの世にも隔てず通ってくれば天上でないが心地（ここち）のよさは変らない。この風がしばらく雲路を吹き閉ぢたからこそ、天つ少女（おとめ）の姿がとどまってこの松原の春の色をそえたのだ。清見潟（きよみがた）の月、富士の根の雪、いずれの色よりかは知らぬが春は明け初めて、松の風、浦の汲、静かに晴れやかなありさま、なんとも言いよ

うがない美しさ。そもそも天上下界とは別れても、この日本は、伊勢にいらっしゃる大神のみすえのお治めになる所、くもりないこと天上の月の世界にも比する日の本の国で、「君が代は天（あま）の羽衣まれに着て撫ずとも尽きぬ巌（いわお）なるらん。」とある歌のように、根ざすところ堅く、末久しいと歌う。その東歌（あずまうた）の声も妙（たえ）な上に音（ね）に添える簫（しょう）や笛や琴や箜篌（くご）などの管絃の数々が雲の外まで響き渡り、山際（ぎわ）を染める落日のくれない、海づらを色どる波の青さと映じ合う間に、白衣の袖ふる舞の姿が、たとえようもなく美しい。こうして、天人は大空に向かって合掌し、月の本地、勢至大菩薩（せいしだいぼさつ）の名を唱えて、東道（あずまあそび）の舞を奏（かな）でると、春風のまにまに、翻る袖は、あるいは大空のみどりの色に通い、あるいは春霞のたなびくのにまがい、色香と妙（たえ）な裳裾（もすそ）を曳（ひ）きながら左右左（さゆうさ）の差す手引く手、見るには目もあやである。こうして東遊の曲も数重なり、天人はこの十五夜の空高く舞い上がって、澄みわたる満月の影のように現われ、請願を満たし、国土を治め、種々の宝をふらせてこの日本に下すうちに、時は移って行って、曲もおわった。今は天上に帰ろうと、天人は羽衣を浦風になびかせながら、ここ三保の松原の空から、浮島が原の雲間高く空かけるかと見えたが、は

るかに愛鷹山（あしだかやま）より富士の高根に舞い上がる。
その影はいよいよかすかになって、ついに霞にまざれて見えなくなってしまった。

（謡曲物語による口語訳）

三　いろは

親　是（これ）は、此当（このあた）りに住居（すまい）致す者（もの）で御（ご）ざる。某枠（そがれしせがれ）を一人持（いちにんもっ）て御（ご）ざるが、今日（こんにつ）は最上吉日で御座（ござ）るに仇（よつ）て、手習（てなら）ひを致（いた）させう（ショウ）と存（ぞんず）る。先（まず）かな法師（ぼうし）を呼出（よびいだ）いて申付（モウシツ）う（キョウ）。なうなう（ノオノオ）金法師（かなぼうし）、おりやるか、居（い）さしますか。
シテ　呼（よば）せられまするか。
親　中（なか）中。そなたを呼出（よびいだ）す事別成事（べつなること）でもおりない。けふ（キョウ）は最上吉日（さいじょうきちにち）じゃに依（よっ）て、手なら

ひ（イ）を教（おしよ）うとおもふが、何（なに）と有（あろ）うぞ。

シテ　一段と能（よ）う御座（ござ）りませう（ショウ）。

親　去（さり）ながら、手習（てならい）をするには白い黒いを知らねば成（な）らぬが、知ってゐ（イ）るか。

シテ　白いは鷺（さぎ）、黒いはからすで御ざる。

親　其事（そのこと）ではなけれ共、夫程迄（どもそれはどまで）に合（が）点（てん）が行（ゆけ）ばよい。爰（ここ）に高野（こうや）の弘法（こうぼう）大師（だいし）の作らせられた四十八字のいろはが有（あ）る。是（これ）を教（おしえ）てやらう。

シテ　何（なに）と仰らるる。高野の弘法大師は四十八に成らせらるるか。

親　いやいや、さう（ソウ）では無い。弘法大師の作らせられた四十八字の伊呂（いろ）波（は）といふ（ユウ）物が有る。是を教へ（おしエ）てやら（ロ）う。

シテ　夫成（それな）らば教へて被下（くだされ）い。

親　いろはにほへとちりぬるをわかゑ（え）ひもせず京と読め。

シテ　其様（そのよう）に立板（たていた）に水を流す様に仰られては、え覚へ（おばエ）ませぬ。祖父（おほじ）の坂を上る様にほつくりほくりと、一字一字にをしへ（エ）て被下（くだされ）い。

親　是(これ)は尤（もっとも）じゃ。夫成（それな）らば一字一字に教へ（エ）てやら(ロ)ぅ。
シテ　灯心(とうしん)。
親　何事(なにごと)をいふぞ。
シテ　藺（い）を引（ひけ）ば灯心が出まする。
親　其事（そのこと）では無い。ろ。
シテ　櫂(かい)。
親　何事をいふ（ウ）ぞ。
シテ　舟には艪櫂（ろかい）が入（いり）まする。
親　船には入（いろ）うと是には人（い）らぬ。ちり。
シテ　ヤイヤイ。御座敷(おざしき)に塵が有る程に、箒(は)きあつめて火にくべいやい。
親　ヤイヤイ、何事をいふ（ウ）ぞ。
（０４２．ｊｐｇ　上段下段あり　ことば一覧表あり）
シテ　いつも御座敷に塵（ちり）が御座（ござ）れば、箒(はき)あつめて火にくべまするに依（よっ）て、其事（そのこと）かと存（ぞんじ）て御座る。
親　惣（そう）じておのれが智恵（ちえ）ははしりぢゑ(ヂエ)といふ（ウ）て何（なに）の役（やく）にたたぬ。是（これ）からは某(そがれし)がいふ(ウ)様(よう)する様に口真似(くちまね)をせい。
シテ　畏（かしこまっ）て御座る。
親　いろはにほへと。

シテ　いろはにほへと。
親　ちりぬるをわか。
シテ　ちりぬるをわか。
親　ゑひもせず京とよめ。
シテ　ゑひもせず京とよめ。
親　もう能（よ）い。行（い）て休め。
シテ　もう能い。行て休め。
親　いて休めとはおのれが事じゃ。
シテ　いて休めとはおのれが事じゃ。
親　おのれ天窓（あたま）をはらうぞよ。
シテ　おのれ天窓（あたま）をはらうぞよ。
親　つめらうぞよ。
シテ　つめらうぞよ。
親　おのれは憎（にく）いやつめ。口まねをせいと云へ（いエ）ば方りゃうもない、親に世話をやかする。おのれが　様なやつはまづかうして置（おい）たがよい。
（と云て引廻し打たふす。）
シテ　親じゃといふ（ウ）てまくる事ではない。ヤアヤア。（と云（いう）て引廻し打（うち）たふ（オ）いて、）
参（まいっ）たの。勝たぞ勝たぞ。
親　親を此様（このよう）にしてしゃ（将）う来が能（よ）う有るまい。とらへ（エ）て呉（くれ）い。やるまいぞやるまいぞ。

オールド　ブラック　ジョー

作詩　緒園　涼子

若き日　はや夢と過ぎ
わが友　みな世を去りて
あの世に　楽しく眠り
かすかに　われを呼ぶ

《オールド　ブラック　ジョー》

われも　ゆかん　はや老いたれば
かすかに　われを呼ぶ　オールド　ブラック　ジョー

などてか　なみだぞいずる
などてか　心はいたむ
わが友　はるかに去りて
かすかに　われを呼ぶ

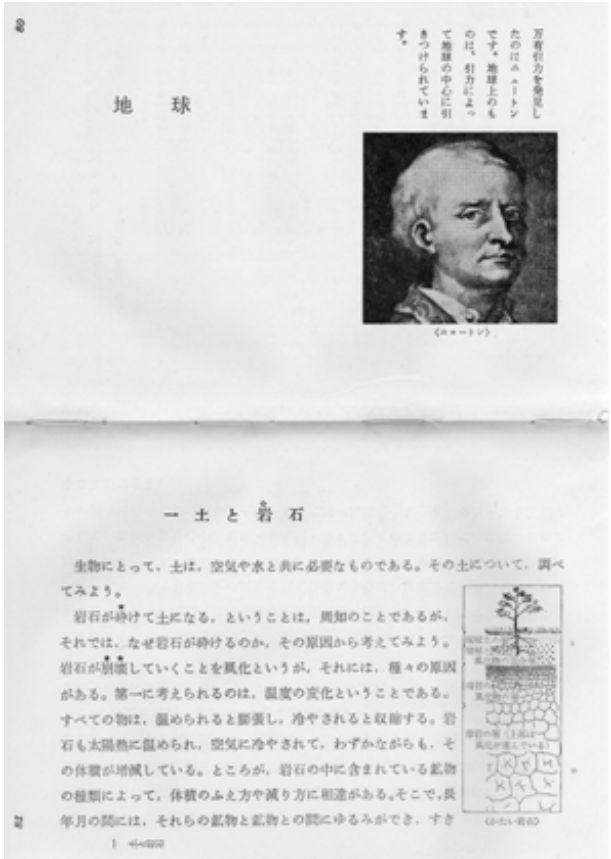
（くりかえし）

楽しき　心かえらず
うかぶは　わびしき思い
いこいの　夢路にさえも
かすかに　われを呼ぶ

（くりかえし）

（０４４．ｊｐｇ　挿絵あり　０４６．ｊｐｇまで　横書き）

地球



地　球

万有引力を発見したのはニュートンです。地球上のものは、引力によって地球の中心に引きつけられています。

〈ニュートン〉

一　土と岩石

生物にとって，土は，空気や水と共に必要なものである。その土について，調べてみよう。

岩石が砕けて土になる，ということは，周知のことであるが，それでは，なぜ岩石が砕けるのか，その原因から考えてみよう。岩石が崩壊していくことを風化というが，それには，種々の原因がある。第一に考えられるのは，温度の変化ということである。すべての物は，温められると膨張し，冷やされると収縮する。岩石も太陽熱に温められ，空気に冷やされて，わずかながらも，その体積が増減している。ところが，岩石の中に含まれている鉱物の種類によって，体積のふえ方や減り方に相違がある。そこで，長年月の間には，それらの鉱物と鉱物との間にゆるみができ，すき

万有引力を発見したのはニュートンです。地球上のものは、引力によって地球の中心に引きつけられています。

一　土と岩石

生物にとって，土は，空気や水と共に必要なものである。その土について，調べてみよう。

岩石が砕けて土になる，ということは，周知のことであるが，それでは，なぜ岩石が砕けるのか，その原因から考えてみよう。岩石が崩壊していくことを風化というが，それには，種々の原因がある。第一に考えられるのは，温度の変化ということである。すべての物は，温められると膨張し，冷やされると収縮する。岩石も太陽熱に温められ，空気に冷やされて，わずかながらも，その体積が増減している。ところが，岩石の中に含まれている鉱物の種類によって，体積のふえ方や減り方に相違がある。そこで，長年月の間には，それらの鉱物と鉱物との間にゆるみができ，すき

種々の原因がある。第一に考えられるのは，温度の変化ということである。

すべての物は，温められると膨張し，冷やされると収縮する。岩石も太陽熱に温められ，空気に冷やされて，わずかながらも，その体積が増減している。ところが，岩石の中に含まれている鉱物の種類によって，体積のふえ方や減り方に相違がある。そこで，長年月の間には，それらの鉱物と鉱物との間にゆるみができ，すき間ができて，いつとなく岩石がくずれていくのである。

また，岩石を崩壊させるものに水と空気がある。降雨，流水などは，岩石を打ちこわし，削り取る。空気中の酸素や炭酸ガスなどは，岩石を溶解し，また空気は風となって，岩石を吹き飛ばし，吹き削って，その崩壊を速めながら土を造成する。

その外，土を造成するものに生物と火山がある。生物は岩石をくずして土を造り，また生物自体も土となる。火山は爆発して火山灰を降らせ，一度に大量の土を造成する。

このようにして造成された土は，どのような成分を持っているであろうか。土は主として，岩石の風化によってできた無機物と，動植物が腐敗してできた有機物とが混合したものである。土の成分で最も多量なものは，珪酸（けいさん）分であり，そのほか，鉄・アルミニウ

ム・カルシウム・カリウム・ナトリウム・りん・窒素などがある。

そして，これら成分の中，窒素・りん酸・カリが，どのような形で，また，どのような割合で混合しているか，土塊をとって調べれば肥えた土とやせた土とを区別することができる。

君が代は　千代に八千代に　さざれ石の
いわおとなりて　こけのむすまで

これは，日本国歌の歌詞で，国が永遠に繁栄することを希求する，ということを詠じたものである。その「永遠に」ということを，「さざれ石の　いわおとなりて」ということばで表現してあるが，砂や小石も，長年月を経れば，岩石となるであろうか。もしなるものとすれば，さきに調べた土の造成原因とは逆になってしまうではないか。ところが，砂や石も，なん十万年，なん百万年というような長期にわたって，土とか水とかの圧力を受けると，堆積（たいせき）岩という岩石になる。

堆積岩のうち，小石の集合したものを礫（れき）岩といい，砂の凝集したものを砂岩という。また粘土の凝固したものは粘板岩または頁（けつ）岩という。この外，堆積岩の中には火山灰や火山砂の凝固したもので，凝灰岩というのもある。

岩石は，地球の地殻と同性質のもので，もともと岩礁

の凝固したものなのである。岩しょうというのは，地球の中心部にあって，高温の泥液状をなすものである。この岩礁が，地殻の弱点を突き破って，地表に噴出することがある。これを溶岩といい，それが凝固して岩石となるのである。

岩礁の凝固したものを火成岩というが，火成岩には，深成岩，半深成岩，火山岩の三種がある。深成岩は地中の深層部で，岩礁の凝固したものであり，火山岩は，岩礁が地表に噴出または流出して凝固したものである。また半深成岩というのは，深成岩と火山岩の中間地層で，岩礁の凝固したものである。

岩石には，堆積岩，火成岩のほかに，変成岩というのがある。これは，地中の探所にある火成岩が上からの重力や横からの圧力をうけ，そして岩礁に熱せられて，もとの火成岩とは，異質の岩石に変化したものである。

以上のように，岩石は三種に大別することができるが，その成分はどのようなものか，調べてみよう。

岩石は，地殻と同性質のものであるから，地殻を形成している元素を調べれば分明する。岩石に１％以上含まれているものは，アルミニウム・鉄・カルシウム・マグネシウム・カリウム・ナトリウムで，その他の元素はごく小量である。であるから岩石も，この八元素で形成されており，これを珪（けい）酸塩化物という。

二　鉱　物

水晶を破壊して粒状にしてみると，どの粒もみな同質である。このように自然に存在するもので，質の一様な石を鉱物という。しかし，質は一様であっても，真珠のように生物の体内に発生したものは鉱物といわず，また液状のものでも，石油や水銀は鉱物の中に数えられている。

〈水　晶〉

地球は，種々の鉱物で形成されている。鉱物の種類は，千数百種ほどで，何千，何万とある動物や植物の種類に比較すると，きわめて少数である。それにもかかわらず，人はあまり鉱物の名を知らない。それは，鉱物の多くが，地下に埋蔵されていて，人目に触れることが少ないからである。また，いま一つの理由として，鉱物は，薬品を加えて化学反応をおこさせてみたり，顕微鏡で構造を調べてみたり，いろいろな実験を経なければはっきりわからなかったりするからである。しかし，その形状や色彩を観察して，その性質をわきまえていれば，大体の見当はつくものである。

次に鉱物の形と性質について調べてみよう。

鉱物は，常に決まった形状をもっているとは限らない。時として，岩石の中に，四角な，または細長い，あるいは三角形の鉱物がはさまれていることがある。これを班晶という。このように，鉱物が自然に規則正しい形状をしているのを結晶という。岩石は，幾種かの鉱物の小さな結晶が混合して形成されたものである。地殻の上に流出した岩礁が，緩慢に冷却される時，鉱物は大きく結晶し，急激に冷却されると小さく結晶する。班晶は，緩慢に冷却された時にできたものである。

鉱物の結晶でよく知られているのは水晶である。水晶の結晶は六角柱で，とがった屋根を持つ西洋の塔に似た形をしている。黄鉄鉱や岩塩は立方体，磁鉄鉱は八面体，雲母は板状，いおうは錐（すい）形，方解石は押しひしゃげたマッチ箱のような形に結晶する。鉱物の結晶には，さまざまな形状があるので，結晶を見て鉱物名をいい当てることもできる。

また鉱物には，ガラスのように無色透明なものや，金色，銀色に輝く物もある。その外，青・赤・黄・緑，さまざまな色を持つものもある。熱したり，摩擦したり，日光や紫外線を当てたりすると，光を放つ鉱物もある。鉄を吸いつけるもの，電気を伝導しないもの，放射線を出すものなどもある。このようなそれぞれの色彩や性質を

調べることによっても，鉱物を識別することができる。

鉱物の産出する所を，石灰岩地帯と花こう岩地帯とに分けることができる。石灰岩地帯には，スカルン鉱物というものがあり，この鉱物の中には美しいものが多く，珪灰石・縁れん石・斧石（おのいし）などが，みごとな結晶をして出てくる。また，この地帯からは，鉛・亜鉛・銅・鉄などの金属鉱石が多量に産出する。

花こう岩地帯からは，水晶・長石・雲母などの結晶が出る。このほか，モリブデン・タングステン，その他希元素や放射性元素などを含む鉱物が産出する。

このような種々の鉱物が産出する地帯には，温い地下水のわき出る所があり，これを温泉という。温泉は，いろいろな鉱物質を含有している。

三　地　下　資　源

岩石や鉱物の中で，人類の生活に役立つものを地下資源という。人類は多くの地下資源を開発し，それを生活に利用して文明を推し進めてきた。太古の人類は，器具として石材・貝殻・木材をそのまま使用し，自然のままにある宝石や金銀を拾って飾り物とした。時代の進歩に従って，まず鉱石中から銅を取り出すことを知り，次に

鉄を取り出すことを知った。そして，今までに，どれほど多くの地下資源を発見し，利用するようになってきたことか。

今日でも土木工事や装飾には，石がそのまま使われているが，石の切り方，みがき方など，その方法は非常に進歩している。また，それら自然石のほかに，コンクリートや人造石が案出され，さかんに使用されている。

焼き物の発明は非常にふるいが，今日では，耐火れんが・ガラス・ベークライトなどもその中に加えられている。

最もめざましいのは，金属と薬品利用の発達である。数え切れないほど多種多様の合金が発明され，さまざまな薬品が製造されるようになっている。

工業や交通に必要な動力も，電気以外は，ほとんど地下資源の石油・石炭が使用されている。

次に地下資源の中，おもなものについて，その性質や用途を調べてみよう。

金属のおもなものに，銅・鉄・金・銀・アルミニウム，そのほかに，鉛・亜鉛・水銀・クローム・ニッケル・コバルト・ウラニウム・ラジウム・トリウムなどがある。

銅は柔かく，溶けにくい金属であるが，他の金属と混ぜると固くなり，溶けやすくなる。金や銀と混ぜて，細

工物に用いたり，すずや亜鉛と混ぜて各種器具の製作に使われる。また硫酸と化合させ，硫酸銅が作られる。

鉄は，最も用途の広い金属である。鉄に炭素が混ざると，固く，もろくなり，ニッケル・クローム・モリブデンなど，他の金属を混ぜると粘り強くなったり，さびが出なくなったりする。これらを特殊鋼といい，機械類の製作に多く用いられる。

金は重くて柔軟な金属である。昔は貨幣や飾り物にしか用いられなかったが，今日では，そのさびない性質を利用して，万年筆のペン先とか，化学の実験具などにも使われている。

銀は，金と同じように，昔から貨幣や飾り物に用いられてきた。その性質は，金と銅の中間で，金属の中では，最もよく熱や電気を伝導する。今日では，その用途が多く，めっき・化学機械・写真材料・薬品などに用いられている。

アルミニウムは，その比重がガラスと同じくらいで，しかもねばりがあり，さびないので，種々の器具製作に広く用いられている。また，アルミニウムに銅・マグネシウム・マンガンなどを加えると，軽くて粘り強い金属になる。これをジュラルミンといい，飛行機の機体に用いられている。

地下資源には，金属鉱物のほかに，非金属鉱物がある。

機械器具は，直接に，また間接に，みな薬品を用いて製作される。これらの薬品は，たいてい硫酸・塩酸・かせいソーダなどの化学作用を応用して作られる。硫酸はいおうを含む鉱物から，塩酸やかせいソーダは岩塩から作る。このような非金属鉱物もまた工業の原料として重要な資源である。

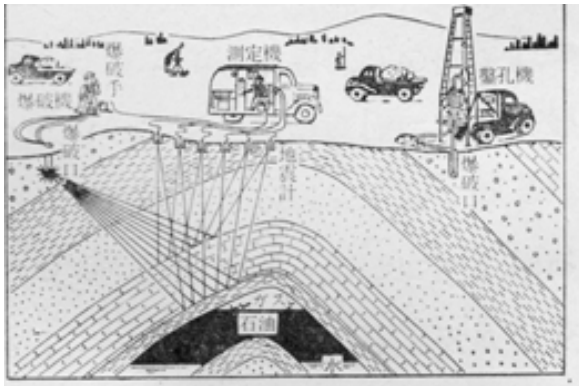
非金属鉱物のおもなものに，岩塩・石膏（せっこう）・硝石・いおう・りん・石灰岩・雲母・石綿・珪石（けいせき）などがある。陶器の原料になる粘土，ガラスの原料の石英なども大切なものである。

以上のほかに，宝石，飾り石などの石材がある。宝石と飾り石には，ダイヤモンド・ルビー・サファイア・水晶・玉髄・めのう・たんぱく石・トパーズ・エメラルド・アレキサンドライト・ガーネット・電気石・月長石・ひすい・こはく・さんご・真珠などがある。

土木建築や置物などに用いる石を石材という。石材には，花こう岩・安山岩・凝灰岩・砂岩などが用いられる。大理石は，石灰岩が圧力や熱によって変質したもので，みがくと光沢が美しい。

地下資源として重要なものに，石炭と石油がある。石炭は，太古地下に埋まった植物が長年月の間に水素や酸素を失い，炭素だけを残したものであるといわれる。石炭には，無煙炭・瀝青（れきせい）炭・褐（かっ）炭など

がある。無煙炭が最上質で，褐炭の中には，燃料にならない粗悪なものもある。石炭は，そのまま燃料としても使用するが，分解して，ガス・コールタール・コークスなどに分け，それぞれの用途に従って使用される。



〈地下資源の石油〉

石油は，何からできたものか，まだ分明ではない。石油は水よりも比重が軽く，地下水に押しあげられて地層の下にたまっている。地下から出たばかりの石油は・原油といい，いろいろな池の混合物で，泥状をなしている。温度を加えると蒸発しやすい上質の油から順に，揮発油・軽油・重油に別けられる。揮発油はガソリンともいわれ，飛行機や自動車の燃料として用いられる。軽油は・石油エンジン・石油バーナー・石油乳剤などに使われる。重油は，汽船・汽車などのジーゼル・エンジンなどに使われる。

世界の文化が進歩するにつれて，地下資源は，ますま

す重要さを加えてきた。各国は，地下資源の発見と開発に努力を傾けている。特に近年，原子力が開発され，ウラニウム・ラジウム・トリウムというような放射性元素に，世界の関心が集中するようになった。人類の幸福を増進するため，地下資源は，今後いよいよ重大な役割を果たしていくものと思われる。

四　地球の外と内

地球はだいたい球形であって，その直径は，約１２７４０ｋｍ，円周は約４００００ｋｍである。

地球儀の表面には，南極と北極を結び，赤道と直角に交わる経線（または子午線）と，赤道に平行する緯線とがたくさん引いてある。実際の地球にも，このような線をあてはめて考え，経線と緯線とをもって，地球上の位置をあらわすことになっている。たとえば，サンパウロ市は，西経４６度３７分５９秒，南緯２６度３２分３６秒の所にある，というぐあいである。

経線は，イギリスのグリニッジ天文台と南北極を結ぶ線を０度として，東と西に１８０度に分けて線が引いてある。また緯線は，赤道を０度として，北と南に９０度に分けて線が引いてある。だから，北極は北緯９０度の

地点，南極は南緯９０度の地点であって，この両極を結ぶ線が地軸である。

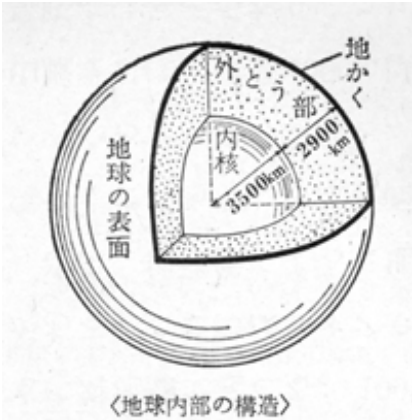
地球は，空気で取り囲まれている。地表から高くなるにつれて空気は薄くなり，温度も低くなっていく。地上から１５ｋｍあたりまでを対流圏といい，それから上を成層圏という。雲が出たり，風が吹いたりするような気象現象は，おもに対流圏で起こる。１００ｋｍから５００ｋｍあたりに電離層がある。ここにはイオンや電子が多く，電流が流れている。

次に，地球儀によって地表を見よう。陸地の面積に比べて海の面積の広いことに気づくであろう。地球全面積の約３０形が陸地で，あとは海である。地球の表面には，いろいろな高さの陸地と，いろいろな深さの海がある。ヒマラヤ山脈や，アルプス山脈などは，標高４０００ｍ以上で，世界で最高の山は，８８４８ｍのエベレストである。

海底にはみぞがあり，これを海こうという。海こうには水面下９０００ｍ以上のものがある。世界でいちばん深いのは，太平洋にあるビチアス海えんで，１１０３４ｍもある。

地球の内部は，明確には知られていないが，地震や地磁気などの研究が進むにつれて，少しずつ明らかになっている。いちばん外側の地殻は，厚さ約６０ｋｍで，成

分は地上の岩石とほぼ等しい。その次には，金属を多く含んだ層が約２８００ｍ続いており，これを中間層という。さらに，その内部は地球の中心までを地核といい，学説によると，その部分は固体ではないとのことである。地核は，半径が３５００ｋｍもあり，地球が磁気を帯びていることの原因は，この部分に関係があると考えられている。



〈地球内部の構造〉

五　地球の歴史と生物

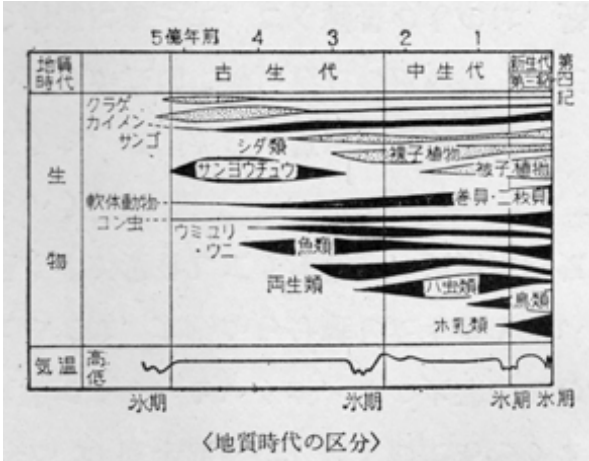
地球の年齢は，およそなん歳ぐらいであろうか。いつごろ宇宙の片すみに生じたのであろうか。学者の研究によると，４０億年か５０億年前に生じたものであろうという。地球は３５億年ほど以前には，巨大な火球であったというが，この火球がどのようにして，宇宙に生じたものか。学説によっては，太陽から分離したものともい

うし，また，宇宙に浮かんでいたガス体や星くずが集合してうず巻き，次第に熱気を帯び，ついに火球となったのであろうともいう。

この火球が，なん億年という長年月を経るうち，表面から次第に温度がさがり，やがて固まりはじめた。まず，固まりやすい成分が表面に薄い岩石の皮を作り，だんだん厚味を加えていった。そのころ火球の内部にあって，ごく軽量のものは，発散して空気となり，またあるものは水蒸気となって空中にのぼり，雨となって地球上に降りそそいだ。雨は地表の低い所にたまり，やがてそれは広がって海となった。地質時代は，前カンブリア代，古生代，中生代，新生代の四つに分けられる。前カンブリア代は，約３５億年前から約５億年前までの間で，この代の半ば過ぎまでの間を始生代という。始生代に最初の生物が，海中に出現したが，この生物は，海草やくらげなど，ごく下等なものであったと見られている。この代の終わりごろを原生代といい，いか・たこ・えび・かになどの先祖にあたる生物が現われたという。そして，それらの生物が，次々と新種を創生していったのである。

古生代は，約５億年前から２億３０００万年くらい前までの間で，この代の初期にせきついを持つ魚類が海に現われ，陸地には，しだ類が大森林を作った。そして，この代の末期に動物では，魚類から進化した両生類が現

われて，陸上に生息するようになった。また植物も，しだ類に代わって，そてつ・松・杉などのような高木が繁茂するようになった。前カンブリア代には，地球にしばしば寒気が訪れて，幾度となく，地表は厚い氷で閉ざされた期間があった。この期間を氷河期という。



〈地質時代の区分〉

〈さんよう虫と魚類〉　〈しだ類と両生類〉

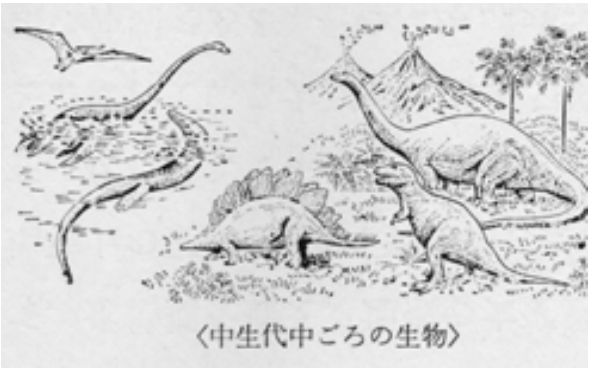
また，たびたび地殻に変動が起こって，海や陸の形が変化した。古生代は気候が温暖で，氷河は消滅した。動物は繁殖し，植物も繁茂した。しかしこの代の終わりごろ，また寒冷期がおとずれ，地表は氷結し，地殻に変動が起こった。そのため，これまで地球上に栄えていた動植物は，ほとんど滅亡してしまった。

この時代に生息していた動物で，現在，化石として採集されるものに，さんよう虫・筆石などがある。また植物は

，石炭として掘り出されている。

中生代は，約２億３０００万年前から約７０００万年前までの間である。この代には，気候が温暖になって，海と陸とにいろいろな生物が発生した。この代の初期の動物では，特に，はちゅう類が栄え，中期以後，ほ乳類が現われた。植物では，松・杉のような常緑針葉樹に代わって，柳・くるみなどの落葉かつ葉樹が繁茂した。

温暖であった中生代を，その末期には，また寒気がおとずれて，氷結期を迎え，地殻の大変動が起こった。そのため，地球上の動物も，みな衰えてしまった。この代の生物も，現在，化石としてみることができるが，それらは，俗に恐竜（きょうりゅう）とよばれている大形のはちゅう類と，こうもりに似た翼手類の仲間である。そのほか，わにや　かめの現われたのもこの代で，特に大きなことは，鳥の先祖といわれる始祖鳥が現われたことである。


〈中生代中ごろの生物〉

次の新生代は，約７０００万年前から現在までである。地球の歴史を第一紀から第四紀までに分ける方法によると，この新生代は，第三紀と第四紀にあたっている。第三紀というのは，約７０００万年前より，約１００万年前までの間で，動物では，ぞう・さい・とらなどの先祖といわれる巨大なほ乳類が栄えた。第四紀は，約１００万年前より現在までの間で，この紀の初期に人類の先祖が現われた。この第四紀にはいってからも，約１０万年ごとに氷結期がおとずれ，地球は氷でおおわれた。最後の氷結期が終わったのが約３万年前で，現在は，温暖な氷間期にあるという。現在は氷間期の前半なので，地球は，これから次第に暖かくなり，そしてまた寒くなって，五万年ほど後には，次の氷結期がくるといわれている。

このことをせんと思わば一途にしたがるがよし。
二途にわたるほどならばすべからず。
初め一気は　みな本心なり。二つにわたるは　血気なり。

（沢庵）

伝記を読む

一　ロンドン元帥

それは、一九五八年一月一九日の静かな昼さがりであった。元日以来病床にあったロンドン元帥の容体が、にわかにあらたまったので、近親、知己は、ぞくぞくと、そのまくらべに集まった。

だれの目にも、元帥の命は風前のともし火のように見えた。へやの中には、重苦しい空気が満ちていた。その時、元帥は苦しそうな息のしたから、かたわらの者にたずねた。

「陸軍省の前にある……あの広場は、なんといったかな。」

「以前はサンタナといいましたが、いまはレプブリカと申します。」

「そうであったな。」

元帥は、深くうなずいてから、呼吸をととのえ、力のこもった声で叫んだ。

「ビーバ・ア・レプブリカ！」

そして、そのまま、元帥は静かに永遠の眠りについたのであったが、その二度と開かれることのない口に、やさしい

微笑がいつまでも残っていた。

元帥は死の寸前に、若い日の情熱に燃え、共和革命党員として、さかんに活躍したころのことを思い起こしたのかもしれない。

半世紀にわたって、ブラジルの辺境を探検し、国土と人を愛してやまなかった元帥は、「共和万歳」を唱えて、その尊い九三年の生がいを閉じたのであった。政府は、この偉人の死に弔意を表して三日間の喪を布告し、国民はひとしく、その死を哀悼したのであった。

カンジド＝マリアノ＝ダ＝シルバ＝ロンドンは、一八六五年、マット・グロッソ州の南部、サント・アントニオ・ド・レベルゼル郡、ミモゾ平原のモロ・レドンドに生まれた。祖父は、ジョン＝エバンゼリスタといい、バンデイランテの一人であった。ボリビア国境の近くで、ジョアキナ＝ゴメスと結婚し、モロ・レドンドに住

（新ポル語　Rondon／Santana／Republica／Candido Mariano do Leverger／Santo Antonio do Leverger／Bandeirante／Joao Evangelista／Bolivia／Mato-Grosso／Joaquina Gomes）

みついたのであった。父は、カンジド＝マリアノ＝ダ＝シルバ、母はクラウジナ＝エバンゼリスタという。この両親は、牧畜を業として、ミモゾ平原に平和な家庭を営んでいたが、父は、ロンドンが生まれる数か月前に病死し、母もまたロンドンが二歳の時、にわかに他界した。はやく両親に死別したロンドンは、幼時もっぱら祖父母の手に育てられた。そして、学齢期に達してからは、クイアバ市で商店を経営している叔父（おじ）に引きとられて扶育され、そこで学校教育を受けた。

学校の成績は抜群で、一六歳の時には、初等科教師の資格を獲得した。しかし、彼の志望は、軍人として世にたつことだったので、一八八二年、騎砲兵隊に入隊した。だが、間もなくリオ・デ・ジャネイロの陸軍士官学校に入学、七年後には、俊秀な見習士官となって軍隊に勤務した。

一八九〇年、ロンドンが中尉に進級した直後のことであった。時の陸軍大臣は、国防上の必要から、各州の州都と首都とを電信で連絡することを計画した。そして、クイアバ、アラグァイア間の電信線架設団を組織するにあたり、ゴメス＝カルネイロ大佐を団長に、ロンドン中尉を副団長に任命した。

大陸の奥深く眠る未開の地、しかも彼の故郷と首都とを結ぶ電信線の架設という重大な任務をうけ、ロンドンは勇んで任地におもむいた。そして、苦心に苦心を重ね、

これを完成したのは、赴任以来十三か月の後であった。

一八九一年、ロンドンはリオ・デ・ジャネイロに召還され、母校の助教授に任ぜられた。しかし、彼の心は、はるかに遠い未開の原野に飛び去っていたのであった。文化の光から隔絶され、悲惨な生活をしているインジオたちの哀れな姿が、彼の脳裏深く刻みこまれていたのであった。これら辺境のインジオたちを保護し、希望の光を与えてやれる者は、自分をおいて外にあるはずがない。彼らを光明に導く事業こそ、自分に課せられた使命である。この使命観にたって、ロンドンは、マット・グロッソ地区電信局長の職を志願し、一八九八年、再びセルトンに分け入ったのであった。こうして、電信線の管理につとめるかたわら、一〇〇レグアに余る密林を踏査し、そこに住むインジオたちに農耕を教え、家庭器具などを買い与えて、保護と指導に全力をつくした。その後一時、リオ・デ・ジャネイロに帰任したが、一八九九年、三たび赴任してクイアバに駐在した。それは、クイアバ、コルンバ、

（新ポル語　Ｃｌａｕｄｉｎａ　Ｅｖａｎｇｅｌｉｓｔａ／Ｃｕｉａｂａ／Ａｒａｇｕａｉａ／Ｇｏｍｅｓ　Ｃａｒｎｅｉｒｏ／ｉｎｄｉｏ／ｓｅｒｔａｏ／ｒｅｇｕａ／Ｃｏｒｕｍｂａ）

アキダウアナ及びフォルテ・デ・コルンバを結ぶ一八〇〇メートルの電信線を架設する任務につくためであった。

ロンドンは、多くの部下を指図して、この困難な事業を進めるとともに、ボリビアの国境に沿う低湿地の探検を続け、測地学の基礎となる地点の測定を行ない、ブラジルの地理学に大きく貢献した。また、その地域に住むインジオたちを安住させるため、政府に進言して、インジオ居住地区を画定し、他人がその地区へ侵入するのを禁じる法令を制定させた。

〈campamento na Caiçara（中央・ロンドン）〉

こうしたロンドンの功績は、広くブラジルの野々に認められ、少佐に累進したころは、南部マット・グロッソに関する地理学の権威、インジオ教化のベテランとして、だれ知らぬ者のない存在となった。

その後、ロンドンは、クイアバ～ポルト・ベリョ間二〇〇〇キロメートルの電信線を架設したほか、多くの電信事業に手腕をふるったが、彼の生がいで最も大きな事業であったのは、マット・グロッソからマディラ盆地に至る幹線と、アクレ、プルス、ジュルアー及びマナウスを結ぶ電信線の架設であった。

政府がこの事業を計画した時、人々は、この難事業の遂行は、ロンドンをおいてほかにできる者はないと思った。彼を架設委員長に任命した大統領アフォンソ・ペナは、

「この事業に、はたして実現の可能性があるだろうか。」

とたずねた。するとロンドンは、

「実現する、しないは、意志ひとつです。必ず実現させるという決意が第一です。」

と、断固たる態度で答えた。

ロンドンは、この決意の上にたって、アマゾンの密林を踏査し、遂に大業を完成したのであった。しかも、彼の事業は電信線の架設ということだけではなかった。踏査の途上、地理・植物・動物・鉱物などについても、詳しく学術的な調査を行な

（新ポル語　Ｆｏｒｔｅ　ｄｅ　Ｃｏｒｕｍｂａ　Ａｑｕｉｄａｕａｎａ／Ｐｏｒｔｏ　Ｖｅｌｈｏ／Ｍａｄｅｉｒａ／Ａｃｒｅ／Ｐｕｒｕｓ／Ｊｕｒｕａ／Ｍａｎａ

us／Ａｆｏｎｓｏ　Ｐｅｎａ／Ａｍａｚｏｎ）

い、そのうえ、その地域に住むインジオの教化にもあたったのであった。

この難事業は、一九〇七年に着手され、一九一五年に完成したが、その期間中、彼と彼の部下たちは、休日らしい休日もない激務の連続であった。しかし、彼が、よくこの国家的な大事業を完成したかげには、彼を助けた忠実な部下と、そして、彼に絶大な信頼を寄せたインジオたちの協力があったことも忘れてはならない。

この事業の進行中、当時の臨時大統領ニロ＝ペサニャは、ロンドンの調査報告書から、インジオを政府が保護することの必要を感じ、一九一〇年、インジオ保護局を設立し、同時にロンドンを大佐に昇進させ、保護局初代局長に任命した。

インジオ保護の事業こそ、ロンドンの天職とするところであった。彼が教化にあたって、その信条としたところは、徹底したヒューマニズムの精神をもって、忍耐強く愛情を示していくことであった。彼は、電信線を架設するため、インジオの住む地域にはいる時は、きまったように部下を集めて訓戒を与えた。

「諸君は、もし見知らぬ者が諸君の家に踏みこんだ時、これを黙視することができるだろうか。諸君は必ず、その者

を外に追い出そうとするにちがいない。セルトンはインジオたちの家なのである。われわれは、国家的な事業に従事しているとはいえ、インジオの家に踏みこみ、彼らから見れば、勝手な行動をしているのである。

彼らが、そのわれわれに、挑戦しようとするのは当然のことなのである。だから、われわれは、彼らに反撃を加えてはならない。もし彼らが、われわれの面前に現われた時は、猶予することなく、直ちに後退すべきである。部下たちは、彼の訓戒をよく守ったが、時にインジオの強烈な襲撃に会い、反撃に出ようとしたこともあった。

ロンドンの一隊が、ジュルエナ川に沿う地域の踏査を行なっていた時であった。

そこに住むニャンビクアラ族に包囲され、猛烈な毒矢の攻撃をうけた。インジオたちの射かける毒矢は、ロンドンたちの身辺に、まるで雨のように降りそそいだ。部下たちは、ついにたまりかね、銃をもって戦おうとした。その時ロンドンは、叫んだ。

〝Ｍｏｒｒｅｒ，Ｓｅ ｎｅｃｅｓｓａｒｉｏ ｆｏｒ，ｍａｔａｒ，ｎｕｎｃａ！〟

部下の持っている武器を全部とりあげ、危険を冒して活路をさがし、安全地帯にむ

（新ポル語　Ｎｉｌｏ　Ｐｅｃａｎｈａ／Ｊｕｒｕｅｎ

a）

かって撤退した。そして機会をとらえ、彼らに近づいて好意を示し、彼らの希望をいれ、親交を結んだのであった。

一九一三年、重大な使命が彼を待っていた。それは、アメリカ合衆国の政治家ルーズベルトの一行がブラジルの秘境を探検し、学術的な調査を行なうにあたり、ロンドンに同行を求めたことであった。

ロンドンは、外相ラウロ＝ミュラの要請をいれ、これに同行することを承諾した。ポルト・エスペランサに勢ぞろいをした探検隊は、ロンドンの案内でタクアリ川からマット・グロッソ州にはいり、コルンバに向かって進んでいった。ニャンビクワラ族、ペレシス族のすむ密林深くはいって、地理学・動植物学などのうえで興味深い資料を豊富に集め、一行は無事に帰国した。この探検に同行したことは、ロンドンにとっても意義深い調査と研究の旅であり、ブラジルとアメリカ合衆国との親善によい役割をはたしたのであった。

ルーズベルトは帰国後、ロンドンについて、次のように述べている。

「彼は軍人であり、またりっぱな紳士である。そして勇敢なインジオ教化者であり、科学者でもある。」と。

ロンドンは、一九一九年、少将に昇進し、陸軍を代表し

て各種の会議に出席したり、ブラジルの国境を査察した。そして、一九三四年には、アマゾン川流域を領土とする国々によって結ばれている、国境画定委員会にブラジル代表として出席し、委員長をつとめた。こうして、ロンドンの名は国際的にも有名になり、諸外国からも人類の進歩につくした功労者として顕彰され、最高の叙勲にあずかった。

なお、一九五三年と、一九五六年には、内外の知名学術団体から、ノーベル平和賞候補として推され、ロンドンの名に一層の輝かしさを加えた。

一九五〇年、国家は彼の勲功に対して、元帥の称号をおくり、同時にグァポレ直轄領を、彼の名にちなみ、「ロンドニア」と改めた。

ロンドンは、このような名誉と栄光の地位

（新ポル語　ＰＬａｕｒｏ　Ｍｕｌｌｅｒ／ＰＯｒｔｏ　Ｅｓｐｅｒａｎｃａ／Ｎｈａｍｂｉｑｕａｒａ／Ｐｅｒｅｃｉｓ／Ｔａｑｕａｒｉ／Ｒｏｎｄｏｎｉａ／Ｇｕａｐｏｒｅ）

にのぼったが、彼の業績をたたえる者に対して、いつも次のように所懐を述べた。

「わたしが、国家から、このような栄誉を受けたのは、セ

ルトンの開拓ということにあったと思う。しかし、この事業は、わたしの独力でなしたものではない。上官、親友の支持と、多くの勇敢な愛国者たちの協力によるものである。」

このように恭謙なロンドン元帥に対して、国民はかぎりない敬愛の心をいだいてきたのであった。

二　野口英世

野口英世は、明治九年十一月九日、福島県耶麻郡翁島（おきな）村大字三ッ和字三城潟（あざさんじょうがた）に生まれた。父は佐代助（さよすけ）といい、母はシカといった。英世はその長男である。英世は幼名を清作と称した。八歳で三ッ和小学校に入学、十四歳の時、猪苗代（いなわしろ）高等小学校に入学、十八歳で卒業。会津若松市の渡部医院に入門して医業を学んだ。二十一歳の時、東京に出て医術開業前期試験を受けて合格し、翌年、後期試験にも合格して、医師の資格を得、伝染病研究所の助手を命ぜられた。二十四歳の時、海港検疫官補を命ぜられ、始めてペスト患者を発見した。この年、清国牛荘（ニューチャン）におもむき国際予防委員会中央医院に勤務した。

英世は明治三十三年、二十五歳の時、さらに志を立てて

アメリカ合衆国に渡り、フィラデルフィヤ市におもむき、ペンシルベニヤ大学において蛇毒に関する研究に着手し、種々の実験を試みるとともに、一方博く諸国の文献をあさり、夜を日に継いで、眠くなればそのまま眠り、水とパンで飢をしのぎ、刻苦五十余日で、これを大きな著述にまとめあげた。その非凡な努力とすぐれた業績とを認められて、同大学の助手に挙げられた。二十八歳の時、デンマークに留学させられ、国立血清研究所にはいって研究を積み、翌年帰米してロックフェラー医学研究所の助手となった。ついで同研究所の部員となり、ついにその部長に昇進した。その間に毒蛇及び蛇毒に関する研究を始めとして、幾多の医学上有益な業績を次々と発表して、その価値を学界に認められ、わが国の医学博士・理学博士の学位を授けられた。大正四年、四十歳の時、帝国学士院から恩賜賞を授けられた。その年九月帰朝して勲四等に叙し、旭日小綬章を授けられた。十一月再び渡米

（０６３．ｊｐｇ　ことば一覧表あり）

した。のち、帝国学士院会員に列せられた。また諸国から名誉ある学位・勲章等を贈られ、細菌学者として世界で最も卓越した学者の一人とされるに至った。

　真理の探究者としての英世は、また常に学理の力によって人類の幸福の為に貢献することを念とした人である。彼は人命を奪う微細な病原菌を発見するために、生涯

（がい）うまずたわまず努力を続けた。殊にその晩年十年間には、危険な熱帯伝染病（黄熱病）を撲滅するために奮闘し、連年エクアドル・メキシコ・ペルー等に出張して、あるいはその病原体を明らかにし、あるいはその治療・予防の方法を講じたりして、顕著な功績をたてた。かように彼は単に研究室において実験を試みるだけでなく、進んでみずから身を危険な境地にさらして少しも恐れなかったが、惜しいことには、昭和三年五月、アフリカ西海岸において同地に流行する黄熱病に犯され、同月二十一日遂に研究の犠牲となって五十三年の生涯を終えた。彼はアフリカへ出発する時、その行の危険を説いて注意してくれた友人に対し、その親切を感謝しながら、「わたしは少しも恐れるところがない。わたしはこの世界に何事かを成さんがために生まれた。わたしはこれを完結したい。死ぬべき時がくれは、それにおもむくほかはない。」といったということである。

英世の死去の報が天聴に達するや、特に勲二等に叙し、旭日重光章を授けられた。内外ひとしくこの人類の恩人の功業をたたえてその死を惜しまぬ者はなかった。

―劇―　桃源にて

武者小路實篤

登場人物
男
少年（あとで武人）
少女（あとで武人の妻）
老人
あらくれ男　甲、乙、丙、丁
王様
家来　数人

時　昔、春
所　中国

―第一幕―

少年　流れていく桃の花よ。都の人に言ってくれ。この山奥に、わたしたちが咲いていますって。そして、にいさんの今までの苦心を、みんなの人に語っておくれ。

男　（登場）おまえは、何をしているのだ。

少年　桃の花の流れるのを見ているのです。にいさんは、どこへ行っていたのです。

男　　山に桃を植えに行っていたのだ。一本でも多く桃を植えたい。苗床の桃の芽生えが、早く植えてくれ、早く植えてくれというからね。

少年　にいさんは、こんなに桃の木を植えたのに、まだ植えたりないのですか。

男　　そうさ。どんな仕事だって、上には上があるものだ。これでいいということはない。まだ、あの山に千本は植えられるだろう。あの川岸にも桃の木を植えたほうがいい。まだわたしの一生をかけても、おっつかないほど仕事がある。

少年　しかし、にいさん。世の中に、こんな美しい桃の山があるでしょうか。

男　　ないかも知れない。あるかも知れない。しかし、ますます美しくすることは、いくらでもできる。この仕事をやりだした以上、わたしは、美しい上にも美しくする。そして、人々が「こんな美しい桃の山は見たことがない。」というほどの仙（せん）境（きょう）を作ってみる。この世には、いくらでも美しいものがある。その真価を生かしさえすれば、どこにだって仙境はひらけるものだ。

少年　わたしは、いい山をさがし出して、にいさんに負けないよう、全山を梅の林にしてみせます。

男　　しかし、この仕事はらくではない。ただ桃の木を植えればいいというのではない。地形や土質もみなければならない。わたしがこの山を見つけ、仕事にかかってから、二十三年たった。みな、わたしのことを気ちがいだとか、仙人だとか言っていた。その間のわたしの苦労は、なかなかたいへんだった。ただ、わたしは天下に類のない、わたしでなければできない仕事がしたかった。幸いわたしは、丈夫なからだと、それ以上に根気のよい性質をもっている。だから、この仕事をしたのだ。おまえは、わたしと違ってからだも弱いし、ほかに才もある。わたしのまねなどしないで、自分に適当な仕事をさがしなさい。

少年　ほんとうに、これだけの仕事をするのは、たいへんだったでしょうね。

男　　まあ、好きだからできたのだ。はじめの間は希望に燃えて働いていた。だが、しばらくすると、自分だけ、こんな事をしていていいのか。天下は乱れて、多くの人は焼けだされ、死んでいる。自分も剣をとっていくさに出るのが本当ではないかと考えたこともある。また、これだけの力と根気をもってしたら、王になれるかも知れない。そうしたら、何万人もの人を使って、大きな仕事をやってのけることもできる、と思ったこともあった。しかし、わたしは、そんな世界へはいることはいやだった。わたしは、ひとりでこつこつ仕事をするのが好きだった。わたしは

黙って、いっしょうけんめい働いた。せっかく作った畑を、獣たちに荒らされたこともあった。虫がついて、桃の木が全滅したこともあった。だが、わたしは、この道よりほかに、自分を生かす道があるとは思わなかった。それで、やっとここまでやり通してきたのだ。

少年　わたしは、にいさんに招かれて、ここに来たのですが、こんな美しい世界が見られるとは思いませんでした。あの峠の上から、この世界を見たとき、どんなに驚き、どんなによろこんだかわかりません。わたしは、世界じゅうの人に、この世界を見せたいと思います。

男　　わたしは、まだ世界じゅうの人に見せたいとは思わない。わたしの頭の中に描いている世界は、この世界よりなん倍か美しい。もう十年か、二十年、わたしは、だれにも知られないで、ますます美しい世界を作っていきたい。

少年　その時は、みんなが、どんなに喜ぶでしょう。

男　　どれ、もう少し、桃の木を植えてから、昼飯にしよう。

少年　にいさんぼくにも手伝わせてください。

男　　昼飯がすんだら連れていってやろう。わたしは、これから、あの山まで急いで行ってこなければならないのだ。それがわたしの朝の間の日課なのだ。わたしは、自分できめただけのことは、どんなことがあってもやること

にしているのだ。
（退場）
少年　（あとを見送りながら立っている）
（少女あわてて登場）
少女　早くわたしをかくしてください。悪者に追いかけられているのです。
少年　あの家の中にかくれていらっしゃい。
（少女かくれる。あらくれ男、四、五人登場）
甲　ここに女の子が逃げてこなかったかね。
少年　来ましたよ。
乙　どこへ行った。
少年　わたしを見たらびっくりして、あの森の中へとびこんでいきました。
丙　うそをつくと承知しないぞ。
少年　うそじゃありませんよ。
（あらくれ男たち、森の方へ去る）
少年　（家の方へ行き）早く、今のうちに、今来た方へ逃げなさい。
少女　ありがとう。
少年　いいところを知っていますから、わたしが教えてあげましょう。（二人退場）
（少年、まもなくもどってきて、前の通り川岸に立

つ。甲、乙、森からもどってくる）
甲　おまえ、うそをついたな。
少年　いいえ。うそなんか言いません。
甲　いま、おまえが女の子といっしょに走っていくのを見たぞ。
少年　そんなことはありません。わたしは、さっきからここにいました。
乙　うそつけ！（なぐる）
甲　正直にいわないか！
少年　ぼく、本当にあの森に逃げこんだのを見たのです。
乙　うそをつくと、こうだぞ。（また打つ）
少年　ぼく、知らないことは知りません。
乙　強情者め。（また打つ）
（丙、丁、もどってくる）
甲　（丙、丁に）いたか。
丙　どこにもいない。
乙　こいつが、うそをついたと思うんだ。
丁　きっとそうだ。子どもだと思って、ばかにしたのが、こっちの手ぬかりだった。
丙　こいつが知らないわけはないと思うんだが。
乙　ところが、どうしても白状しないんだ。
丁　強情なやつだ。
甲　きっと、この近所にかくれているにちがいない。

丙　もういちど、さがしてみようか。
丁　そうだ。まだ遠くにはいかないだろう。
（丙と丁、桃の枝を手当たりしだいに折りながら退場）
乙　どうも、あそこの家、あれがあやしい。
甲　さがしてみよう。
乙　こいつが逃げるといけないから、縛っておこう。
甲　そうだ、そうだ。
（少年を桃の木に縛りつけ、甲と乙、家の方へ行く）
甲　床をはがしてみよう。
乙　てんじょうにかくれているかも知れない。
（甲と乙、家の中をでたらめにさがす）
（丙と丁、登場）
丙　（少年に）　おまえはだれと、あの家に住んでいるんだ。
少年　にいさんといっしょにいます。
丙　にいさんは、どこへ行った。
少年　山へ行きました。
丁　狩りに行ったのか。
少年　いいえ。桃を植えに行ったのです。
丙　桃を植えに？
丁　それなら、おまえは、あの評判の桃仙人の弟か。
少年　そうです。

丙　桃を命よりもだいじにしているというが、本当か。
少年　本当です。
（甲、乙、家の中から出てくる）
甲　見つかったか。
丙　見つからない。
甲　この小僧が、どうしても知っていると思うが？
丙　おれは、こいつの兄貴の桃気ちがいが、山へ連れていったのだと思う。
甲　桃気ちがい？
丙　あの評判の桃仙人というのが、ここに住んでいるのだそうだ。
甲　そうか。（少年にむかって）それがおまえの兄か。にいさんは、どこへ行った。
少年　山へ行きました。
乙　きっと、そいつだ。そいつをつかまえれば、娘っ子のいどころがわかるだろう。
丁　そうだ。そいつを見つけろ。
丙　そいつは、どっちの山へ行った？
少年　ぼくは知りません。
乙　また強情をはるな？（打つ）
甲　とにかく、そいつをさがそう。
丙　そうしよう。いつまでも、こうしてはおられない。
（あらくれ男ども、みな退場。しばらくして男をつ

かまえてくる）

男　おまえはその娘を本当に知らないのか。

（弟を縛ってあるなわをとく）

少年　知りません。あの森の中にとびこんだのを見たのです。

男　そうか。この人たちは、その娘をわたしがかくしたというのだ。そして、それを白状しなければ、この桃を残らず切ってしまうというのだ。知っているなら言ってくれ。

少年　ぼくは知らないのです。知らないものは仕方がありません。

男　そうか。おまえがそう言うなら、本当に知らないのだろう。（あらくれ男たちに）わたしは二十年も苦労して、桃を育ててきました。しかしこれも運命でしょう。桃を残らず切ってください。わたしが知っていれば、必ず言いますが、知らないのですから仕方がありません。

甲　よし桃の木をみんな切りたおしてやる。

乙　それがいい。みんな切りたおせ。

（丙、男の家から、おのを持ってくる。丁は剣を抜いて、男と少年を見張っている）

甲　切りたおせ！

丙　よしきた。（一本の桃の木を切りたおす）

男　おまえは、本当に知らないのだな。

少年　知りません。
男　ああ、わたしは、自分を切られるよりつらい。
少年　兄さんの気持ちは、よくわかります。
男　（丙にむかって）もうよしてくれ。桃を切りたおすくらいなら、このわたしを殺してくれ。
少年　兄さん、そんなことをおっしゃってはいけません。
男　（少年に）この気持は、おまえなんかにはわからないのだ。わかれば、娘のいるところを知らせてくれるはずだ。
少年　知っていれば知らせます。
男　本当に知らないのか。
少年　知りません。
男　（丙に）やっぱり弟は、本当に知らないのです。
丁　知らないわけはない。おまえたちのうちどちらかが、どこかにかくしたにちがいない。
甲　さあ、まだ白状しないか。しなければ、あの木も切るぞ。（次の木を切るようにと丙に合図する）
男　知っていれば言います。知らないことは言えません。
甲　白状しないと、この桃を残らず切りたおして、山に火をつけるが、いいか。
男　そんな無理なことを言えば、うそをつくよりほか仕方がない。だが、うそをつけば、おまえたちは、またお

こるだろう。
乙　あたりまえだ。うそをついたら、おまえも弟も殺してしまうぞ。
甲　さあ、次の桃を切りたかせ。
（丙、おのをふりあげる）
男　それはゆるしてください。それは残酷です。
甲　白状すればゆるしてやる。でなければ切りたかすほかはない。
男　ああ、もう見てはいられない。桃よ、ゆるしてくれ。わたしには、どうすることもできないのだ。
（桃の木が切りたおされる）
男　（弟に）おまえ、本当は知っているのだろう。白状してくれ。たのむ。たのむから白状してくれ。
少年　ぼく、本当に知らないのです。
男　わたしは、どうしたらいいのだ。天よ。わたしを助けてください。
（丙、また次の桃の木の方へ行く）
丁　だれか、人がくるようだ。
甲　そうか、ちょっと見てこよう。
（甲、退場、まもなく登場）
甲　たいへんだ。逃げろ、逃げろ。
乙　なんだ。
甲　五、六人の武士がやってくる。逃げろ。逃げろ。

（甲、乙、丙、丁、逃げる）

男　おまえは、知っているのだろう。

少年　もちろん、知っています。

男　早く行け。行かないと打ち殺すぞ。

少年　さようなら、兄さん。もう、お目にかからないでしょう。

男　早く行け。

（少年行く。男、切りたおされた桃の木にすがって泣く）

（王、狩りの姿で、五、六人の家来と共に登場。男、かくれる）

王　こんな所に、こんなりっぱな桃の林があるとは思わなかった。

家来１　ほんとうに、りっぱな桃の林でございますね。

王　この桃の木を残らず離宮に移したら、さぞりっぱだろう。

家来１　それはまことに結構でございます。

王　どうして、こんなりっぱな桃が切りたおされているのだろう。

家来１　本当に惜しいことでございます。

王　きこりでも切ったのだろう。このままにしておいたら、残らず切られるかも知れない。さっそく、人夫をこさせて、ここにある桃の木を、全部離宮に運ばせ、一つ大

きな桃園を作ろう。
家来１　それは、よいお考えでございます。
王　　帰ったら、すぐ人夫をよこすよう。（家来２に）おまえが案内役をしろ。こんな山の中の桃だから持ち主はあるまいが、あったら十分に金をやるがよい。
家来２　はい。
王　　それでもきかなければ、王のいうことをきかない不忠者であるから罰してよいぞ。
家来２　王様のお目にとまったと言えば、ありがたがって、すぐ献上すると申すでございましょう。こんな名誉なことはございませんから。
王　　早く帰って、皆にも話してやろう。この桃をみな離宮へ移したら、さぞ美しいことだろう。
（王、家来たち退場）

―第二幕―

（翌年の春。同じ場所。すっかり荒れはてている。桃は１本もない。男、みすぼらしい身なりで釣をしている。老人登場）
老人　何をしているのだ。
男　　釣をしているのだ。

老人　釣れるかね。
男　何も釣れない。
老人　ここにあったたくさんの桃の木は、どうしたのかね。
男　みな、王様のところへ行った。
老人　おまえさんは金持になったろう。
男　ごらんの通りさ。
老人　高く売りつけてやればよかった。
男　ただで、くれてやった。
老人　ずいぶん、やせたね。
男　生きているのがいやになった。
老人　いくじのないやつだ。
男　二十何年もの苦労がむだになれば、だれだって少しはやけになるだろうさ。
老人　それが凡夫のかなしさというやつだね。
男　まあ、そんなところだろう。
老人　やけを起こすと、いいことがあるかね。わたしは、おまえさんが元気をなくしてると聞いて、やってきたのだ。
男　（気のない返事）それはありがとう。
老人　人間は、自分にできないことには責任をもつ必要はない。
男　そんなことはわたしだって知っている。

（小さい魚を釣りあげる）

老人　君が桃を植えることに飽きたのなら、それは仕方がない。だが、他人に奪われたからといって、しょげるのは男子として恥だね。

男　あなただったら、しょげないかね。

老人　わたしでも、しょげるだろう。だが、一年たっても、まだしょげているとは思わない。

男　あなたならどうする。

老人　わたしだったら、また桃を植える。

男　植えたって、また持っていかれてしまうだろう。

老人　それをとめることができなければ、持っていかすより仕方がない。だが、生きている限り自分の仕事をやめるのは恥だ。二十年ぽっちりの苦労がむだになったからといって、何もする気が出ないような男は、たのもしくないよ。君は仕事をはじめて、なんどしくじってもまいらなかった。その点、今どき珍しい男だと思った。そして、じっと君の仕事を見ていた。感心して見ていた。すると去年、あんな災厄にあったろう。わたしは、君の心を察して泣いたよ。しかし、君のことだから、今にまた桃を平気で植えはじめるだろうと、それを楽しみにしていた。ところが、わたしは、がっかりしたね。それで、わたしはやってきたんだ。切られた桃からは、ちゃんと芽が出ている。ところが君はどうだ。すっかり気力を失っているじゃないか。

もっともわたしは、まだ君に失望してはいない。君は、きっと、また仕事にとりかかるだろうと思っている。君は、いくら切られても、折られても、また生きかえる男であって欲しい。そういう男であってくれ。そういう男がいてくれることは、人間すべてのよろこびなのだ。

男　あなたの言うことは本当だ。しかし、わたしは元気がなくなった。そして、桃を植えて、それがいったい何になる、と疑うような気持になった。

老人　無理もない。君はまだ若いのだから。だが、君は少しずつ仕事をはじめてみるがいい。そのうち、元気になるだろう。人間は、そういうふうにできているのだ。君は、切られた桃から生え出した、あの元気のいい芽の美しきを、よく見ていないのだね、

男　どれ。（釣りをやめて、桃の切り株の方へ行く）ああ、本当に芽が出ていますね。おまえは、まだ死ななかったのか。再び、前のようなりっぱな木になろうと思っているのか。しかし、おまえも、これからたいへんだね。

老人　君は、この芽が大きくなった時のことを考えるから、たいへんだと思うんだ。この小さな芽の出たこと、その伸びようとする桃の勇気に感心すればよいのだ。わたしは、この桃を礼拝する。この桃の勇気が、半分でも君にあったら、わたしは君におじぎするよ。

男　だが、すべては空（くう）だと言った人がある。何もしない方がいいといった男もある。
老人　そんな人はない。それに似たことを言った男はある。君は元気がないから、そんな聞き違いをするのだ。人間は、生きている間は、何かしようとしなければいけない。私の若いころ、学問をするのがいやになって、山をおりようとした時、道ばたで、おのを、石にあてていた男がいた。何をしているのだといったら、針を作っているのだといった。わたしは、それを聞いてすっかり感心した。学問も、その気持で、やらねばだめだと思った。わたしの友だちは、二十年かかって書いた本の原稿を焼かれてしまった。その時わたしの友だちは、ちょうど君のようにまいったが、更に十五年かかって、更にいいものを書きあげた。それが人間の人間たるところだ。また、そういう話を聞いてよろこべるのが人間だ。まいるのも人間だが、それで折れないのも人間だ。わたしは、君に頼む。君は、再び君の仕事をやってくれ。生きている間は、失望しない男になって欲しい。
男　なりましょう。
老人　ありがとう。わたしは君を礼拝する。
男　いや、わたしこそあなたを礼拝します。
老人　やるか。それならまた来よう。
男　どうか、わたしの力がなくなった時、来てくださ

い。

老人　生きていたら、また来よう。

（老人、退場）

男　（桃の芽をながめながら）わたしは、おまえに負けないよ。おまえは、わたしの先生だ。わたしは、きっとやりぬいてみせる。

—第三幕—

男　（桃の花は、第一幕の時よりも美しく咲いている。第二幕より十数年後。男、あずま屋で、琴（他のものでもよい）をひいている。老人登場。老人しずかに桃をながめる。男、老人に気がつき、驚いて立ちあがり、うれしげに声をかける）

男　よく来てくださいました。ちっとも気がつきませんでした。

老人　みごとに花が咲きましたね。

男　さあ、どうぞ、おかけください。

老人　ありがとう。

男　こんな花を見ることができたのは、まったくあなたのおかげです。

老人　どうしまして、わたしがあんなことを言わなくとも、あなたはやれる人でした。
男　　そんなことはありません。あなたのおかげで、元気を取りもどしたのです。わたしは、今度、どうせ花は見られないものと思っていました。いつも、そういう不安はありました。しかし、腹の底では覚悟ができています。こんどは、いくら取りあげられても笑って持っていかせるでしょう。
老人　その気持が、この山の美しきの中にあらわれています。こんどはすべてが自然です。見ていて、気持がゆったりします。このまま仏さまになってしまってよいような気がします。
男　　わたしも、そういう気持で仕事をしてきました。前には、驚かしたいとか、感心させたいとか、そんな気持がありました。だが、こんどは万事、「あなた任せ」の気持で、ゆったりと仕事をしました。これも、あなたのおかげです。
老人　そんなことはありません。ここに来たものは、あなたの話を聞いて勇気を得、また、この景色を見て、心をやすらかにするでしょう。
男　　これは、あなたとわたしとの合作です。
（酒とさかずきを持ってくる）どうぞ、いっぱいあがってください。

老人　ありがとう。それでは、お祝いしましょう。こんな静かな、夢のような世界が、この世にあるとは、だれも思わないでしょう。わたしは、本当にうれしくなりました。

（老人、いっぱい飲んで、さかずきを男にかえす

男　あんまり、この景色に執着すると、またあらしがくるかも知れません。だが、わたしは安心して、たのしめることをよろこんでいます。

老人　なにしろ愉快です。（男のさかずきに酒をつぐ）静かな静かな日ですね。

（その時、りっぱな武人とその妻が登場）

武人　ああ、兄さん。

男　だれだ。

武人　兄さん、わたしです。

男　おまえか。ずいぶん会わなかった。その後どうしているかと思っていた。

武人　あれから、いろいろなことがありましたが、今は、王様に仕える身分になりました。

男　あのころ、からだはあまり強くなかったようだったが……。

武人　今はすっかり丈夫になりました。兄さん、これが、わたしの妻です。

男　はじめて……。

妻　この前はたいへんおさわがせしまして。

男　わたしには、思い出せませんが……。
武人　兄さんは、御存知ないはずです。これが十六年前、逃げてきて、わたしがかくしたあの娘なのです。
妻　あの時は、本当にご迷惑をおかけしまして。
男　あの時のことは、言わないでください。弟、よろこんでくれ。この通りのものになった。あの時よりは、もっと美しいだろう。
武人　わたしは、ここに来て、本当に驚きました。兄さんのことですから、また立ち直られるとは思いましたが……、心配していました。
男　一時は、まいったが、この方が来て、力を与えてくださったので、またやり直したんだ。（老人に）これは、わたしの弟です。
老人　はじめてお目にかかります。
武人　ありがとうございました。
男　あの時、おまえの強情には感心したが、にくらしくも思った。
武人　あの時のことを思うと、わたしは兄さんにすまなく思います。
男　いやいや、あの時は、わたしの心が少し狂っていたのだ。
武人　あの時、わたしは、もう少しで言うところでした。ですが、これに決して言わないと約束していたのでした。

男が約束をたがえるくらいなら、死んだほうがいいと思いました。それから、兄さん、王様が、こうおっしゃいました。兄さんが、この山を美しくするため、人夫が必要ならば、いくらでも使っていい。費用はみな王様が出すとのことです。

男　そうか、ありがとう。だが、わたしは、ひとりでやる。こういう仕事は、ひとりでやるところに、おもしろみがある。もっとも、ひとりでできない仕事があったら、その時はお願いするかも知れない。よろしく言ってくれ。

武人　承知しました。（妻に）どうだ。美しいだろう。

妻　はい。こんな美しい所は見たことがありません。

武人　兄さんの、三十何年の苦心の結晶なのだ。

妻　この前の時は何もわかりませんでした。何が幸せになるかわかりませんのね。

武人　人間は、何がまた不幸になるかわからないものだ。

妻　そんな縁起の悪いことは、言わないものです。

武人　しかし、どんな不幸が来ても、決心した者は、ひらけるだけ道をひらき、進めるだけ進むのだ。

妻　ほんとうにそうですね。

男　おまえの言うとおりだ。わたしたちの力は弱い。何かの許しがなければ、何一つできない。だが、やれるところまでは、やってみるんだ。何事がきても恐れないで、お互いに進んでいこう。わたしは、ますますこの山を美しく

していこう。おまえはおまえの信じる方に進んでいけ。さあ、ふたりとも腰かけて……、みんなで祝杯をあげよう。

（四人祝杯をあげる。）

―幕１―

演出上の注意

○この脚本を上演するには、まず、なん回も読んで、その思想を十分につかむことがたいせつです。主役の「男」は、なかなかむずかしい役がらです。

第一幕では、火のような情熱に燃え、第二幕では希望を失った青年の感じを出し、第三幕では、さとりきった平静な気持を表現することに注意してください。

○第一幕の少年、少女が、第三幕の武人とその事になるまでには、相当年月のひらきがあるわけですが、これは別々の人でなく、同じ人が、第一幕では、少年、少女らしい感じを出し、第三幕では、武人とその妻としておちついた感じを表現してください。

○老人の役は、「男」の役についで重要な役がらです。静かな中に威厳を内に持っている、という感じを表わしてください。

○あらくれ男は、幾分ユーモアな感じを出して、大いにあ

ばれてください。
○舞台装置は中国風に、といって、なんとなく、そんな感じが出ていればよいのです。服装などもくふうして、中国風に作ってください。
○上演がむずかしかったら、放送劇のように、せりふだけでもかまいませんから、やってごらんなさい。

〈武者小路實篤〉

一八八五年、東京都に生まれた。東京大学卒業後、志賀直哉、（しがなおや）木下利玄らと「白樺（しらかば）」を発行。学生時代からトルストイに傾倒した。一九一九年、日向に「新しき村」を作った。一九二七年からより絵画をはじめた。一九三七年、芸術院会員に推薦された。一九五一年、文化勲章を授けられた。
小説戯曲、随筆など著作が多い。

詩と語録

〈藤村詩碑〉

詩と語録

〈詩を語る人・エジプトの壁画〉

一　千曲川（ちくまがわ）旅情の歌

島崎藤村（しまざきとうそん）

小諸なる古城のほとり

小諸（こもろ）なる古城のほとり
雲白く遊子（ゆうし）悲しむ
緑なすはこべはもえず
若草も籍（し）くによしなし
しろがねのふすまの岡辺
日に溶けて淡雪流る

あたたかき光はあれど
野に満つる香（かおり）も知らず

浅くのみ春はかすみて
麦の色は（わ）づかに青し
旅人の群はいくつか
畑中の道をいそぎぬ

暮れゆけば浅間（あさま）も見えず
歌かなし佐久（さく）の草笛
千曲川いざよう波の
岸近き宿にのぼりつ
濁り酒濁れる飲みて
草まくらしばし慰む

二　江南の春

次の三編は中国人の詩です。このような詩を、ふつう漢詩とよんでいます。日本では、古くから中国人にならって漢詩を作り、また、日本流の読み方をして愛好してきました。漢詩には、短歌や俳句などとは、また違った情趣があります。

静夜の思い

李白―（七〇一―七六二年）字（あざな）は太白（たいはく）号（ごう）は青蓮居士（せいれんこじ）盛唐（せいとう）の詩人。

牀　前　看ル(二)　月　光ヲ(一)
牀前(しょうぜん)月の光をみる

疑ウラクハ　是レ　地　上ノ　霜カト
疑うらくはこれ地上の霜かと

挙ゲテ(レ)　頭ツ　望ミ(二)　山　月ツ(一)
こうべをあげて山月を望み

低レテ(レ)　頭ツ　思ウ(一)故　郷ツ(一)
こうべをたれて故郷を思う

牀前―寝台の前。疑うらくはこれ……かと―ではないのかしらと疑った。
こうべをたれて―うなだれて。しみじみと思いにふけっているようす。

春望

杜甫（とほ）（七一二―七七〇年）字は子美（しび）。号は少陵（しょうりょう）。盛唐の詩人。

国破レテ　山河在リ
国破れて山河あり
城春ニシテ　草木深シ
城春にして草木深し
感ジテハ　時ニ　花ニモ　濺ギ（レ）　涙ヲ
時に感じては花にも涙をそそぎ
恨ミテハ（レ）　別レツ　鳥ニモ　驚カス（レ）　心ヲ
別れを恨みては鳥にも心を驚かす
烽火　連（二）三　月ニ（一）
烽火　三月に連らなり
家書　抵タル（二）万　金ニ（二）
家書　万金にあたる
白頭　掻ケバ（）更ニ　短ク
白頭　かけばさらに短く
渾ベテ　欲ス（レ）　不ラント（レ）　勝エ（レ）　簪ニ
すべて簪（しん）にたえざらんと欲す

春望―春のながめ。国破れて―国都長安は反乱軍に攻め破られて。山河あり―山河は昔どおりにある。城―城内のこと。中国の都市は城壁をめぐらしていた。時に感じて―悲しい世のありさまに心をうたれて。花にも涙をそそぎ―花を見てもかえって涙がこぼれ落ち。別れを恨みて―戦乱のため一家散り散りになったことをうらめしく思って。鳥にも心を驚かす―小鳥の楽しげなさえずりをきいてもかえって悲しみをかきたてられる。烽火―敵のせめてくるのを知らせるのろし。三月に連なり―事の三月になってもまだ続いている。家書―家族からのたより。万金にあたる―一万金にも相当する。非常に貴重である。すべて簪にたえざらんと欲す―まったく髪をゆっても、かんざしをさして、冠をとめることができないくらいである。

江南　の春

杜牧（とぼく）（八〇三―八五二年）字は牧之（ぼくし、号は樊川（はんせん）。晩唐の詩人。

千　里　鶯　啼キテ　緑　映ズ（レ）　紅ニ
千里うぐいすなきて緑紅に映ず

水　村　山　郭　酒　旗ノ　風
水村山郭（さんかく）酒旗の風

南　朝　四　百　八　十　寺
南朝四百八十寺

多　少　ノ　楼　台　烟　雨ノ　中
多少の楼台烟雨（ろうだいえんう）のうち

江南―揚子江下流南岸の地。千里―千里四方もあるひろびろとしたところ。緑紅に映ず―草木の緑が花の紅と美しくうつりあっている。水村―水辺にある村。山郭―城壁に囲まれた山沿いの部落。酒旗の風―酒屋の目じる

しの旗が春風にひるがえっている。南朝―五世紀はじめから、六世紀末までの二百年、中国は　南北二つに分れた。そのうち揚子江一帯に興亡した国々を南朝という。四百八十寺―南朝では仏教が栄え、四百八十もの寺が建てられた。多少の楼台―多くの堂塔。烟雨―霧のような春雨。

三　孔子のことば（論語）

孔子は今から大体二千五百年前に、中国に生まれた偉大な思想家である。孔子の理想は「仁」―人間相互の思いやりと愛情―ということをよりどころとして、すべての人が調和のとれた安らかな生活をいとなむことのできるような政治を行なうことにありました。孔子の学問に従うものを儒といい、その教えを儒教といいます。「論語」二十巻は、孔子とその門人の言行をしるしたものです。

学ビテ　而　時ニ　習ウ（レ）　之ヲ。不（二）　亦　悦バシカラ　乎。

学びて　時にこれを習う。またよろこぼしからずや。

学んだことを、おさらいすると、学んだことが身にしみて、なかなかうれしいものです。

過チテ　而　不ル（レ）　改ル　謂ウ（レ）　過　矣。

あやまちて改めざる、これをあやまちという。

あやまちをして改めない。これがあやまちというものです。改めないと、あやまちは、ついには改められなくなってしまいます。

己ノ　所ハ（レ）　不ル（レ）　欲セ　勿レ（レ）　施スコト（二）　人ニ（一）

おのれの欲せざるところは、人に施すことなかれ。

自分のいやなことは、人にも押しつけないようにしなさい。

君　子ハ　和シテ　而　不（レ）　同ゼ。小　人ハ　同ジテ　而　不（レ）　和セ。

君子は和して同ぜず、小人は同じて和せず。

徳のある人は、他とよく調和しますが、雷同はしません。徳のない人は、雷同はするけれども他と調和はしません。

島崎藤村（一八七二―一九四三）

詩人、小説家、長野県に生まれる。明治学院卒、本名は春樹。一八九七年に著した「若菜集」は、高く評価され、のちの詩人に大きな影響をあたえた。一八九九年ごろより散文に転じ、「破戒」「家」「嵐」「夜明け前」などを刊行した。

国家も人間と変わりはない。
国家も人間のさまざまな性格からできあがる。
（プラトン）

国家の価値は、結局国家を組織する人民の価値である。
（T・S　ミル）

国家と　世界

一　国　家

今日、地球の上には、約三二億の人類が住んでいます。人類は、いくつもの国家を形成しています。この国家とは、どんなものなのでしょうか。簡単にいうと、ここに範囲の決まった土地があります。そこに、互いに結ばれあった多くの人々がいます。その人々は、一定の統治組織のもとに生活しています。これを国家といいます。だから、国家と名づけるには、国民と領土と、そして統治組織と、この三つの要素を欠くことはできません。

国民というのは、互いに結合しあって団体生活をしている人類のことです。国民の数は、国々によって差がありますが、少なくとも家族の範囲をこえた人々の集合でなければなりません。

国民と間違えて使われやすいことばに、民族ということばがあります。民族というのは、共通の文化要素を持ち、共同の歴史的な経過を持っている人々の集合体です。世界には、たまたま一民族で、一国国民をなしている国家もありますが、多くは数民族が集まって、一国国民をなしています。ブラジルは、数民族をもって、一国国民をなし

ている国家の一つです。

国家を形成するには、国民が定住している一定の地域を占めていなければなりません。この地域は、その国家の支配権が行なわれている範囲で、外国の支配権が行なわれることを排斥するところです。この地域のことを領土といいます。

いま一つ、国家には、統治組織が必要です。法的に国民を支配し得る権力者があり、国民はそれに服従するという、一つの組織がなければなりません。統治権を持つものの組織、統治の方法、また服従の程度などは、時代により、また国柄によって、いろいろな相違もありますが、この組織のない国家というのはありません。

では、こうした国家というものが、どのようにしてできたのでしょうか。その起こりは、一体どういうことなのでしょう。神様のおぼしめしによってつくられたとも言います。いや家族がだんだん大きくなり、発達したものだとも言います。また、力の強い者が、弱い者たちを征服してつくったのだとも言います。そのほか、さまざまな説がありますが、何よりも、第一に、それが国家であることを、人々が認めなければ、国家は成立しません。たしかに、統治する主権の確立があったに違いありません。そして、その主権の実力に対して、服従しようと思う人々の気持が結びついた時、はじめて国家というものがおこったと考

えられます。

それでは、国家というものの本質を、どのように考えたらよいのでしょうか。強者が弱者たちを実力によって、支配している状態であるとも言います。また、その反対に、人類がもっている道徳が最高の形であらわされている形式と考えるべきだとも言います。それとも、もっと簡単に、人々が力を合わせることによってできた制度とも言います。まだ、いろいろな説がありますが、国家の本質は、国民全体で構成された団体としての単一体という風に考えるのが妥当であるといわれています。

国家は、人類が形成した単なる集合体ではなくて、ながく継続的に形成する単一体ですから、法律上からいえば、一個の人格と見ることができます。つまり国家は法人なので、当然目的をもち、目的を達成するための意志や能力をもっており、また権利と義務との主体でもあります。

国家の主権は、唯一のもので、分けることのできない最高のものです。だから、国家の意志の力は、国内にむかっては最高であり、国外にむかっては独立です。

国家は法人ですから、いろいろな機関を持ちます。君主・大統領・国会などは直接機関です。国務大臣・裁判所、その他の行政官庁などは間接機関です。

国民と領土と統治組織を持ち、自らは国家であると主張しても、国際間に、それが認められなければ、国家とし

ての資格は、十分なものとはいえません。ですから、国際法上、一定の地位を占めて、国際社会の一員であることが認められる必要があります。

そこで、世界中に通じる国家となるためには、国際法上の基本原則を承認しなければなりません。そして、国際法の上で決めてある国家としての権利を持つと同時に、義務を負うことによって、はじめて完全な国家ということができるのです。

二　兵役について

人はだれでも、自分の幸福を求めて、自発的に行動する権利を持っています。そして、人は、何よりも、それをたいせつにしなければなりません。

自分がたいせつだと思うものは、他の人にとっても、たいせつなものなのです。だから、他の人の気持も尊重すれば、慎み深い気持にもなり、他人に対してもあたたかい愛情を持つようになるはずです。このような自発的で、しかも慎み深く、愛情にみちた精神を、ヒューマニズムの精神といいます。

人は、ヒューマニズムの精神を持つとき、不合理なことや、悲惨なありさまを黙視することができなくなります。

勇気をもって先に立ち、みんなが幸福な生活ができるようにと、行動するものです。

人はだれでも、自分の家族に親しみを持ち、自分の郷土に愛情を持ちます。この気持が、何かによってはばまれたとき、それを取り除こうとします。その行動が、ヒューマニズムの精神によって裏うちされていれば、単に自分だけでなく、社会全体を幸福に導くことになるでしょう。

個人が、家族や郷土を愛するように、国家もまた、国民と領土を愛し、その繁栄を望むのは当然です。そして、他国からの干渉を排斥し、他国から侮辱を受けないよう防備を持つのも、また当然のことです。こうした国家の行動も、個人の場合と同様に、ヒューマニズムの精神をもって起こされるならば、それは、ただ、その国家だけを幸福にするだけではなく、世界全体を栄えさせ、幸福に導くことになるはずです。

このような考え方から、世界中、どの国も国家としての権利と義務を行なうため、政治・経済・文化、その他多くの枢要な組織や施設をもっています。これら多くの組織や施設の中の一つに軍事組織と軍事施設があります。

ブラジルも、国家として正しい権利と義務を行なうため、陸軍・海軍・空軍の三軍をそなえています。三軍は常に施設を充実させ、組織を強化して、国の守りにつき、必要なときは、いつでも出動できるように準備しています。

軍の施設や組織に要する費用には、国費をあて、兵員は、国民をもって、これにあてます。

海軍と空軍の兵員は、特別の機関によって養成されますが、陸軍の兵員は、職業軍人を除き、一般国民の男子の中より徴集します。ですから、ブラジル人男子にとって、徴兵に応じることは、納税・選挙・教育と共に、国民としての四大義務の中の一つといえます。

ブラジルでは、徴兵に関する制度が、はじめてできたのは一八七四年です。しかし、兵役に服することを国民男子の義務としたのは、一八九一年二月二十四日に発布された憲法の第八十六条によります。

すべてのブラジル人男子は、満十七歳に達すると、六か月以内に、その居住地の徴兵登録所に、身分登録をしなければなりません。そして兵員としての適性検査に合格した者は、現役兵として入営し、一か年の訓練を受けることになっています。

しかし、兵員としての訓練を受けた者だけが兵役の義務を負うのではありません。健康な男子である限り、平時は、満十八歳より、満四十五歳まで、すべてのブラジル人は兵役に服する義務があります。また、国家として必要な場合には、この年限を、その時の事情にあわせて延長することもあります。

このように、国民は徴兵に応じて兵員となるばかりで

なく、自分からすすんで、軍人になりたい者には、その道がひらかれています。それぞれの志望に従って資格試験を受け、また軍人としての学校教育を受け、その資格が認められれば、職業軍人になることができます。

軍備は、外にむかっては、国家の独立を守り、内にむかっては治安を維持するという、重大な任務を帯びています。国民は、国家の意志によって定められたこの制度に信頼し、すすんで義務を果たすよう、心がけなければなりません。

三　国を愛する心

ふるさとよ　おまえを見捨てはしない
おまえは　ぼくらの夢　ぼくらのあこがれ
おお　笑いの地よ　涙の地よ
おまえは　ぼくらの歌　ぼくらの光

東の　そして西の　同胞よ
どんな暴力にも　抵抗せよ
しっかりと　おのれを守れ
むねにかたく　祖国をだけ

平和を守る人々は　青い旗のもとに集まる
そのとき　戦争の脅威はしりぞく

「くりかえすな」のさけび声に

この詩は、ドイツの国民詩人ヨハネス＝ベッヒャー作、「ふるさとよ、おまえを見捨てはしない」という詩の前半である。ライン河のほとりの農民におくられた詩であるが、あらゆる暴力に抵抗し、平和を守っていこうとする固い決意がうたわれている。

よく「愛国心」ということがいわれるが、愛国心とは一体なんであろうか。国に対する愛情のことであろうか。たしかに、自分の国を愛する心にちがいない。しかし、ただ自分の国が好きだ、自分は国を愛している、という、それだけで、愛国心の本当の意味は成りたたない。さらに進んで、自分の国をよりよい国に発展させていこうという精神を持ち、より幸福な、より住みやすい国にするため、努力しなければならない。もし、他の国に比べて、自分の国が愛するにたりないと思ったら、愛するにたる国にするよう、正しい判断と行動とをもって、努力しなければならない。

自分の国がどんなにすぐれているか、いかに正しい国

であるかを説くため、他国をけなし、他の国民を見下げるような愛国心の育て方が、もしあったとしたら、それはゆがんだ愛国心の養成といわなければならない。

愛国心というと、国が危くなったときにだけ必要なもので、平和な時には必要でないと考えるのもまちがいである。平和な時にも、国民全体の生活が向上し、国民が幸福にくらせるよう努力するのが愛国心なのである。国民生活は、国民ひとりひとりのたゆまぬ努力によって向上するものである。ところが、国民の生活というのは、それぞれが仕事をし、勉強し、そして休養する、ということの連続である。この毎日の繰り返しが、直接、国家と結びついているということを、つい忘れがちである。戦争がおこり、国が敗れるかどうか、というときになって、はじめて国家ということに思い至るというむきが多いのである。

国民は、毎日生活のため精いっぱいの努力をしている。そして、あすは、きょうより少しでも豊かな、楽しい生活をしたいと望んでいる。自分がよりよい生活をしたいと願うなら、まず、国が少しでもよくなるように力を尽くさなければならない。

しかし、ここで一つ考えねばならないことがある。世界の人が、みな自分の国だけを愛し、自分の国だけをよくしようとしたら、国と国との競争がおこり、そこに憎しみや、うらみの心がわき、それはやがて、戦争にまで持ち込

まれるかもしれない。国と国との間にそのような感情があっては、決して永久の平和は生まれてこないだろう。

国家は世界の中に存在するものである。その国民は、自分の国の利益だけを考えないで、他の国の人々、広くは人類全体の幸福を考えなければ、真の国家の幸福はつかめない。

原子力と人工衛星を持つ現代は、人類が平和な毎日をおくっていけるような世の中を生み出す可能性と、人類もろともに地球を破滅させるような危険性をもっている。自分の国を愛し、国民生活を向上させると同時に、世界の人々と手をつなぎ、人類全体を幸福にしていくのが、真の愛国心である。

四　国際連合

第二次世界戦争の後、全世界が永久の平和を保つために、国際団体を作りました。これを国際連合といいます。

一九一七年、第一次世界大戦の後、やはり世界永遠の平和を目ざして、国際連盟というものを作って、いろいろ国際間のできごとに対処しました。今度の国際連合は、それに該当するものですが、もっと組織の大きい、強力なもの

です。

国際連合は、一九四五年、終戦直後に作られたもので、その時、加入した国は五十一か国でしたが、その後、加入する国がだんだんふえており、やがては全世界の国々はみな加入することになると思われます。しかも、最初からの加入国に、アメリカ合衆国・イギリス・ソビエト連邦・フランスなどの大国のあることは、国際連合の強味の一つです。

国際連合の憲法ともいうべきものを「国際連合憲章」といいます。そして、この国際連合憲章には、連合の本筋の組織だとか、その働きなどが決められています。この憲章の原案は、一九四四年、ワシントン郊外のダンバートン・オークス会議で、アメリカ合衆国・イギリス・ソビエト連邦・中国によって決められ、次いで、サンフランシスコ会議で修正されて、できあがりました。サンフランシスコ会議というのは、一九四五年、第二次世界大戦の時の連合国五十か国が参加した会議です。こうして、一九四五年に成立し、翌年の一九四六年から、国際連合の活動がはじまりました。

国際連合の目的は、国際間の平和を乱したり、一国が他の国を侵略するような醜行があったとき、これを急速に止めることにあります。しかし、これは、凶変の起こった場合のことですが、平常は、世界の国々が仲良く共に繁栄

していくための方法を考えたり、そのための行事をしたりすることを目的としています。ことに、平和共存のためには、文化・経済、その他あらゆる面で協力し、媒介の労をとることになっています。そして、あくまでも人類の平和と自由を尊重していこうとするものです。

連合憲章には、先ず加入国は、みな平等な権利をもって交際するということを決め、さらに、加入国に与えられた義務は、忠実に実行する、ということが規定してあります。

事件が起こって、兵力を動かすときは、他国の領土や、その独立を傷つけてはならないことや、連合憲章に基づいて行動する場合は援助することなども決めてあります。さらに、連合に加入していない国に対しても、世界の平和と安全のためならば協力しようということも決めてあります。そして、最後に、連合国は、国内に起こった問題に対しては、互いに干渉しないよう、申しあわせをしています。

国際連合に、最初から加入しているのは、第二次世界大戦の時の連合国側の国々で、これを原連合国といいます。その後、連合の考え方に賛成して、加入を希望する国には、総会を開いて加入させてよいかどうかを相談し、三分の二以上の賛成があれば加入を認めます。また、この総会では、これまで加入していた国でも、憲章に違反する行動

があった時には三分の二の賛成によって、その国を除名することもできるのです。

〈総会〉

加入国の全代表が集まって、一年に一回ずつ定期の総会が開かれます。しかし、急に問題がおこって、定期の総会まで待てない場合は、臨時に総会を開きます。

この総会では、連合の根本のことや、加入を認める国のことなど、憲章に照らして討議したり、さらに、いろいろな事件の起こっている国に対して、こうしてはどうでしょう。とか、やめてはいかがでしょうとかの勧告を行ないます。総会は、どうしても、こうしなさいとか、ああしなさいとか命令はしません。勧告を行なうわけです。

決議の場合は、投票数の三分の二以上で決められます。

〈安全保障理事会〉

国際連合の目的は、世界の平和と安全を保つことなのです。この目的を達成するための実行機関を、安全保障理事会といいます。これは、五つの常任理事国と、十の非常任理事国の代表者から構成されています。常任理事国は、アメリカ合衆国・イギリス・ソビエト連邦・フランス・中国の五か国です。非常任理事国は、総会のとき、選挙によって決めます。非常任理事国の任期は二年で、三か国ずつが、選挙によって交代します。

この理事会の決議法は、ちょっと変わっています。というのは、非常に大事なことを決めるときは、常任理事国全部が賛成しないと決まらないことになっています。

〈経済社会理事会〉

経済・文化・人道上のことなどの国際問題の処理にあたる理事会です。この理事会は、十八連合国の代表者によって構成されます。

〈信託統治理事会〉

総会で統治をまかされた土地を処理する理事会です。

〈国際司法裁判所〉

国際連合には、国際司法裁判所規定というきまりがあって、そのきまりに照らしあわせて、国際間の訴訟を裁判するところです。

〈事務局〉

連合の一切の事務を処理する役所です。その責任者を事務総長といいます。

〈憲章の改正〉

憲章で、適用上都合のわるいことがあると、それを改正する案が総会に提出されます。その案が採用されるためには、各国代表の三分の二の賛成によらなければならず、さらに、連合国の三分の二によって批准されることが必要です。そして、この批准の中には、安全保障理事国のすべての常任理事国が含まれていなければなりません。こ

うした条件がそろったとき、はじめて改正されたことがらに効力ができるのです。

あおげば尊し

作詞者　不明

あおげば　とうとし　わが師の恩
教の庭にも　はや　いくとせ
おもえば　いと疾（と）し　このとし月
今こそ　わかれめ　いざさらば

互いにむつみし　日ごろの恩
わかるる　後にも　やよ　わするな
身をたて　名をあげ　やよ　はげめよ
いまこそ　わかれめ　いざさらば

朝ゆう　なれにし　まなびの窓
ほたるのともしび　つむ白雪
わするる　まぞなき　ゆくとし月
今こそ　わかれめ　いざさらば

日本の古典

一　源氏物語

紫　式　部

紫式部の著した平安時代の長編小説である。宮廷生活を中心として平安時代の世相を描写し、全編を次の五十四帖に分けている。桐壷きりつぼ　帚木ははきぎ　空蝉うつせみ　夕顔ゆうがお　若紫わかむらさき　末摘花すえつむはな　紅葉賀もみじのが　花宴はなのえん　葵あおい　賢木さかき　花散里はなちるさと　須磨すま　明石あかし　澪標みをつくし　蓬生よもぎう　関屋せきや　絵合えあわせ　松風まつかぜ　薄雲うすぐも　槿あさがお　乙女おとめ　玉鬘たまかつら　初音はつね　胡蝶こちょう　螢ほたる　常夏とこなつ　篝火かがりび　野分のわき　行幸みゆき　藤袴ふじばかま　真木柱まきばしら　梅ケ枝うめがえ　藤裏葉ふじのうらは　若菜わかな（上下）　柏木かしわぎ　横笛よこぶえ　鈴虫すずむし　夕霧ゆうぎり　御法みのり　幻まぼろし　雲隠くもがくれ　匂宮におうみや　紅梅こうばい　竹河たけかわ　橋姫はしひめ　椎本しいがもと　総角あげまき　早蕨さわらび　宿木やどりぎ　東屋あずまや　浮舟うきふ

ね　蜻蛉かげろう　手習てならい　夢の浮橋ゆめのうきはし

以上の、幻までを前編とし、光源氏を主人公とし、紫の上など幾多の才媛を配して、その得意の生活を写し、雲隠の一帖は、光源氏死去の意を寓（ぐう）し、名だけで文がなく、勾官以下の三帖は、後編への連鎖、後編の橋姫以下の十帖は、光源氏の子、薫大将の失意の状を写したものである。これは特に宇治十帖と名づけられている。

つぎに掲げたのは、五十四帖のうち前編第五編「若紫」の一節である。古文だけあって、日本文とはいいながら難解である。本文を省いた現代口語訳だけの所と、注釈つきの本文の所とを交互にのせてみた。少しでも「源氏」というものがのぞければ幸いである。

〈口語訳〉

源氏は、親しい者を四、五人ほどお供にして、まだ夜深いうちにお出ましになる。お訪ねになろうとする北山の庵（あん）室のある所は少し山深くはいった所だった。

弥生のつごもりなれば（三月廿日過ぎのころであるから）、京の花盛りは（都の花盛りは）皆過ぎにけり。（すっかり過ぎてしまった。）

山の桜は（山の桜は）　まだ盛りにて（まだ盛りで）、入りもておはするまゝに、（次第に山へはいって行かれるにつれて、）

霞のたゞずまひも（霞のたなびいている趣も）　をかしう（興味深く）　見ゆれば（思われるので）、かゝる（かような）

ありさまも（けしきも）　ならひ給はず（ごらんじなれておられず）　所せき（勝手にお出歩きもならぬ貴い）　御身にて（ご身分のことだから）

珍しう（珍しいことに）　思（おば）されけり。（お思いになった。）

寺のさまもいと（寺の有様もたいそう）あはれなり（興味深く盛ぜられる）。　峰高く深き巌（いわお）の中にぞ（峰が高くそびえ岩にとりまかれた奥深い所に）　ひじり（聖は）入り居た（住まっていた）りける。

〈口語訳〉

源氏は、そこまでお上りになって、誰であるとも名をお明かしにならず、たいそうひどく手軽なごようすでは

あったが、それとすぐわかるようなお姿であるから、「どうも恐れ多いことだ、先日お召しになったお方でいらせられるだろうか。今では現世の事を心にかけていないので、お祈りをして効験をあらわすなどという行法もうちすて、忘れているのに、どうしてかようにおいで下さったのであろう」と聖（ひじり）はあわて騒いで、にっこりと源氏のお姿を拝する。たいそうありがたい高僧であった。然るべき護符（ごふ）などを作ってお飲ませ申上げる。加持などをしてあげているうちに、日も高くさし上った。源氏は庵室を少し立ち出でてお眺めなさると、そこは高い所なので、あちらこちらに僧坊などがはっきりと見下ろされる。源氏は、

「すぐこのうねり曲った坂の下に、他と同様な小柴垣ではあるが、きちんと手ぎわよくめぐらして、小ぎれいなうちや廊下などを建て続けて、立木の様子もたいそう趣きがあるのはどういう人が住む所なのか」

とお尋ねなさると、お供の人が、

「これが、例の僧都が、この二年間こもっている坊である」

源氏は、

「気のおける人が住んでいる所だな。不体裁にも、あまり軽々しい身なりでやってきてしまった。ひょっと私の来た事を聞きつけるかもしれない」

などとおっしゃる。小ざっぱりした女の子などが大ぜ

い出て来て、仏様に水をお供えしたり花を折ったりするのもはっきりと見える。

「あそこにまあ女がいる。僧都がまさかあのようにそばに置きはなさるまいに、どういう人たちなんだろう」

とお供の人が口々にいう。坂を下りて、のぞく者もいる。なお

「美しそうな女たち、若い女や子どもなどが見える」

ともいう。

源氏は、お勤めをしておられるうちに、日盛りになるにつれて、おこりの発作が来やしないかと案じておられたところが、お供が、なにかとお気をまざらされて、ご病気のことをご心配なさらないがよろしいと申上げるので、後ろの山にお出ましになって、都の方をごらんになる。

遙に霞み渡りて、匹方の梢　そこはかとならう（ずうっと遠くまで霞が立ちこめて、見渡す限りの木々の梢が　緑に萠えてどことなく薄煙りの）

けぶり渡れるほど、　絵にいとよくも似たるかな。かかる所に住む人、心に思ひ残（ようにぼうっとして見える具合は、ほんとにまあ絵にかいたように見えるよ。かような景色のよい所に住む人は、心にあきたらぬことは）

すことはあらじかし」と宜へば、「これは　いと浅く侍り。人の国などに侍る海山（あるまいなあ」と仰せられると、「こんなけしきは　ほんとにまだつまらない。地方などにある海や山の）

のありさまなどを　御覧ぜさせて侍らば、いかに御絵いみじうまさらせ給はむ。（ありさまなどをごらんになられたならば、どれほどおん絵がご上達なさることだろう。）

富士の山、なにがしの嶽」など語り聞ゆるもあり。また西の国の　おもしろき浦々、（富士の山とかなんとかいう嶽など」というようにお話し申上げる者もある。また西国方面の興味深い浦々や）

磯のうへをいひつゞくるも　ありて、よろづに紛らはし

聞ゆ。（磯のけしきをいろいろと述べたてる者もあって、何やかやとご気分をまぎらわせ申し上げる。）

「近き所には播磨の明石の浦こそ　なほことに侍れ。何のいたり深き隈はなけれど、（「近いところでは　播磨（はりま）の明石（あかし）の浦が　やはり格別な趣きがある。なにもこれといって目立つ点はないけれど、）

ただ海の面を見渡したるほどなむ、あやしくこと所に似ず　ゆほびかなる所に侍る。（ただ海上を見渡した具合がふしぎによそとは趣きを異にしていかにものんびりした所である）

（中略）

日もいと長きにつれづれなれば、夕暮のいたう霞みたるに紛れて、かの小柴垣のも（日もたいそう長いのでつれづれのままに、源氏は、霞が深くかかった夕暮れにとりまざれて、あの小柴垣をめぐらした庵のは）

とに立ちいで給ふ。人々はかへし給ひて、惟光ばかり御供にして、のぞき給へば、（とりにお立ちいでになる。人々はお返しなされてただ惟光（これみつ）だけをお供にして、

中の様子をねのぞきになると、）

ただこの西面にしも、持仏する奉りて、行ふ尼なりけり。簾（すだれ）すこし上げすぐ目の前の西座敷に、持仏をおすえ申して、お勤めをする尼が現われた。仏前のすだれを少しまき上げて仏に花をお供えす）

て花奉るめり。中の柱に寄り居て、脇息の上に経を置きて、いとなやましげに読み（る様子である。中の柱に寄り添うて脇息の上に経をのせて、たいそうものうさそうにそれを読んでいた尼）

居たる尼君、たゞ人と見えず。四十余ばかりにて、いと白くあてに　瘠せたれど、（君は、ただ者とは思われない。四十余りの年ごろで、たいそう色白に上品にやせてはいるが、）

つらつきふくらかに、まみのほど、髪の美しげに（ほほのあたりが　ふっくらとして、目つきの具合、髪が　きれいに）

そがれたる末も、なかなか長きよりもこよなう今（切りそろえられた端も、かえって長いよりも格別にしゃれたも

のよ）

めかしきものかなと、あはれに見給ふ。清げなる（と、しみじみとごらんなされる。小ざっぱりした）

おとな二人ばかり、さてはわらはべぞ出でいり（女人が二人ほど、他に子どもたちが出たりはいったりして）

遊ぶ。中に十ばかりにやあらむと見えて、白き衣（遊んでいる。その中に十ほどであろうかと思われて、白い下着に）

山吹などのなれたる著て、走り来たる女子、あまた月えてる児に似るべくもあらず、（山吹がさねのなよなよになったのを着て、かけてきた女の子は、おおぜい見えた　子どもとは似もつかないくらいに、）

いみじうおひさき見えて、美しげなるかたちなり。髪は扇をひろげたるやうゆらゆ（全く成長後はどんなであろうと思いやられるほどの、きれいなかおだちである。髪はふっくらと扇をひろげたようにふさふさとゆれ動いて、）

らとして、顔はいと赤くすりなして立てり。

尼「何事ぞや。わらはべと腹だち給へるか」

とて、尼君の見上げたるに、少し覚えたるところあれば、子なめりと　見給ふ。

紫「雀の子をいぬきが逃しつる。ふせごの中にこめたりつるものを」

とて、いと口惜しと思へり。この居たる大人、

「例の心なしの、かゝるわざをして　さいなまるるこそ、いと心づきなけれ。何方へかまかりぬる。いとをかしう　やう〳〵なりつるものを。烏などもこそ見つくれ」

らとして、顔はいと赤くすりなして立てり。（顔は手でこすってたいそう赤くして立っている。）

尼「何事ぞや。わらはべと腹だち給へるか」（「どうしたのか。子どもたちと　けんかでもなさったか」）

とて、尼君の見上げたるに、少し覚えたるところあれば、子なめりと　見た給ふ。（といって　尼君の　見上げたその顔に、少し似通っている　点があるから、多分子だろうと　ごらんになる。）

紫「雀の子をいぬきが逃しつる。ふせごの中にこめたりつるものを」（「雀の子を　いぬきが逃してしまった。ふせごの　中に入れておいたものを」）

とて、いと口惜しと思へり。この居たる大人、（といって、たいそう残念がっている。そこにいた女の一人が、）

「例の心なしの、かゝるわざをして　さいなまるるこそ、いと心づきなけれ。伺方（「またいつものそそっかしやが、こんな不始末をしでかして　叱られるんだよ、まあ気にいらない。どちらへ）

へかまかりぬる。いとをかしうやうやうなりつるものを。烏などもこそ見つくれ」（雀は逃げて行ったか。ほんとにかわいらしく　そろそろなって来たものを。からすなどが見つけたらたいへんだ。」）

とて立ち行く。　髪ゆるらかにいと長く、めやすき人なめり。（といって座を立ってさがしに行く。髪がゆらゆらとしてたいそう長く、見苦しくない女のようである。）

尼君「いであな幼や。いふかひなうものし給ふかな。おのがかく、今日明日になり（「まあよくよく子どもであるよ。

なんとも仕様もない方でおありなさること。私がこのように、きょうにもあすにもわからぬほ）

ぬる命をば、何ともおぼしたらで、雀慕ひ給ふほどよ。罪得る（どに寿命がせまったことを、なんとも　お考えにならずに、雀をほしがりなさるようながんぜなさであるよ。生きものをいじめると罪を得ると）

常に聞ゆるを、心憂（う）く」とて（平生申し上げているのに、情ないことだ」といって

「こちや」（「こっちへおいで」）

といへば、ついゐたり。つらつきいとろうたげにて、眉のわたりうちけぶり、いは（というと、かしこまっていた。顔つきはたいそうかわいらしくて、眉のほとりが　ほんのりと匂いやかで、子どもら）

けなくかいやりたる額つき、かんざしいみじう美し。ねびゆかむさまゆかしき人か（しくむぞうさに髪をかきあげた　ひたいぎわ、髪のぐあいが　たいそう美しい。だんだん大きくなってゆくさまの奥ゆかしい人であるよと）

なと目とまり給ふ。（源氏は目がおとまりになった。）

（後略）

【注】この少女が、北山から引きとられ理想的に養育された「紫の上」で源氏の正妻となった。この物語の中心女性である。

二　枕　草　子（まくらのそうし）

清　少　納　言

清少納言が、長保元年から二年（九九九～一〇〇〇年）ごろ作った随筆である。作者が中宮定子に宮仕の長徳・長保ごろを中心に、自然現象または事物、情意生活、四季の情趣、人生などに関する随想・見聞を基にして日記などを折にふれて記したものである。冷静な写実と才気煥発（か

んぱつ）の筆致とは、源氏物語と共に平安文学の双璧（そうへき）と称せられ、日本の随筆文学の代表作といわれている。

る。また、ただひとつふたつなど、ほのかにうち光ってひかりて行くもをかし。雨など降るもをかし。

秋は夕暮。　夕日のさして山のはいとちかうなりたるに、からすのねどころへ行くとて、三羽みつ

四羽、二羽三羽よつ、ふたつみつなどとびいそぐさへあはれなり。まして雁などのつらねたるが、

いとちひさくみゆるはいとをかし。日入りはてて、風の音　むしのねなど、

はたいふべきにあらず。

（一）春はあけぼの。やうやうしろくなり行く、山ぎはすこしあかりて、むらさきだ（春は夜明けが興趣深い。段々と白んではっきりしていく、その山と空との境が少しあかるくなって、紫ばんだ）

ちたる雲のほそくたなびきたる。（雲が細くたなびいたのは　おもむきが深い。）

夏はよる。月の頃はさらなり、やみもなほ、ほたるの多く飛びちがひた（夏は夜がとりわけ趣き深い。月のあるじぶんはなおさらであるが、やみ夜もなおさらおもむきがあり、ほたるがたくさん飛び乱れたのが興味深い。）る。また、ただひとつふたつなど、ほのかにうち（また　たった一ぴき二ひき　かすかに光って）

ひかりて行くもをかし。雨など降るもをかし。（とんでゆくのも興趣がある。雨などが　降るのもおもむきの多いものだ。）

秋は夕暮。夕日のさして山のはいとちかう（秋は夕ぐれがおもむきがある。夕日がさして山と空との境に　近くなった）なりたるに、からすのねどころへ行くとて、みつ（ところを　からすが　ねぐらへ　飛びゆくのか、三羽）よつ、ふたつみつなどとびいそぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、（四羽、二羽　三羽　飛び急ぐのは　さらに　優美である。まして　かりなどが　列になって飛び）いとちひさくみゆるはいとをかし。日入りは

てて、風の音　むしのねなど、（たいそう小さく見えるのは　おもむきの多いものである。日がはいってしまって　風のあらあらしい音や　草にすだくやさしい虫のねなど）はたいふべきにあらず。（口に出して言うこともできないほどの情趣である。）

冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず、霜のいとしろきも、またさ（冬は夜明けが情趣たっぷりだ。雪の降ったのは　もちろんだが　頭の　大そう白いのも　これまた、）らでもいと寒きに、火などいそぎおこして、炭もてわたるもいとつきづきし。昼に（そうでなくてさえ寒いのに　火などを　いそいでおこして　炭を持ってごてんの内を通るのも調和したありさまだ。朝はこん）なりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶（おけ）の火もしろき灰がちになりてわろし。（なだが昼になって、寒さがだんだんゆるんでゆくと　火鉢の　火が、（かまい手がなくなって）白い灰になったままなのはみっともない。）

（七一）たとしへなきもの。（ちがいすぎてくらべようのないもの。）夏と冬と。夜と昼と。雨降る日と照る日と。人のわらふと腹立つと。老いたるとわかきと。（腹が立つのと。年よったのと　若いのと。）しろきとくろきと。思ふ人とにくむ人と。おなじ人ながらも、心ざしあるをりと変りた

るをりは、まことにこと人とぞおぼゆる。（好意がある時と　なくなった時とでは　ほんとに　別人かと　思う。）

火と水と。肥えたる人、瘠せたる人。髪ながき人とみじかき人と。（ふとった人と　やせた人。〈女の人の髪の長いのは当時の美の条件で、長いのは美人、短かいのはみにくかった〉）

（九五）ねたきもの、人のもとにこれより遣（や）るも、人の返りごとも、書き（しゃくにさわること、くやしいこと　人にあてて　たよりをこちらから届けるのでも、人からきたたよりにこたえる返事でも、書いてや）てやりつるのち、文字一つ二つ思ひなほしたる。とみの物縫ふに、かしこう縫ひっ（った　あとで、一文字二文字訂正を思いたった〈ののくやしいこと〉。急ぎのものを縫うのに　うまく　縫ったと）と思ふに、針をひき抜きつれば、はやくしりを給ばざりけり。また、かへ（思ったとたん、針をひきぬいたら　ぬいはじめに糸の終わりのはしを結んでいなかった〈のはくやしいことだ。〉きれを）さまに縫ひたるもねたし。（裏返しにして縫ってしまったのもくやしい、ざんねんだ。）

（二五）うつくしきもの、瓜にかきたるちごの顔。雀の子の、ねず鳴き（か愛らしいもの〈きれいな意味ではない〉、うりに描いた二歳から五歳までの幼児の顔。雀の子がねずみのなき声を）するにをどり来る。二つ三つばかりなるちごの、いそぎてはひ来る道に、（まねてチュウチュウと呼ぶとおどるようにしてやってくる。二つか三つになる　幼児が　急いではってくる途中で）いとちひさき塵（ちり）のありけるを目ざとに見つけて、いとをかしげなるおよびにとらへ（大そう小さい　ちりのあったのを　目ざとく　見つけて　大そう愛らしいかっこうの　指につまんで）て、大人（おとな）などに見せたる、いとうつくし。頭（かしら）はあまそぎなるちごの目に髪のおほへ（おとななどに　見せたのは　たいそうかわいらしい。おかっぱあたまの幼児が〈尼の切り方と同様にして肩のあたりで切り揃えた髪を）るをかきはやらで、うちかたぶきて物など見たるも、うつくし。（していた〉髪の毛のかぶさっているのを手でかき払うこともしないで　くびをかしげて　物などを見ているのも　たいそうかわいらしい。）

おほきにはあらぬ殿上童の（てんじょうわらわ）、さうぞきたてられてありくもうつくし。をかしげな（大きくは

ない　殿上童が　着物をきちんと着せられて　歩いていくのも愛らしい。美しい

るちごの、あからさまにいだきて遊ばしうつくしむほどに、かいつきて寝たる、い（幼児が　ちょっと　抱いて遊ばしたりあやしたりするうちに　だきついたまま眠ってしまったのも　なん）とらうたし。（ともいえず愛らしい。）

雛（ひひな）の調度。蓮（はちす）の浮葉のいとちひさきを、池よりとりあげたる。葵（あふひ）のいとち（おひなさまの道具が愛らしい。はすの　浮き葉のたいそう小さいのを　池から　とりあげたのはかわいらしい。あおいの大そう小さい）ひさき。なにもなにも、ちひさきものはみなうつくし。（のもかわいらしい。なんでもかでも小さいものは　みなかわいらしい。）

いみじうしろく肥（こ）えたるちごの二つばかりなるが、二藍（ふたあゐ）のうすものなど、衣（きぬ）ながら（ひじょうに色白で　ふとったあかちゃんの　二つばかりになったのが　藍と紅とで染めたうすものなどの　着物のたけが）

にてたすき結（ゆ）ひたるがはひ出でたるも、また、みじかきが袖（そで）がちなる着（長くて柚を背にかけてたすきあげに結んでいるのがはい出してくるのも〈たいそうかわいらしいが、〉また、短い着物だが、袖が大きいのを着て）てありくも、みなうつくし。八つ、九つ、十ばかりなどの男児（をのここ）の、声はをさなげに（歩くのも　みなかわいらしい。八歳、九歳、十歳ほどの　男の子が、子どもっぽい声で）てふみ読みたる、いとうつくし。（本を読んでいるのは、たいそうかわいらしい。）

にはとりのひなの、足高に、しろうをかしげに、衣（きぬ）みじかなるさまして、ひよひ（にわとりの　ひなが　足長に　白く　美しげに　着物が短いといったようなようすをして　ヒヨ　ヒヨ）よとかしがましう鳴きて、人のしりさきに立ちて（やかましく　ないて　人のうしろやさきに立って）ありくもをかし。また親の、ともにつれてたちて（歩くのも美しくかわいらしい。また親鳥が　いっしょに連れだって）走るも、みなうつくし。かりのこ。瑠璃（るり）の壷（つぼ）。（走るのも　みなかわいらしい。かりやかもの卵（もうつくしいし）。仏骨などを入れるつぼ。（も美しい）

（二九九）雪のいと高う降りたるを、例ならず御（み）（雪がとても高くつもっているのに、いつもとちがって御格）格子（かうし）まゐりて、炭櫃（すびつ）に火おこして、物語などして（子をおろし奉って、いろりに　火を起こして、ゆっくりと話なんかをして）集りさぶらふに、「少納言よ、香炉峰の雪いかならん」と仰せらるれば、御格子あ（集まってお控え申している時に、「少納言よ、（注）香炉峰の雪は、どうだろう」とおっしゃったので、御格子を上げさせげさせて、御簾（みす）を高くあげたれば、わらはせ給ふ。（て　御簾を　高く上げたところ、お笑いあそばす。）

人々も、「さることは知り、歌などにさへ歌へど、思ひこそよらざりつれ。（〈おそばにいた〉人たちも「そういう事は知っていて、歌なんかにまで作るが、思いつくことは、それは、まったくなかった。）なほ、此の宮の人には、さべきなめり。」といふ。（やはり、あなたは、この宮の女房としては、適当な人であるようだ。」と言う。）

【注】白氏文集、十六「香炉峰下に新に山居をトし云々」と題する詩に「日高く睡（ねむ）り足りて猶（なお）起くるに慵（ものう）し。小閣衾（ふすま）を重ねて寒さを伯（おそ）れず。遺愛寺の鐘は枕を欹（そばだ）てて聴（き）き、香炉峰の雪は簾（すだれ）を撥（かか）げて看（み）る。」とある。

三　徒然草（つれづれぐさ）

兼好法師

吉田兼好（一二八二～一三五〇）の著書である。元徳二年（一三三〇）末から、元弘元年（一三三一）秋にかけてできた。「つれづれなるままに」という句で筆を起こし、内容は、種々の思索的随想や見聞など約二百四十節から成っている。名文の誉れが高く、日本随筆文学の白眉（び）といわれている。

（序）つれづれなるまゝに、日暮らし、硯（すずり）にむかひて、（〈なにかしたいがすることもない・話し相手もない・ひとり居の〉所在たさにまかせて・終日　硯を前にして）

心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐ（〈つぎつぎと〉心に浮かんでは消えてゆくわけもないとを、順序もなく　書きつければ　ふしぎなほど、〈いろいろな思いがわい〉

るほしけれ。（てきてわれながら〉気ちがいじみた気持がする。）

（四五）公世の（注）（きんよ）二位のせうとに、良覚僧（りょうがく）正と聞えしはへ　極（め）て腹あし（公世の二位〈八十歳以上。著者兼好より六十歳年上〉の兄弟で　良覚僧上と申し上げた方は、ひじょうにおこりっぽい人だりたそ）

き人なりけり。坊の傍（かたわら）に、大きなる榎（え）の木の（うです。僧の住居のそばに大きな　えのきが）

ありければ、人、「榎木（えのきの）僧正」とぞ言ひける。

この名然（あったから　人々が、この方のことを「榎木僧上」と　呼んだのであった。〈このアダナを聞い）

（る）べからずとて、かの木を伐られにけり。その（た僧正は、〉こんな名はけしからんというので　その榎木を切り捨てて　しまわれた。ところが）

根のありければ、「きりくひの僧正」と言ひけり。（その根株があったから、〈こんどは人々が〉切杭（きり株）の僧正と言った。）

いよいよ、腹立（ち）て、きりくひを掘り捨（て）たり（〈僧正は〉いよいよ立腹して　切株をほり捨てたところが）

ければ、その跡大きなる堀にてありければ、「掘池僧正」とぞ言ひける。（そのあとが　大きな堀になっていたので、〈こんどは〉堀池の僧正といったということである。）

【注】公世の二位、従二位侍従藤原公世。歌人。一三〇一年没。時に八十歳以上の高齢。

（五三）これも仁和寺の法師、童（わらは）法師にならんとする名残（なごり）とて、（これも　仁和寺の僧であるが、

仁和寺で召し使った少年―ちごという―がいよいよ髪をそって坊さんになろうとするお別れだというの）

おのおのあそぶ事ありけるに、酔（ひ）て興に入るあまり、傍（かたわら）なる足鼎（あしなが）を取りて（で、めいめい　芸などをすることがあったが、〈ひとりの坊さんは〉酔って　興に乗りすぎて　そばにあった足つきのかなえをとって）

頭に被きたれば、つまるやうにするを、鼻をおし平（ひら）めて、顔をさし入（れ）て舞（頭に　かぶったところ、つかえるようなぐあいでうまくはいらないのを　鼻をぺしゃんこに押しつけて　顔をさしこんで〈満座のただ中へ出て〉踊って

（ひ）出（で）たるに、満座興に入（る）事かぎりなし。（出たものだから、一座をあげてこの上もなく大かっさいであった。）

しばしかなでて後、抜かんとするに、大方抜かれず。酒宴ことさめて、（しばらく舞をまって後、〈かぶっていたかなえを〉抜こうとするが　どうしても抜けない。酒宴も興がさめて）

いかゞはせんとまどひけり。とかくすれば、頸（くび）のまはりかけて、血垂〈た〉り、たゞ腫（は）れ（どうしたものかと、〈皆〉途方にくれた。抜こうとしていろいろすると、首のまわりの肉がそげて　血が垂れ、たゞもうはれてはれては

に腫れみちて、息もつまりければ、打（ち）割らんとすれど、たやすく割れず。（れふさがって　息もつまってきたから、うちわろうとしたけれども　なかなか割れない。）

響きて堪へがたかりければ、かなはで、すべきやうなくて、三足〈みつあし〉なる角の上に、惟（かた）（〈音が頭に〉ひびいて我慢することができなかったから、手もつけられず、なんともしようがなくて　〈かなえをさかさまにかぶっているのでかなえの〉三本足が角のよ

子（びら）をうち掛けて、手をひき杖をつかせて、京なる医師（くすし）のが（うに上に向いているその上にかたびら〈裏なしの着物〉をかけて、手をひき杖をつかせて、京の医者の　もと）

り率て行（き）ける道すがら、人の怪しみ見る事限（り）

なし。医師のもとにさし（へつれて行った　その途中、人がふしぎがって　見るといったらない。〈さて〉医者のところへ行って、）

入りて、向ひゐたりけんありさま、さこそ異様（ことやう）なりけめ。物を言ふも　くゞもり声（〈医者と〉向かいあった　かっこうは　さぞ珍妙なものだったろう。〈なにしろ〉物を言っても　含み声に）

に響きて聞えず。「かゝることは文にも見えず、伝（へ）たる教へもなし」といひ（ひびいてききとれない。〈医者もこまって、〉こういうことは医書にも見当たらないし、〈師匠からの〉口伝えの教えもない。というの）

へば、また仁和寺へ帰りて、親しき者、老（い）たる母など、枕上に〈まくらがみ〉寄りゐて泣き（で、また　仁和寺へ帰って　近親の者や年をとった　母などが枕もとに集まりすわって　泣き）

悲しめども、聞くらんとも覚えず。（悲しんでいるのだが〈本人は〉聞いているだろうとも思われない、聞こえそうにもない。）

かゝるほどに、ある者のいふやう、一たとひ耳鼻こそ切れ失すとも、命ばかりは（こんなにしているうちに、ある者がいうには、〈たとい　耳や鼻がちぎれてなくなっても　一命だけはどうしてと）

などか生（き）ざらん。たゞ力を立てて引き給へ」とて、藁のしべをまはりにさし（りとめられないことがあろう。力いっぱいに　おひきなさい。というので、わらのしんをまわりにさしこんで）

入（れ）て、かねを隔てて、頸もちぎるばかり引きたるに、耳鼻缺（か）けうげながら抜（金の上から　首もちぎれるほどに　引いたところが　耳も鼻も欠けもげてあなになりながら抜けて）

けにけり。からき命まうけて、久しく病（や）みゐたりけり。（しまった。やっと命だけは助かって　久しく病んでいたということだ。）

（１０５．ｊｐｇ　ことば一覧表あり）

（一〇九）高名の木のぼりといひしをのこ、人を淀（おき）てて、高き木にのぼせて梢を切（有名な　木のぼりと　い

われた男が、人に指図して、高い木に登らせて　枝を切らせた）

らせしに、いと危く見えしほどはいふ事もなくて、降るゝ時に、軒長（のきたけ）ばかりに成（ときのこと、非常にあぶなく見えた時分には　なんとも言いもしないでおいて　降りる時に　軒の高さぐらいになってから）

（り）て、「あやまちすな。心して降りよ」と言葉（ことば）をかけ侍（はべ）りしを、「かばかりに（「そそうするな。気をつけておりろ」とことばをかけましたが〈それを見て私は〉「これくらいになったから）

なりては、飛（び）降るとも降りなん。如何（いか）にかく言ふぞ」と申（し）侍（り）し（には　とびおりてもおりられるだろう。（それなのに）どうしてこう言うのだ」と申したところが、

かば、「その事に侯。（さうらふ）目くるめき、枝危きほどは、己が（おのれ）恐れ侍（はべ）れば申さず。（「されば でございます。目がまわる〈くらい高く、〉枝が〈しなって〉あぶないうちは、自分が恐れて〈つつしんで〉おりますから〈私からは〉注意

あやまちは、やすき所に成（り）て、必（ず）仕（つかまつ）る事に侯」といふ。（しません。あやまちは、わけはないという所になってから　必ずしでかす池きまったものでございます」と答えた。

あやしき下臈（げろう）なれども、聖人の戒めにかなへり。（いやしい　下賤のものだけれども、〈その言う所は〉聖人のいましめに一致している。）

宇宙の果てまで

この望遠鏡では1等星の6億分の1の明るさしかない23等星まで写真にとることができます。

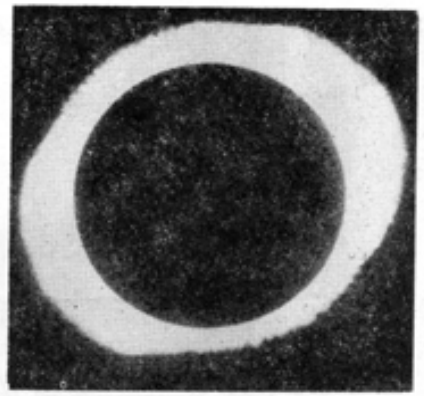
〈パロマ天文台200インチ反射望遠鏡〉

一　太陽と月

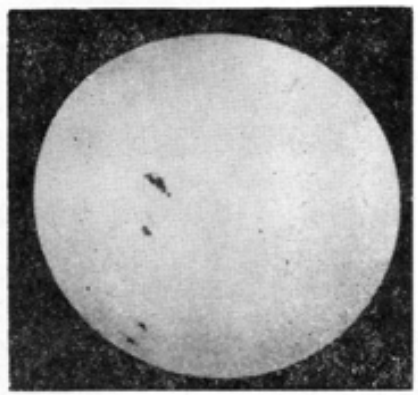
太陽は，地球から，約１５０００万ｋｍの距離にある。その直径は，地球の約１０９倍である。太陽を望遠鏡で見ると，中に黒点が幾つも見える。この黒点は，約１１年を周期として増減する。黒点の多い時は，太陽の活動がさかんであって，地球上に磁気あらしを起こしたり，北極や南極の近くに，オーロラが現われたりする。黒点

の観察を継続すると，それは左から右に移動していることがわかる。これは，太陽が自転していることの証左である。

太陽を包んでいる大気層は，ふだんは見ることはできない。しかし，皆既食の初めと終わりとに，数秒間，赤く輝くのを見ることができる。この大気層を彩層といい後光（ごこう）のように四方にひろがっている青白い光をコロナという。大気の厚さは約１万ｋｍで，いろいろな元素の気体を含んでいる。



〈太陽とコロナ〉



〈太陽の黒点〉

太陽は，目に見える光線と共に，目に見えない赤外線や紫外線を放射しており，また電波も放出している。太陽の表面温度は約６０００度であるが，中心の温度は１５００万度ぐらいである。そこでは，原子核の反応が起こっていて，絶えず光と熱などのエネルギーが作られていると考えられる。

太陽は恒星の一つで，どの星のまわりをも回っていないが，毎秒約２０ｋｍの速度で，琴座の方に向かって移動している。これは，太陽の近くにある５００ぐらいの星団の中心を軸として回転しているのではないかと考えられている。

月は地球から約３８４４０３ｋｍの距離にあって，地球のまわりを，約１カ月で公転している。月は１公転の間にちょうど１回自転する。それで，地球からは，いつも同じ半面しか見ることができず，残る半面は永遠のなぞとされていたが，１９５９年，ソビエト連邦が，ロケットによる写真撮影に成功し，はじめてその様子が知られた。月のように惑星のまわりを公転している天体を衛星という。月の直径は約３５００ｋｍで，表面面積は３８００万平方ｋｍである。月は既に凝固してしまった天体で，表面は地球の岩石のようなもので形成されていると思われている。月には水も空気もなく，気象現象は一切見られない。であるから，日中は太陽の熱をうけて高温になるが，夜間に熱め放射を防ぐものがないので，急激に気温は低下すると考えられている。

地球上の海洋現象として，海水の干満がある。干潮と満潮とは１日に２回ずつ見られるが，月と太陽の引力の働きに関係して起こる現象である。

公転している月が，地球と太陽とのちょうど中間に位

置することがある。この時地球上のある場所から望見すると，太陽が月に隠されて，見えなくなることがある。これを日食といい，太陽が全部隠されたのが皆既日食で，１部分が隠されたのは，部分日食という。

また公転する地球が，太陽と月との中間に位置した時，地球のかげが月に写ることがある。これを月食という。月が地球の影ですっかり隠されるのを皆既月食とし，１部分が隠されるのを，部分月食という。

二　太陽系

太陽のまわりを公転している惑星には，地球のほかには，次のような星がある。太陽に近いものからいうと，水星・金星・地球・火星・木星・土星・天王星・海王星・めい王星でこの九惑星の間に，約１６００もの小惑星がある。これらは，全体として，一つのまとまりをみせているので，太陽系という。もちろん，惑星のまわりを公転している衛星や，すい星・流星もまた太陽系の星として数えられる。

太陽系の中で，最大のものは木星で，地球の１１倍の体積を持ち，最小のものは木星で，地球の約５分の２である。また従えている衛星の数も，木星が最も多く，１

２の衛星を従えており，水星・金星・めい王星には皆無である。

水星は自転時間と公転周期が等しく，どちらも８８日で，太陽との距離は５７９０ｋｍである。金星の自転時間は２０日以上で公転は約２２５日である。太陽との距離は１８０００ｋｍである。水星には大気がないので，太陽から受けた光の７％しか反射しないが，金星には大気があって，５９％も反射する。

火星の自転時間は２４時３７分で，公転は３８７日，太陽との距離は２２８０ｋｍである。

木星は，自転９時５０分，公転１２年，太陽との距離７７８００ｋｍである。土星は，自転，１０時１４分，公転２９年，太陽との距離１４２６００ｋｍである。火星の表面を観察すると，１年間に，いろいろな変化のあるのが見られる。表面の条件が地球と酷似しているので，生物が生息するのではあるまいかと考えられ，いろいろ研究されている。木星の表面には大小幾つかのしま模様が見られる。土星には，その赤道の周囲に偏平な輪がある。これは無数の星粒の集合したものであることが確かめられている。

天王星は自転，１０時４５分，公転８４年，太陽との距離２８６９００ｋｍである。海王星は，自転１５時４０分，公転１６５年，太陽との距離４４９５００ｋｍで

ある。めい王星は自転１６時，公転２４９年，太陽との距離は７６９２００ｋｍである。

水星は余りにも太陽に近いため，観測が困難であり，金星・火星・木星・土星などは，肉眼でも観測することができる。しかし，天王星・海王星・めい王星などは，いずれも太陽の光の反射が弱く，望遠鏡によらなければ観測できない。

小惑星は，火星と土星との間にある小粒の天体である。現在１６００ほど知られているが，いちばん大きなもので，直径７７０ｋｍぐらいである。

天空を尾を引いて飛ぶ天体が現われることがある。これをほうき星，またはすい星という。太陽系では，ハレーすい星というのがよく知られている。晴れた夜空に星が尾を引いて流れるのを見ることがある。これを流星という。流星は，星の破片が，地球の大気の中を通過する時，燃焼して流れ落ちていくものである。なかには，燃え切らないうちに，地上に落下するのがある。こ

（１１０．ｊｐｇ　ことば一覧表、）

食品と薬品

おもなことば

太字は新出漢字　線引きは読みかえ

ページ	ことば
208	望見する
	日食
	月食
	太陽系
	水星
	金星
	火星
	木星
	土星
	天王星
	海王星
	めい王星
209	すい星
	流星
	最小
	皆無
	平均
210	酷**似**
	しま模様
	偏平な
	無数
	星粒
211	肉眼
	観測する
	尾を引いて
	ほうき星
	ハレーすい星
	夜空
	破**片**
204	1等星
	反**射**
	望遠鏡
205	直径
	黒点
	周期
	あらし
	オーロラ
	継続する
	移動し
	証左
	大気層
	皆既食
206	彩層
	後光（ごこう）
	コロナ
	赤外線
	電波
	原子核
	恒星
	星団
	公転し
207	半面
	惑星
	天体
	衛星
	夜間
	干満
	干**潮**
	満潮

食品　と　薬品

一　食品と栄養

わたしの家では，昨年の中ごろ，おも屋に続けて裏の方に台所と食堂を増築したが，これは兄の発案によるもので，設計は，母とわたしが担当した。新設の台所は従来のものに比べて，はるかに明るく広々としている。戸だな，調理台，流しなど，働く場合のことを考慮して配置した。炊事や器具の整とん，そうじも容易にできるので，いかにも清潔な感じである。食堂には手洗い場を設け，通風採光にも留意した。調理に必要な温度計・液量計・重量計などもそろえた。

”家族の健康は食事から，食事は台所から”というのが，わたしの家の標語である。

新しい台所ができてからは，わたしは一層料理に興味を持ち，新聞雑誌の料理記事なども，特に注意して読むようになった。

食品は，ざっと数えて一千種あるといわれる。これらの食品は，いずれも，その一つだけで栄養としての必要な成分を全部持っているのではない。それで，いろいろ

な食品を取りあわせて食べなければ十分な栄養をとることができない。それぞれの食品に含まれている栄養素を全部知ることは困難である。そこで，食品を大きく類別して，その主な栄養素だけでも知っておれば大へん便利である。

食物の中の栄養素は，炭水化物・たんぱく質・脂肪・ビタミン・無機物などに分けることができる。穀類や芋類は，でん粉質に富んでいる。野菜や果物は，ビタミンや無機質を含んでいる。肉類や豆類は，たんぱく質と脂肪を豊富に持っている。

人は，食物という燃料をとり，その熱を力にかえて生命を保持し，活動するのである。熱量を計るとき，カロリーという単位を用いる。化学や物理学では，１ｇの水の温度を１度だけあげるに必要な熱量を１カロリーとし，これを基準としている。

しかし，栄養学の方では，この単位を一千倍にあげて使用する。つまり１０００ｇの水の温度を１度だけあげるに必要な熱量を１カロリーとしている。　それでは，人が生命を保ち，活動するには，どれほどのカロリーが必要であろうか。もちろん，おとなと子ども，仕事の種類などによって，カロリーの必要量に差がある。普通，おとなで２５００カロリーを要する。激しい労働に従事する者は，一日に４０００カロリーもとる必要があるとい

う。これだけのカロリーを食物から取るのであるから，どの食品にカロリーが多いか，ということを知らなければならない。

でんぷん質とたんぱく質は，１g，約４カロリーで，脂肪は，１g約９カロリーである。カロリーが多いからといって脂肪ばかりとるのも，また自分の好みにあう食物からばかりカロリーをとるのも正しい栄養のとり方ではない。炭水化物７５％，たんぱく質１４％，脂肪１０％，無機質１％というのが，栄養のとり方としての標準である。

次に，栄養に役立つ成分と，その働き及びその成分を含むおもな食品について書いてみよう。

炭水化物は，体力のもとになるもので，穀類，芋類に多く含まれている。パンや芋などを食べると，体内で変化し，熱や力のもとになり，余剰は，グリコーゲンというものになって肝臓にたくわえられる。

脂肪は，肉類・バター・牛乳・卵・大豆・落花生などに多く含まれている。脂肪はカロリーが多いので，身体の活動力を高める。

だから，体力を多量に消費する時など，多くとる必要がある。

たんぱく質は，筋肉や血液はもとより，皮膚・内臓など，身体組織を作るものである。成長期には，特に必要

なもので，これが不足すると成長が止まってしまう。たんぱく質は，獣肉，魚肉・牛乳・卵・大豆・落花生などに多く含まれている。

次にビタミンのことを書いてみる。ビタミンは身体の調子をととのえるもので，これが欠乏すると病気にかかりやすい。ビタミンは体内で作ることができないので，外からとらなければならない。

〈鈴木梅太郎博士〉

ビタミンは，今から５０年くらい以前には，その存在さえ知られていなかった。１９１０年，日本の鈴木梅太郎（すずきうめたろう）博士が，はじめて，この要素の一つをぬかの中から抽出して，オリザニンという名をつけた。次いで１９１２年，ポーランドのフンクという学者が，一つの要素を発見してビタミンと名づけた。これは鈴木博士の発見したオリザニンと同じもので，今日ビタミンＢ１といわれている。その後，多くの学者によって

，ビタミンはA，B，C，D，E・・・・というふうに数十種も発見されている。

ビタミンAは，牛乳・卵・肝油などに含まれている。また野菜や果物にある赤や黄のカロチンという色素は，体内でビタミンAに変わる。ビタミンAが欠乏すると，夜盲症（とり目）になる。また子どもの場合は，病弱となり発育が停止する。

ビタミンB1は米ぬかに多く含まれている。であるから白米だけを食べていると，これが欠乏して，体がだるく気力が失せてくる。ビタミンB1は，米ぬかのほか，麦・あわ・そば・豆・肉類・卵などに含まれている。

ビタミンB2は，黄色の色素で，身体の発育に必要なものである。これが不足すると，身体の調子が悪くなる。これは酵母と牛の肝臓に多く含まれており，穀類の皮や，ほうれんそう・キャベツなどにもある。

ビタミンCは，新鮮な青野菜や緑茶，みかん類に多く含まれている。これが不屈すると，血管や骨が弱くなり，壊血病にかかりやすい。ビタミンCは，熱や光に破壊されやすいので，煮沸すると消滅する。

ビタミンDは，病気への抵抗力をもっている。ビタミンDは，身体を太陽光線に当てるとできてくる。これが不足すると，骨がやわらかくなり，くる病になったり歯が悪くなったりする。肝油・酵母・しいたけ・きりぼしな

どに多く含まれている。　ビタミンＥは，健康な赤ん坊が生まれるために必要なもので，これは，小麦・米・とうもろこし・青野菜などに含まれている。

人体の３分の２は水分である。人は飲食を停止していると４日ぐらいで死亡するが，水をとっておれば４週間くらいは生命を保つことができる。水は養分を身体の各部に運んだり，体温を調節する。

無機質というのは，カルシウム・りん・鉄・ヨード・マグネシウム・銅・いおう・ナトリウムなどである。カルシウムは，骨や歯を作るのに大切な成分であり，その他のものも無くてはならないものである。これらの無機質は，血液がアルカリ性になったり，酸性になったりするのを中和する働きをもっている。動物の骨や臓物，牛乳・卵・野菜・くだもの・海草類に含まれている。

食物をとる時，必要な栄養素に注意しなければならないが，おいしく食べるということがたいせつである。清潔な場所で，楽しく食べると，食物はよく消化され，十分な栄養になるということを忘れてはならない。

二　薬品のいろいろ

人類は病苦からのがれるため，知恵をしぼっていろいろな方法を講じてきた。神仏に祈って病苦を取り除いてもらおうとした。草根木皮など，あらゆる自然物の中に薬を求め，その力によって病気をなおそうとした。また科学を応用し，薬を発明して病気を克服しようとしてきた。

特に，１９世紀以後，科学の進歩と共に，医学が急速に発達して，合理的な医療法の普及と，薬品の発明発見がさかんになってきた。そして，今日では，古来不治とされた多くの病気に治療の方途がひらかれた。しかし，まだハンセン氏病，がん，その他幾つかの病気には，その療法と薬品が見出されていない。

これまで，人類が病気を克服するために発明発見してきた薬品には，草根木皮のほかにワクチン，免疫血清・化学療法剤・駆虫剤・ホルモン剤などがある。

ワクチンというのは，種痘・腸チフス・ポリオ（小児まひ）その他流行性伝染病の予防接種に用いられるものである。身体に病原体や，その毒素が入りこむと，それらを無力なものにしようとする物質が血液中にできる。この事を免疫といい，病原体や，その毒素を抗原，それを

無力にするものを抗体という。

たとえば，腸チフス菌という抗原が体内に侵入したとする。すると，この抗原を無力なものにしようとして，抗体ができる。そして，ついに腸チフス菌は克服され，身体は再び健康を取りもどす。その後，腸チフス菌が体内に侵入しても，病気にかからないか，あるいは，かかっても軽症であって，すぐもとの健康体にかえる。つまり，その人は腸チフス菌に対して免疫となっているのである。このような免疫を応用して，ある伝染病が発生すると，その病気の抗体を作るため，抗原としての作用はあるが，病原としての作用を弱めたものが，予防接種に用いられる。これがワクチンといわれるものである。

免疫血清は，ジフテリア・破傷風にかかったり，狂犬，毒じゃにかまれたりした時におこなわれるものである。抗体を含む他の動物または人の血清を注射すれば容易に免疫を得ることができる。それで，馬その他の動物からとった血清を，身体に病原体が侵入した疑いのある時注射して，病原体を無力にする。このことを血清療法という。

化学療法剤というのは，それを用いる身体には害がなく，身体に侵入している病原体にだけ作用する薬品のことである。化のう菌に作用するサルファ剤類やペニシリン，結核菌に作用するストレプトマイシンなど，その他

多くの化学療法剤がある。ペニシリン・ストレプトマイシン・オーレオマイシン・テラマイシンなど，菌類から作られるものは，抗生物質といわれ，特定の病原体に対して，強力に作用する。

しかし，これを継続的に使用すると，その力に対抗するだけの強さを持った変種の病原体が現われ，ついには効力がなくなるということもある。

〈ペニシリンを発見したフレミング〉

寄生虫を駆除する駆虫剤も，化学療法剤の一種であるが，これは，寄生虫にも作用すると同時に，人体にも作用する。であるから，服用する分量について，十分注意する必要がある。そして，駆虫剤は，服用後下剤を用いて，寄生虫と共に体外に出すようにしなければならない。回虫には，サントニン・マクニンなど，十二指腸虫には，チモール・四塩化炭素など，肝臓ジストマには吐酒石，さなだ虫には，メンマキエス・カマラなどが使用されている。

栄養素のどれかが不足すると，栄養失調症やビタミン欠乏症になる。そうした場合栄養剤をとる必要がある。栄養剤には，各種のビタミン・アミノ酸・灰分・ぶどう糖などを配合したものがあり，錠剤・注射液，その他油や酒に混入させたものがある。

ホルモンというのは，内分泌腺とよばれる体内の特別のところで作られるもので，これが血液に混じって器官の作用を強めたり，弱めたりする。甲状腺から出るチロキシン，副腎（じん）から出るアドレナリンやコルチン，胃から出るインシュリンなど，いろいろある。ホルモン剤は，動物の内分泌腺や尿などからとったホルモンや，また化学的に合成したホルモンから製造される。

海の外へ

一　貿易について

世界各国の気候や風土はさまざまである。従って産物の種類も異なり、産出量にも差がある。そのため、各国とも、ある物資は過剰であり、なる物資は不足する。そこに国と国との商行為がなりたつのであって、これを貿易という。貿易は、この外同じ物でも、自国で生産するより、外国から購入した方が安価であったり、外国品の方が優秀である場合にも行なわれる。

貿易には、輸出貿易・輸入貿易・バーター貿易・中継貿易・加工貿易・白田貿易・統制貿易などがある。

輸出とは、外国へ物資を売り出すことであり、輸入とは、外国から物資を買い入れることである。ブラジルが日本に綿花を売るのは輸出であり、アメリカから石油や紙を買うのは輸入である。金額の上で、輸出が輸入よりも多いことを輸出超過といい、輸入が輸出より多いことを輸入超過という。また、輸出入がほぼ等しいことを輸出入の均衡という。貿易は輸出入が均衡であるか、輸出超過の場合、よい状態と言えるが、輸入超過の場合は、悪い状態である。

バーター貿易とは、物々交換のことである。輸出入貿易は、普通貨幣をもって決済するが、バーター貿易というのは、物と物との交換によって決済する貿易である。たとえば、ブラジルのバナナとアルゼンチンの小麦とを交換する、これがバーター貿易である。

中継貿易というのは、中つぎ貿易のことである。外国から物を買うとき、国内での消費だけが目的でなく、最初から、また別の国に売ることを目的として買い入れることがある。たとえば、日本製のトランジスターは優秀、安価なので、アメリカの商人は、それを買い、そしてブラジルに売り込む、これが中継貿易である。

加工貿易というのは、原料を輸入し、これに加工して別の物品に作りかえ、そして輸出することである。たとえば、日本はブラジルから綿花を輸入し、それで綿布、綿製品をつくって東南アジア諸国に輸出している。これが加工貿易である。

自由貿易というのは、貿易商人に、思いのまま取り引きをさせることである。政府が貿易に対してなんらの制限も加えず、まったく自由に取り引きをさせることである。

統制貿易というのは、貿易に政府が制限を加えることで、制限貿易・管理貿易などともいわれる。たとえば「この物品は、一千万クルゼイロ以上輸出してはならない。」とか、「この物品は、政府の許可がなければ輸入してはな

らない。」とか、政府が統制したり、管理する貿易のことである。

現在、世界の国々は、だいたいに自由貿易を行なっているが、相手国によってはバーター貿易も行ない、また、物資によっては、統制貿易も行なっている。

輸出入貿易が行なわれれば、外国との間に貨幣の受け渡しが生じる。このことを国際収支という。輸出入が均衡であれば、外国より得た貨幣で支払いを済ませることができよう。しかし、輸入超過の場合は、不足分を自国の貨幣で支払わなければならない。ところで、自国の貨幣が外国に通用すればよいが、通用しない場合はどうするか。その場合は、世界中に通用している外国貨幣（略して外貨という。）を買い、それで支払うか、または、純金で支払うかしなければならない。現在世界に通用している貨幣は、アメリカのドル貨と、イギリスのポンド貨で、各国は、そのいずれかで国際収支を決済している。外貨の手持ちがない場合は、外国で借金をして、その外貨で支払い、後でその借金額に相当する物資を輸出して埋め合わせをつけるのである。しかし、実際には支払い超過にならないうちに、政府は輸入に必要な資金を外国の政府または民間から借りる約束を、あらかじめしておく。この約束のことを借款といい、国際間に借款が成立していても、実際には借

金していない場合もある。このように、外貨の手持ちがない時は、外国との間に借款をおこし、それで支払うことができるが、借款が成立していない国に支払う場合はどうするか。それは、国際通貨基金から、必要な時、必要なだけの金を借りて債務を果たすようにする。

この国際通貨基金というのは、ドル貨、ポンド貨の枯渇にそなえて、世界の国々が金を出しあって作った基金のことである。

この国際通貨基金の設置も、貿易を円滑に行なうための国際的な取り決めであるが、この外、貿易に関する国際的な措置には、通商協定とガットがある。通商協定は、国と国とが、貿易や為替（かわせ）についての取り決めをすることである。この協定には、貿易協定と支払い協定の二つがある。貿易協定というのは、取り引きの方法や、取り引きする物資についての取り決めで、支払い協定は、支払い方法についての取り決めのことである。

ガットというのは、世界の国々が相談してきめた輸入税に関する協定である。国と国とが通商協定を結び、互いに有利な貿易を行なっても、その他の国との貿易には不利となる場合がある。それで貿易がしにくいので、世界の国々が輸入税を決めておくことが必要である。それで、取り決められた協定がガットである。

国際収支の生じるおもな原因は貿易にあるが、その外

にも、貿易外収支というのがある。おもなものをあげると、運賃・保険料・手数料、移民の送金、観光客の滞在費などである。これらは外国から金を受け取る時は輸出、支払う時は輸入と同じ結果なので、〝目に見えない貿易〟ともいえる。

国際収支が均衡であることは、国の経済が健全であることを物語るもので、そのうえ、外貨をなるべく多くたくわえておけば、一層国力を増進させることができる。そこで、各国とも輸出を盛んにして、外貨の獲得に力をそそいでいるのである。

貿易は、国内産業をさかんにし、外国との文化交流にも役立ち、その利点は非常に多いが、また注意しなければならぬ点もある。輸出市場の奪い合いから、これまでの親交国が、敵対国に変わることもあり得る。特に過当な競争から、ダンピングなどが行なわれた場合、国際間の友交と信用を傷つけることになる。ダンピングというのは、輸出市場の独占を目的として、生産費を割るような安い値段で、外国に物資を輸出することである。これは、貿易上の不正手段なので、国際間で固く禁止されている。

ブラジルの貿易は、近年著しくさかんになってきた。一九六二年の調べによると、輸出は約一二三〇万トン（約一二億クルゼイロ）。品目も、コーヒー、綿花、赤鉄鉱のよ

うな基礎物資や、食料品ばかりでなく、化学製品や機械類まで、その範囲は広くなっている。

輸入の方は、やはり一九六二年の調べで、約一六七〇万トン（約一四億クルゼイロ）となっている。品目を見ると、基礎物資では原油が首位を占め、食料品では小麦、化学製品では肥料、機械では、金属加工用機器、製造品では、新聞用紙などがトップである。このように、数字で見ると、ブラジルの貿易は、輸入超過であって、決済は、外貨を買って支払わねばならない状態にある。この状態を打開して、健全な貿易にするためには、まず、国内消費を緊縮して、貯蓄に励み、一方産業をさかんにして、輸出振興の機運を醸成しなければならないであろう。

二　船の将来

船と人間とは昔から深い関係がある。人間が船を持たなかったら、今日これほど、進んだ文明を築くことはできなかったかも知れない。人間は船によって世界を知り、物資を交換し各地に移住した。このようにして、生活を豊かにしてきたのであるが、船の発達を考える時、それがいつも科学や技術の先頭に立っていたことを知るのである。

人間は、馬を乗り回すよりも、車を使うよりもさきに、船で往来することを考えた。さらに、それを鋼鉄製の蒸汽

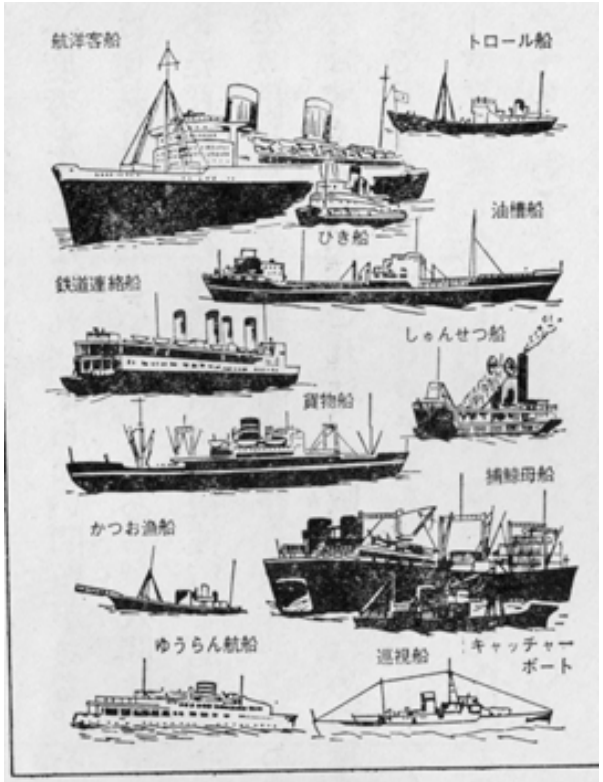
船に進歩させ、今日、ジーゼル機関をそなえた大型汽船に変ぼうさせている。そして将来は、原子力船を自由に航行させようとしている。

二〇世紀の科学は航空機を生み、今日巨大なジェット機は、時速八〇〇キロで大陸を、また海洋を飛び越えている。このすばらしい航空機の出現によって、船は、もうその役割りを終えたといえるだろうか、そうはいえまい。地球上の四分の三を占める海、陸を流れる川、そして湖、水のあるところ、船を欠くことはできない。そして、船はど重い物資を多量に運ぶことのできるものは外にはない。貿易に、漁業に、そして世界文化の交流に船はまだまだ重大な役割りをにない続けていくだろう。

しかし、航空機が今後ますます大型化していくだろうと思われるのとは反対に、船舶は、むしろ小型化していくことが、予想されている。将来建造される原子力船は、すでに完成されている原子力潜水艦のように小型のものであろう。小型の客船や貨物船が潜水したまま、非常なスピードで大洋を横断する時代がくると想像されている。

だが、ここで船について、もう一度考えてみなければならない問題がある。それは、昔から多くの場合、船は戦争に使われてきたということである。人間は戦争をするために船を造り、そして戦争のたびに、その建造技術や航空技術を進歩させてきた。たとえば、フェニキア人が生み出

したV字型縫合船は、今日の大型汽船の母体をなすものだが、これは、海賊と戦うための軍船として、考え出されたものである。また、ギリシア・ローマに発達したガレー船も、軍船として作りだされたものである。



〈船のいろいろ〉

イタリアの偉大な芸術家レオナルド＝ダ＝ビンチは、すぐれた科学者でもあった。彼は水の流れの中におこるうずまきや、船の通ったあとの水流の変化を調べ、流体力学を研究した。この研究は、船の形を決定する上に役だち、船の発達を促した。また航空機の製作に必要な、空気の流体力学の基礎にもなったすぐれた研究である。しかし、このダ＝ビンチの研究が、潜水艦や各種兵器を生みだしたことも忘れてはならない。

近代になって、世界各国は、造船競争により、海上の勢

力を争い、それをさらに激化させ、建艦競争にまで進めていった。その結果はいったいどうであったか、多数の尊い人命と、大量の物資を海底に沈めたというだけではなかったか。

わたしたちは、こういう愚かな事実もあったということを心に銘じなければならない。そして、船を世界の平和と、人間の幸福のために役立つものにするには、どうしたらよいかということを考えなければならない。

〈レオナルド＝ダ＝ビンチ〉

〈レオナルド＝ダ＝ビンチ〉
（一四五二―一五一九年）

イタリアの画家・彫刻家・建築家・科学者。イタリア、ルネサンスの巨匠。ヴェロキオの門に入り絵を学ぶ。初期の作品では「キリストの洗礼」「受胎告知」があり、中期のものに、ミラノで描いた、「最後の晩さん」などがある。晩年の作には、「聖母子と聖アンナ」「モナ・リザ」「アンギァリの戦」などがある。彼は絵画だけでなく、自然科学にも通じていた。

（１２４．ｊｐｇ　ことば一覧表あり）

三　造船所をたずねて

海のにおいのする舗道を行くと、目ざす造船所が見えてきた。鉄の柱が何本も並んだ高い建物が見える。波戸場で見るような巨大な起重機が見える。続いて幾むねかの建物がある。そばの海には、汽船が二隻横たわっている。一隻は、ほとんど装備の終わった船で、もう一隻は装備車のようである。

ガン、ガーン、ガーン。ゴーン、ゴーン、ゴーン。

造船所の構内にはいると、鉄板をたたく音がやかまし

おもなことば

大字は新出漢字　線引きは読みかえ

ページ　ことば	ページ　ことば	ページ　ことば	ページ　ことば
醸成し	国内産業	外貨	226 模型
235 往来する	利点	純金	227 貿易
大型	市場	借金	さまざま
変ぼうさせ	敵対国	相当する	異なり
航行させ	過当な	埋め合わせ	物資
236 時速	友交	民間	過剰
終えた	傷つける	あらかじめ	商行為
漁業	独占	借款	購入し
船舶	割る	成立し	安価
建造させ	値段	通貨	優秀
客船	233 不正	基金	中継
貨物船	手段	債務	加工
237 大洋	著しく	231 枯渇	統制
横断する	品目	設置	綿花
縫合船	赤鉄鉱	円滑	金額
母体	製品	措置	超過
海賊	原油	通商協定	228 均衡
軍船	首位	為替（かわせ）	物々交換
水流	数量	取り引き	決済する
流体力学	価額	輸入税	229 綿布
238 兵器	車両	不利	綿製品
激化させ	機器	しにくい	なんら
建艦	234 数字	取り決め	制限
銘じ	打開し	232 運賃	許可
239 巨匠	緊縮し	保険料	受け渡し
門に入り	貯蓄	送金	230 国際収支
	振興	観光客	自国
	機運	健全	通用す

く響いてくる。この騒音を耳にしただけでも、活気に満ちた工場のいぶきが感じられる。

船の歴史は、言い換えると人間の歴史であり、人間の知識と経験の集積でもある。船の形をどのようにするか、速力はどのくらいにするか、貨物を、どれだけ積むか、どれだけあらしに耐え得るか、そのほか、建造に必要なすべてのことが深く研究され、細かく計算される。それから何十人かの技術者によって、綿密な設計図が作られるのである。

わたしたちが、最初に見学したのは、その設計図にあわせて、板で船の形を作る現図場であった。何十人もの人が、地面に並べられた板にくぎを打ちこんだり、そのくぎを抜いて、また別の所に打ちこんだりしていた。

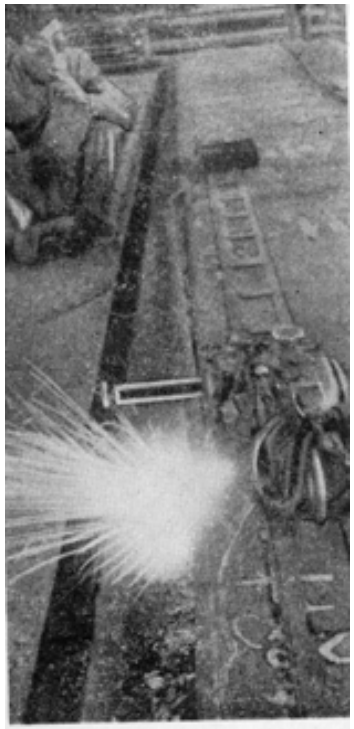
〈現　図　場〉

船のすべての部分を、実物の五〇分の一に縮めて書いた設計図が、この現図場に回ってくると、その図面をこの板に、実物と同じ大きさに拡大して書き写すのである。バッテンというしなやかな棒に、くぎを打ったり、抜いたりして、それをとめながら、図面に合わせて、くるいを直し、正しい曲線、正しい垂線を作りあげ、写していくのである。

現図場には、図面を写す人たちだけでなく、板をのこぎりでひき、継ぎ合わせている人たちもいた。しゃがんだり、立ったりしながら、みんな真剣な顔をして働いていた。船のすべての部分の形の型板が、ここで作られている。一の船を作るには、この型板が、約一万五千もいるときいて、わたしは驚いた。

次の作業場では、多くの人が、並べてある鉄板の上で働いていた。それは、現図場からきた型板を鉄板の上にあてて、白ペンキで線をひいたり、数字を書きこむ作業で、これをマーキングというのだそうである。しかし、この白ペンキは作業中に、はげ落ちやすいので、ペンキの線や印の上をたがねでたたき、鉄板に傷をつける仕事も、ここで行なわれていた。そして、この仕事のすんだ鉄板は、アセチレンガスの自動切断機で、次々に切られていくのである。アセチレンガスの青白い炎が、火花を散らしながら鉄板を無雑作に切っていた。この機械を使う人は、ガスの強い

炎から目をまもるために、みな黒めがねをかけていた。



〈鋼材の切断〉

そこを出て、次の作業場に行った。そこでは、型板に合わせて、船のろっ骨形が作られていた。無数に穴のあいてる定盤の上で、かぎ型のジャッキが、まっかに焼けた山形鋼をしめつけている。その山形鋼を重いハンマーでたたいて、ろっ骨形を造るのである。

隣りの作業場では、大きなローラーが動いて、鉄板にそりをつけていた。これは、ろっ骨の上に張る鉄板を型板に合わせて、そらしているのである。

これで一通り、船体の部分部分が作られる工程を見てきたことになる。すべての部分が型板どおりにできあがると、それらは、造船ドックに運ばれ、一隻の船に組みたてられるのである。

わたしたちは、造船ドックへ行ってみた。造船ドックは、長さ一六〇メートル、幅二五メートル、深さ五メートルの大きなみぞのようなもので、その中で船が組みたて

られていた。近づいてみると、何人もの人が、船体のあちらこちらの空間に鉄板をあてて電気溶接機で継ぎ合わせていた。

今では、ほとんど電気溶接機で鉄板を継ぎ合わせるが、以前には、たくさんのびょうで継ぎ合わせていた。またそのころはすべての部分の鉄材を、全部ここに運んで組みたてたという。しかし今は、別の所で幾つかの組みに分けて電気溶接を行ない、それからここに運んで組みたてている。わたしは、アセチレンガスの自動切断機の働きにも感心したが、電気溶接機の働きにも目を見張った。

造船所には、三〇〇〇人もの人が働いている。彼らは、船に比べると、ありのよ

（１２７．ｊｐｇ　ことばいちらんひょうあり）

うに小さい。その小さい人間が知恵を絞って、幾十倍もの鉄材を思い通りに動かし、幾千倍もある船を造っているのを見て、わたしは、人間の力の偉大さをまのあたりに見たような気がした。

造船ドックを出て、海に浮かべてある装備車の船に乗ってみた。もうエンジンは装備されていたが、細かい所が残っていて、多くの人が、さかんに働いていた。その船の甲板から造船所の方を見ると、さっき見たドックの隣りに、新しく工事がはじめられていた。案内の人にきくと、現在ドックは二つあるが、一万トン級の船を造るに

は、もっと大きなドックが必要なので、新ドックの建設に着手したのだということであった。
おりから昼休みのサイレンが鳴った。近くに泊っている船も汽笛を鳴らした。紺ぺきの海には白いかもめが、ゆうゆうと飛んでいた。

卓球台を作る

今度、移住地の中央に、新しい会館が建ちました。その広々とした明るい講堂で、はじめて男女青年の合同集会を開きました。
その時、だれかが、「卓球をやりたいなあ。」といいました。これは名案だというので、すぐに議題として取りあげられました。台は、自分たちで作るとして、早速、卓球道具をふた組購入することを話しあいました。
わたしたちの移住地では、早くから野球はさかんです。よい指導者に恵まれ、青年と少年とのチームが、ぐんぐん伸びています。ところが、卓球には、正式のチームがありません。
青年会として、道具を購入し、正式に卓球を始めようということになったのですが、青年会員中に、卓球についての知識を持つ者がなく、話は行き詰まってしまいました。

「困ったなあ、だれか卓球のことを知らないかなあ。」
「サンパウロから、コーチをよぼうか。」
「だけど、二日や三日教えてもらったってだめだろう。」
「第一、台を作るといっても、その寸法さえわからないじゃないか。」
「台も市販のものがあるだろう。買ってくるさ。」
「道具ばかりそろえても、やり方がわからなくっちゃ仕方がないよ。」
せっかく、卓球をやろうと意気ごんだものの、話はうやむやになりかけてきました。
その時、大西さんが思い出したように発言しました。
「わたしの家にいる松田さんが、知っているかも知れません。」
「どういう人ですか。」
「青年の方です。去年ブラジルに来て、ずっとサンパウロにいたのですが、おじの紹介で、先月、わたしの家に来たのです。スポーツのことは、くわしいらしいんです。帰ったらきいてみましょう。」
　それからなん日かののち、大西さんからの知らせが、会員に伝えられました。松田さんは、獣医科大学を出た人で、牧場経営が目的でブラジルに来たのだそうです。農業をひととおり実地にしるため、大西さんの家に来ているのです。明朗なスポーツマンで、高校時代には、卓球の選

手だったとのことです。

わたしたちは、大よろこびでした。先週の日曜日、会館に集まって、松田さんから、卓球の話をききました。こまかいことは、練習のとき教えてくださるわけですが、この時は、卓球の歴史と、卓球をする者の心得について、二時間はど話してくださいました。次に、それを抄録してみます。

卓球が、いつどこで始められたか、ということは、はっきりしていません。テニスから分かれた、という人もあるし、いやテニス以前から行なわれていたという人もあります。面白いのは、ハンガリーのケレンという人の説です。ケレンは、約二千年前、日本の宮中で行なわれていた追羽根が、卓球の起原だといいます。日本の追羽根がヨーロッパに渡り、ポンポンという羽根つき遊びになり、これがだんだん発達して、テーブル・テニス、つまり卓球になったといいます。卓球王国として、世界に知られている現在の日本と思いあわせて、この説はまことに愉快ですが、あまり確かな説ではありません。

とにかく近代化した卓球は、十九世紀末から、世界各国でさかんに行なわれるようになりました。イギリスには、一八八〇年に、卓球が行なわれたという記録があります。またアメリカ合衆国では、一八九〇年に室内テニスが行なわれたといいます。

卓球は、最初、「ウィフ・ワッフ」と呼ばれ、それが「ゴシマ」になり、次いで「ピンポン」とよばれました。そして、現在の「卓球（テーブル・テニス）」になりました。このように名称がかわるに従って、用具もかわってきました。むかしは、キルクやゴムの球を小牛の皮を張ったバンジョー・ラケットで打っていました。このころは、遊戯の範囲を出ないものでしたが、それが本格的なスポーツになったのは、セルロイドの球が発明され、ラケットも現在のような形のものが使われるようになってからでした。

世界の卓球競技は、一九〇〇年ごろからぐんぐん発展し、一九二三年に、まず、イギリスに卓球協会が生まれ、一九二六年に国際卓球連盟が組織されました。そして、一九二七年に、はじめて、世界卓球選手権大会が開かれました。その後、卓球はますますさかんになって、今日に至っています。

卓球は、競技として興味深いものですが、しかし、上達はなかなか困難です。りっぱなプレイヤーになるには、次のような心掛けが大切です。

第一にすぐれたコーチについて、ラケットの持ち方、ラケットの振り方、身体の動かし方などをならわなければなりません。第二に、すぐれた選手のプレイをよく観察して、その長所を取り入れることが大切です。第三には、ぜひ専用のラケットを持つことです。ラケットを買う時に

は、よく調べて、自分に適したものを選ぶ必要があります。そしてラケットの持ち方についても、どんな持ち方が自分に適しているかを研究しなければなりません。練習の時は、必ず規定通りの卓球台を使うようにします。

このような技術上の心得のはかに、スポーツマンとしての道徳を守るよう心掛けなければなりません。試合の時は静粛を旨とし、相手に対して尊敬の念を持ち、審判の判定には素直に従うように心掛けます。もし誤審が明白な場合、たとえ、自分に有利な判定であっても、その誤りを申し出て、ポイントを相手にゆずるべきです。常に正々堂々と、全力をつくして戦い、敗北した場合も、決して悔いを残さず、相手に拍手をおくるはどの広い心を持つことがたいせつです。

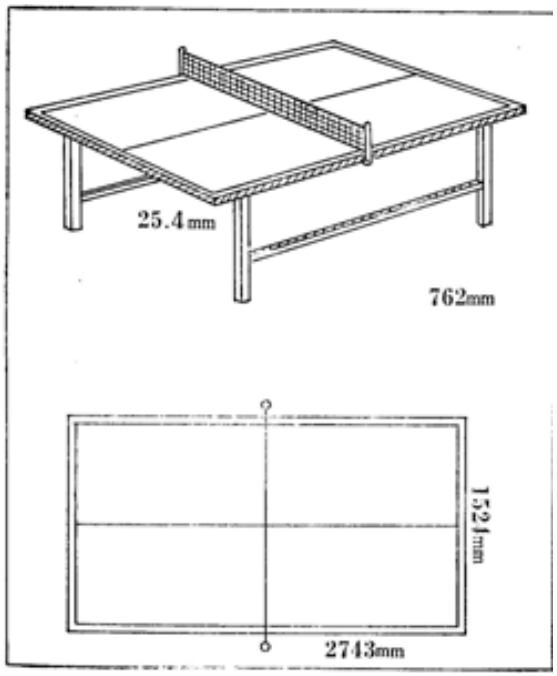
歴史と心得についての話がすんでから、松田さんは卓球台のことをたずねました。

「僕らの手で作りたいと思います。」

「それはいいですね。ぼくが設計図をかいてあげましょう。」

青年会では、さっそく大工仕事のじょうずな岡本さんを主任に、他に器用な青年四、五人を選んで、製作委員会を作りました。そして、松田さんの設計と指導によって、

卓球台二台を作ることにしました。



〈設　計　図〉

松田さんの書いた設計図を見ると、卓球台は、次のようなものです。

1．長さ　九フィート（二七四三ミリ）

2．幅　五フィート（一五二四ミリ）板を八枚ないし十一枚つぎあわせる。

3．高さ　二呎六インチ（七六二ミリ）床上から表面まで。

4．厚さ一インチ（二五・四ミリ）

5．テーブルは、木質硬材で、硬式規定球を、一フィート（三〇五ミリ）の高さから、どこへ落としても八インチ（二〇三ミリ）ないし、九インチ（二二九ミリ）、軟式規定球なら六インチ（一五二ミリ）ないし六インチ四分の三

（一七一ミリ）のバウンドをする硬度のものとする。

６．コートは平坦（たん）で無反射暗色とし、コートの周辺にサイド・ラインと平行に幅四分の三インチ（一九ミリ）、中央に八分の一インチ（三・二ミリ）の白線を引く。この白線は染料でなければならない。

松田さんの話によると、日本の桂（かつら）という木が、卓球台として最も適しているとのことです。ヨーロッパには、質のよいベニヤ板ができるので、大体ベニヤ板を使っているそうです。今後は、どこの国でもベニヤ板になるだろうといいます。しかし、わたしたちの移住地にはベニヤ板がないので、ペローバ板で作ることにしました。ペローバのまさ目の板八枚をにかわでつぎあわせて作るのです。

岡本さんたち、製作委員は、卓球台の製作に取りかかっています。やがて、りっぱな台ができあがり、会館の講堂にすえつけられるころには、注文した道具もつくはずです。

わたしたちは、松田さんに教えていただき、卓球の練習をはじめます。はやく上達して、隣りの移住地と試合したいものだと思っています。

（新ポル語　Ｐｅｒｏｂａ）

（１３２．ｊｐｇ　ことば一覧表、）

文学

〈笛を吹く少年　マネ〉

一　くるみ割り

永井龍男

アンパイヤーのポケットから捕手に渡った新しいまっ白な球は、やがて弧を描いて長身の投手の手にはいった。

前の打者は、四つもファウルやチップを重ねた後で、簡単なファースト・フライに退いた。

打者は、その新しい球の第一球を打った。よい当たりであった。地をはう白球は、しかし、深く守った遊撃手の真正面を突き、球は正確に一塁へ送られた。ワッと歓声があがった。そしてサイレン。

わたしと友人は、期せずしていっしょに立ちあがり夕日のなごりをかすかに受けた神宮絵画館の塔を空に見ながら、ウーンと伸びをした。

友人が、胸のかくしからとけいを出した。わたしもそれをのぞいた。わたしたちは、その夜、球場にほど近い千駄（せんだ）ヶ谷（や）の奥の、絵をかく友人の家に招かれていた。

千駄ヶ谷の友だちの家へは、年に二度ぐらいしかたずねなかったが、わたしも連れの友だちも、彼とは中学以来の仲間である。

薄暮の迫ってきたスタンドに、応援団の校歌は続いた。人々は、いくつかある出口に向かって列を作り、徐々に姿を消していく。

「もう、少しひんやりするね。」

「うん。」

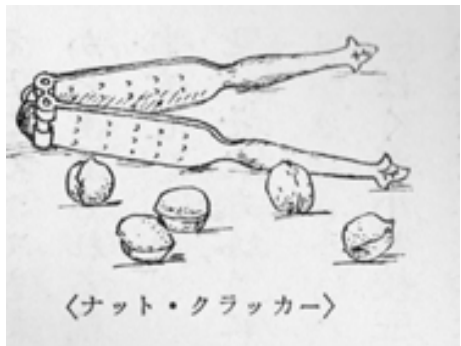
わたしたちは、ゆっくり階（きざはし）を下った。秋の日にさらしたほおが、心持ちこわばった感じで快かった。それらの列の中で、マッチの火が、ぽっと赤くあちこちに見えてきた。

絵かきの家の近所に、大きなけやきの木がある。ほのかに夕やけのほてりを残した空に、星がもうきらめいている。わたしは、久しぶりにそのけやきを見あげた。

絵かきは、マドロスパイプをくわえて、コーヒーひきでコーヒーをひきながら、わたしたちを待っていた。ラジオが終わったから、もう来る時分だと思っていたと、

彼一流の人なつっこい顔をした。
奥さんの手料理を、絵かきが自慢するのも無理はなかった。日増しに乏しく、質の下がる材料を楽しく食べる法は、心の届いた料理で補うよりほかはない。わたしたちが、奥さんの腕まえをほめると、これもそれも「おれが教えたんだ、ほんとだぞ。」と、短いひげをはやした絵かきは、こどもっぽい目になって言った。
「このあいだかいたばかりの、見てもらうかな。」
食後にひとくつろぎしたところで、絵かきがいった。アトリエへ行って絵を見せてもらい、それからわたしたちは、アトリエに続く小ぢんまりした洋間に通された。深いシェードの、背の高い電気スタンドに灯（ひ）をつけて、みんな腕つきのいすに身を任せたり。
絵の話から、次第に切迫する時局に触れた話なぞしているところへ、奥さんが紅茶を運んできた。そして、木彫りの盆に何か丸い物を盛ったのを、テーブルのまん中へ置いた。灯の下に置かれると、それはくるみであった。絵かきは、奥さんに、
「そのたなのブランデーも出して。」
と言った。奥さんは、普通の洋酒のびんよりも、ひどく細長く伸びたびんを、暗いたなから取り出して、灯に透かしてみた。
「まだ相当ありますわね。」

絵かきは、くるみを摘まむと、古風な飾りのついたちょっとペンチか、くぎ抜きに似たくるみ割り（ナット・クラッカー）にはさんで、左の手のひらの中で、カチリと楽に割り、「どう？」と言いながら、ナット・クラッカーをわたしの方へ向けて置いた。


〈ナット・クラッカー〉

「くるみとは珍しいな。」そう言って、わたしも、一つ摘まみ、無器用にナット・クラッカーへはさんだ。

「虚子の句に『秋もはや熱き紅茶とビスケット』というのがあるが、食後のくるみとは、相変わらずしゃれたもんだ。」友だちも、そんなことを言って、順々にナット・クラッカーを手にした。

すると絵かきは、

「しゃれているということもないが、—実は、きょう、おやじの命日でね。」と、前後につながりのないことを言った。いいにおいのブランデーを、三つのカップにつぎ終えた奥さんが、腑（ふ）に落ちぬ顔でいるわたしたちに、

「くるみの話、主人から、まだお聞きになったことない？」
とほほえみかけた。

「姉を産んでから五年目に、思いがけずぼくというこどもを得た母は、そのお産ですっかりからだを弱くしてしまった。しかし、女の子ひとりと、あきらめきっているところへできた男の子だから、両親の喜びはたいしたものであった。ぼくはだれからも愛される権利をもって生まれ、ぼくの欲することは、たいてい無条件で通された。」
と、そんなふうに、絵かきは、話をはじめた。

ぼくが小学校三年生の春、ちょっとしたかぜで床についた母は、それから三年間ねたままになった。母は三十六か七であった。

初めの一年ぐらいは、ねたり起きたりで、逗子（ずし）へ三日ばかり療養に行き、土曜日からかけて、父や姉となん度もそこへ見舞いに出かけた記憶もあるし、暑中休暇には、ずっと泊り込んで暮らした。休暇が終わって、姉とぼくが東京へ引き上げると、母はたいそう寂しがって、まもなく家へ帰って来てしまった。付き添いの看護婦と、逗子に住んでいる、母の縁続きの桂（かつら）さんという女の人に助けられて、自動車を降りた母は見違えるほどやつれていた。

それでも、次の年の節分の晩には、母についた病魔を払うのだといって、姉とふたりで病室に豆をまいたことがあり、その時のうれしそうな母の笑（え）顔を、上から見おろした記憶は、今でもはっきり思い出せる。

父は、きみたちも御承知のとおり、××汽船の調査室に勤めていて、書斎と調査旅行にばかり時間を費やしている人であったが、母の病気が相当進んでいると知ってからの二年間は、がらりと生活を変え、家庭第一、それも妻の看護に専心した。

病気の性質を考慮して、ぼくたち姉弟（きょうだい）にも、病人との接触を制限するかわり、父は看護に没頭した。雇い人にも注意して若い者は遠ざけ、ぼくが生まれるこらに長くいた婆やを呼びもどして、自分の留守中は、この人に病人のいっさいをまかせたりした。

母の縁者の中には、そういう慎重な父の態度を、（島）情愛がないと、かげぐちをきく者もあった。わがままいっぱいに育ったこども心に、そのわがままを封じられた不満もあって、そんなかげぐちが、父をうとんじさせることもあったが、しかし、情愛を心の奥に秘めて、慎重に看護にあたり、自分のからだは病人のために犠牲にした父の献身は、ぼくが成人するにつれて、胸に響いた。

母はしかし、三年間わずらいつづけて世を去った。

ちょうど、その前の年。ぼくが六年生の晩秋のことであった。
中学へはいるための予習が、もう毎日続いていた。暗くなって家へ帰ると、かじ棒をおろした車が二台表にあり、玄関の上がり口に車夫がきせるでたばこをのんでいた。
この二、三日、母の容態のおもしろくないことは知っていたので、くつを脱ぎながら、ぼくは気になった。顔を洗って、電気のついた茶の間へ行くと、食事のしたくをしてある食卓のわきに、編み物をしながら、姉はぼくを待っていた。ぼくはおそいおやつを、すぐにほおばりながら聞いた。
「ただ今。—お医者さん、きょうはふたり？」
「ええ、ゆうべからお悪いのよ。」
いつもおなかをへらして帰ってくるので、姉はすぐ食事のしたくをした。父と三人で食卓をかこむことは、その頃ほとんどなかった。むしゃむしゃ食べだしたぼくに、姉もはしをとりながら、
「節ちゃん、おとうさまがね。」と言う。「あさっての遠足ね、このぶんだとやめてもらうかもしれないって、おっしゃっていてよ。」
遠足というのは、六年生だけの一晩泊まりで、学校から日光へ行くことになっていた。
「ちぇっ。」ぼくは乱暴にそういうと、茶わんを姉に突き出

した。
「節ちゃんには、ほんとうにすまないけど、もしものことがあったら。—おかあさんとてもお悪いのよ。」
「知らない。」
姉は、涙ぐんでいる様子であった。それもつらくて、それっきり黙りつづけて夕飯をかきこんだ。
「おふろ、すぐはいる？　それとも勉強がすんでから？」
姉には答えず、ぷっとして座を立った。母が悪いということと、母が死ぬかも知れぬということは、ぼくの心で一つにはならなかった。
生まれて初めて、級友と一泊旅行に出るということが、少年にとって、どんなに魅力をもっていることか！　級友のだれかれとの約束や計画が、あざやかに浮かんでくる。胸が迫って、両の目に涙がいっぱいあふれてきた。
父の書斎のとびらが半ば開いたまま、廊下へ灯が漏れている。そこを通って、突き当たりの階段をあがると、ぼくの勉強べやがある町だが、ちょうどその階段を、物干しへ行らた女中がおりてくる様子なので、泣き顔を見られるのがいやさに、人気のない父の書斎へ、ぼくははいってしまった。
いつも父のすわる大ぶりないす。そして、ひょっと見ると、テーブルの上には、くるみを盛ったはちが置いてある。くるみの味なぞは、こどもに縁のないものだ。いらい

らした気持ちであった。
どすんと、そのいすへ身を投げ込むと、ぼくはくるみを一つ取った。そして、冷たいナット・クラッカーへはさんで、片手でハンドルをおした。小さな手のひらへかろうじて納まったハンドルは、くるみの堅いからの上をぐりぐりとこするだけで手ごたえはない。「どうしても割ってやる。」そんな気持ちで、ぼくはさらに右手の上を、左手で包み、ひざの上で全身の力をこめた。しかし、級の中でも小がらで、きゃしゃな自分の力では、びくともしない。
―このあいだ聞いたが、アメリカでは、ナットというと、ばかなやつという意味になるそうだね。なるほど、脳髄の型にも似ているし、あの堅さには、そんな感じがあるね。―
左手の下で握りしめた右の手のひらの皮が、少しむけてひりひりする。ぼくはかんしゃくを起こして、ナット・クラッカーをテーブルの上へほうり出した。クラッカーはくるみのはちに激しく当たって、はちは割れた。くるみが三つ四つ、テーブルから床へ落ちた。
そうするつもりは、さらになかったのだ。はっとして、いすを立った。ぼくは二階へ駆け上がり、勉強机にもたれてひとりで泣いた。その晩は、母の病室へも見舞いに行かずにしまった。
しかし、さいわいなことに、母の病気は翌日から小康を

得て、ぼくは日光へ遠足に行くことができた。
ふすまをはらった宿屋の大広間に、ずらりとふとんを敷きつらねたその夜は、実ににぎやかだった。果てしなくはしゃぎまわるこどもたちの上の電灯ほ、八時ごろに消されたが、それでもなかなか騒ぎは静まらなかった。
いつまでもぼくは寝つかれず、さすがに東京の家のことが思われてならなからた。安らかな友だちの寝息が耳につき、おおいをした母のへやの電灯が、まざまざと目に浮かんできたりした。ぼくは、ひそかに自分の性質を反省した。この反省は、ぼくの生涯（がい）の最初のものであった。
とろりとしたと思うと、もう起き出す子があって、翌朝は早かった。
母には焼き絵の小箱を、姉には焼き絵の糸巻をみやげに買ったが、その小箱と糸巻は、それから忘れるほど長い間、ぼくの家のどこかしらに残っていた。姉がそれへ、たっぷりと巻いた紅やうこんの糸の色を、ぼくはいつまでも忘れないだろう。
静まり返った家の中で、ぼくの試験勉強は再び続いた。
夜ふけて、廊下を通ると、父のへやからくるみを割る音がよく聞かれたものだ。
看護の暇々に、父は書斎で読書しながら、くるみを摘まむのが癖になったようである。

いま、こうして、ぼくが紅茶を自分でいれ、ブランデーでからだを暖めるのも、実はそのころの父のまねをしてみているのだ。看護に疲れたときのいこいの方法として、父はだれかに勧められたものかもしれない。

夜ふけの廊下で、その音を聞くと、ぼくはその当座、びくりとしたものだ。はちを割ったことについて、その後、父が、一言も言わないだけに、いっそうぼくはぐあいが悪かった。

―そして、再びぼくはくるみを割ってみようとはしなかった。ぼくには永久に割ることのできない堅さと思われたから。

年があらたまって、ぼくは二つの中学の入学試験を受けた。（第一志望の学校を落ちた場合のために、そうするのが、そのころの習慣であった。）母は、試験が終わってまもなく、不帰の客となった。

ぼくは第三志望の試験にパスして、きみたちと友だちになった。新しい世界へとび込んだ喜びは強く、ぼくはすぐ不幸を忘れた。いつまでも消毒剤のにおいの消えない、きちんとかたづいてしまった、ない母の病室へはいったときのほかは―。

父と姉とぼくとの生活が始まった。父は、病む母へ向けた慈愛を、そして、母への追慕の情を、ぼくらふたりの上

に惜しみなく注いだ。年ごろの姉が、婆やを指揮して、一応家の中に新しい光がさすようになると、父の勤めは旧に復して、旅行にも出るようになった。姉の思いやりもあって、ない母への追憶を、父は仕事と旅にまざらせた。

母の死後、半年ほどすると、姉に縁談が起こった。

姉も好意を持っていた人で、話はすぐ決まり、挙式は一周忌が済んでから、ということになった。

自分の姉でしかなかった姉を、ぼくはあらたまった気持ちで、見直すのであった。兄となるべき人も、家に遊びにくるようになって、三度に一度は、ぼくを加えた三人で、郊外へ散歩に行ったり、映画を見に出かけることもあった。その人とふたりでいるときは、ぼくは、その人に好意を持ったが、姉が加わると、心の底にきっと沸いてく

る、悲しさに似た感情を、ぼくはどうにもできずにいた。
嫁入り道具がひとへやに日増しにそろっていった。
姉が一時におとなびて映り、まぶしく見えることもあった。まぶしさが、別離の日の悲しみや、父とともどもこの家に取り残されるような思いに変わって、胸をふさがれる日もあった。

ある日曜日の午後であったと思う。ぼくは姉と親戚へ行った。その帰り道に、姉が何げないふうに言った。
「節ちゃん、あたしがいなくなっても、寂しくない？」
「――」
ぼくは黙っていた。
「おとうさまだって、お困りになるわね。」
しばらく間を置いて、姉は思い切ったように、ことばを続けた。
「あたし、節ちゃんに相談があるの。―逗子の、桂おばさまね、ね、知ってるでしょう？」
「知ってるよ。」
突然のことで、姉が何を言おうとするのか、ぼくにはわからなかった。桂おばさまというのは、死んだ母の遠縁に当たる、母より三つ四つ若い、美しい人であった。前にも言ったが、母が逗子で療養しているころ、つききりに看護

をしてくれた人だ。結婚して二年ほどで、夫に死に別れた、ということは、そのころから聞いていた。
「桂さんに、――あたしの代わりに、家へ来ていただいたらと思ったの。おとうさまに話したら、節雄がよければって、おっしゃるのよ。」
どきんとした。みんな、自分をかわいがってくれる人は行ってしまって、お体裁に、代わりの人を置いていこうとしている。―そんな気もした。
「ぼく、いやだ。」
そういえば、桂さんはこのごろ、二、三度家へ遊びに来ている。自分には何も言わず、みんなでそんなことを進行させていたにちがいない。―そんなふうにも想像した。
「このこと、あまり突然だから、あなたにはのみ込めないかも知れないけど、あたしがお嫁に行ってしまったら、おとうさまだってずいぶんお困りになるし。」
「おとうさまは、かってに旅行してれはいいさ。」
ぼくはすげなく言い切った。姉は寂しそうに、そのまま黙った。
一周忌が近づくにつれ、姉のしたくや親戚の出入りで、父も忙しそうであった。だれかしら人が来ていて家の中はにぎやかだった。
「おかあさんも、きっと喜んでいらっしゃいますわ。」

人々は、申し合わせたようにそう言った。晴れやかな姉の笑い声を聞くとき、たったひとりの姉を奪われる感じを、もっとも激しくぼくは味わった。
「姉弟なんて、つまらないもんだね。」
友だちに、ぼくはませたことを言ってみたりした。
「そうさ、兄弟は他人の始まり、って言うもの。」
そんなことを教えてくれる友だちがあった。
ひょいっと、桂さんのことを思い出すこともあった。
桂さんは、もの静かな、にこやかな人で、桂さんについて、ぼくはなんの悪意ももっているのではなかった。
一周忌の前夜、坊さんが来て経をあげた。親戚の人が帰ってしまうと、父の書斎に親子三人が、久しぶりにテーブルを囲んでいた。
父が姉に言った。
「どうだ、あの着物、気に入ったか。」
「とても。—すばらしいわ。」
「ふーーん。」
父はにこにこした。先日旅行に出たとき、京都で注文したのが、けさ届いてきたのだ。
「節雄、そこの戸だなからブランデーを取ってくれ。—信(のぶ)子はくるみを。」
ぼくは、これと同じの細長いびんを、そして姉はくるみを、テーブルの上に置いた。

「一年なんて、たってしまえば早いもんだ。―おとうさんも、もう旅行をしないで済むように、会社へ頼んできた。これで、おねえさんが嫁に行くと、また当分ちょっと寂しいな。」

父がやさしくぼくに言った。父の顔が、ふけて見えた。

姉はブランデーをついだ。

「しかし、すぐまたなれるさ。」

父はグラスを口に含んだ。

どうしたはずみか、桂さんのおもかげが、そのときぼくの目に浮かんできた。ぼくはちょっとあわてた。そして、困ってくるみを一つ摘まむと、クラッカーにはさんで片手で握りしめた。すると、カチンと、快い音がして、くるみは二つにきれいに割れた。

思いがけない、胸のすくような感触であった。

その時、ぼくは言った。

「おとうさん。ぼく、桂さんに家へ来てもらいたいんだけど……。」

「――というわけさ。

もちろん、桂さんは、第二の母として、ない母以上にぼくを愛してくれた。もう父も桂さんも、この世にはいないが、父の命日には、こうしてくるみを割ることにしている

（１４２．ｊｐｇ　挿絵、ことば一覧表あり）

のだ。」

――なるほど、絵かきは、そう話しながら、とても巧みにくるみを割り、その音をしみじみなつかしむ。わたしの割る音とは、どうしても違うのだ。

永井龍男（一九〇四―　　）小説家

東京に生まれた。一九三四年「絵本」を出版し文壇の注目を浴びた。後、文芸春秋社に入社し、同社の発展に寄与した。戦後、創作に専念し文名を高めた。一九五〇年ペンクラブ会員、次いで文芸家協会会員となる。主著に「朝霧」「青電車」「風ふたたび」などがある。

（１４３．ｊｐｇ　ことば一覧表あり）

二　地蔵の話

長与喜郎

なんでも、わたしが、いちばん先に感覚が出だしたのは胸のあたりだと思う。首から乳へかけての辺が急にすうっと涼しくなったのをかすかに覚えている。次には右の腕に感覚を生じた。ひいやりした外気に触れて、わたしは思わずその腕をふるわした。初めには、その垂れている腕が少し重い気がしたが、やがて、そんな気もしなくなった。なんでも、その腕の形が少し変わったらしい。最初、だらんと垂れさがっただけであったのが、やや前の方に曲がって、中指でひだのところをちょっとからげた形になった。それからその腕が軽くなった。

その次には左の腕に、それから手に感じを覚えた。前の方へ折れて、手のひらの上に何か玉を支えているのだが、これは初めから重い気はしなかった。それから背中、両足、腹部とだんだん感覚を生じてきて、頭部にきた。頭部の中ではほほがいちばん先に感覚が出始め、その次にひたいが涼しくなった。すると、にわかにわたしのすべての感覚がはっきり統一してきて、気持ちが急に明るくなった。わたしの目はまだ開かなかったが、わたしは、もうあふれるばかりの光を内部に感じていた。そしてわたしは

涼しい、朗らかな喜びを感じた。

次には耳ができた。そして、わたしにはいろいろの世音が聞こえるようになった。もし両方の耳が一時にあいたら、わたしはとてもたえられなかったろう。しかし、そのごうぜんたる雑音の響きにわたしがなれてくると、四辺は不思議なほどの静寂に移って、ただわたしを造っている者の小さなのみの音だけが聞こえた。

最後にわたしの両眼が開いた、わたしの目があいていちばん最初に見たものは、わたしの目をじっと見つめている二つの光った目であった。わたしはその日の力に驚いた。恐れをなした。

すると、その恐ろしい目の持ち主は一歩あとにすさって、大願成就した者のような押さえがたい興奮の体（てい）で、低く、重く、叫んだ。

「ありがたい！生きた。」
そして、小づちを持った右手と、細いのみを持った手とを固く合掌して、わたしの前に垂れ、充実しきった感謝の声で、「南無阿弥陀仏（なむあみだぶつ）」と唱えた。

わたしは、すぐその男に愛を感じた。善いやつだわいと思った。年ごろはもう四十近く見えたが、どこかこどもらしい、単純な心を持った男だということは、その目とひたいとを見ればわかった。わたしは彼の全身を自分の心のようにぴったりと感じたとき、胸が熱くなるのを覚えた。

彼がわたしの後ろに回ったとき、わたしは、前方からわたしの上にまともに当たってくる日光を始めてじかに感じた。その感じは恐ろしく白いものだった。わたしは、そのまぶしさにちょっと目を苦しめられたが、しかし、全身になんともいえない快さを感じ、からだと心とがぬくまるのを感じた。わたしは、またその光の流れてくる窓のかなたに、おそろしく美しいものを見た。それは青空と、雲と、青い木の葉と、桃色の花とであった。

次には、またいろいろの音声を耳にした。それも大体わたしにはいやなものではなかった。ことに、町に遊ぶこどもらの声などは、ちょっと極楽に住む鳥の声かと思われたほどきれいなものに聞こえた。少しなれた心持ちで四辺を見回して見ると、わたしのいる室のちりっぽくて、む

さ苦しい様がわかった。しかも、わたしの周囲にはずいぶんいろいろ異様なものがいる。腕の六本あるもの、首だけのもの、象という獣の背に座しているもの、恐ろしい怪物の様な相好のもの、天人の様に柔和な美しい様子のもの、それらは、皆わたしより先にこの地上に生まれたわたしの同胞で、どれもこれもわたしの上に目を見すえているのだ。しかし、わたしはすぐ彼らと自分の心が相通じていて、わたしたちが別々な心をもってこの世に生まれたものではなく、わたしは、彼らと楽に話ができることを直覚したから少しもそれに圧迫などは感じなかった。

で、わたしの周囲は清潔ではなかったが、それに少し寒くもあったが、わたしは生まれてきたことを決していやには思わなかった。むしろ、わたしは満足だった。わたしを作った者も生まれたことをいやとは思っていない。どちらかといへば少しのんきなくらいあきらめのいい男らしい。

まもなく、いろいろな人がわたしを見に来た。「拝ませていただきます。」といってはいって来た。そして、彼らはわたしの前にすわり、香をたき、じゅずをもんで、何か口の中でむにゃむにゃ言ってからわたしを見上げて、「はあ結構なお仏様だ。」と言ったり、「聞くにもましたお見事なお作でござる。」とか、「ありがたい。」とか言った。ある者はまた白紙に金を包んでわたしの前にささげた。わ

たしはくすぐったいようなおかしい気がした。彼らの言ういろいろな賞賛のことばや、する事は一向わたしの心に届きはしないけれども、かわいい気はした。こうして、その日も次の日も、多数の男女が入り代り立ち代りわたしを見物に来て、同じょうな事を言ったり、したりした。「良弁僧正や、天じくの問答師のお作にも劣らない、結構なお作じゃ。ほんに生きてござる様だで、余り見ていると恐ろしうなる。」

こんな事を言った者もあった。

「仏のおかげです。全く仏の法力による事です。」

わたしの作者は満足らしくこう言って、にこにこしていた。

ちょっとここで、わたしが後から自然と立ち聞きした人の語り草を総合して言っておきたい。わたしの作者は僧侶（そうりょ）であったか、俗人であったかはわたしはよく知らない。とにかく、妻もあり、子もあった。だから、普通には出家と見なされていなかったことは確かで、いわゆる仏師と呼ばれている者であったらしい。出家でない者が神聖な仏体を刻むことはばち当たりだとやらで、彼はずいぶん迫害もされたのだ。一度は、ろう屋に投げ込まれようとさえしたが、彼を愛する一味の者に助けられた。しかし、彼の手から、のみは奪い取られた。すると、彼は土や乾漆で前のより一段と見事な仏像を造った。そ

れが、かの六本腕のある観音像であるとか。が、その仕事もまた、とがめを受けたので、今度は筆で仏の絵をかいた。それで、その筆もまた取り上げられたという。そんな事で生活は苦しくなったので、愛妻は彼をそんなに苦しめるのは、皆自分がいるためだと言って、彼と別れて尼になる決心をしたが、信心は心だ、形ではない、彼は、こう言ってその必要を認めなかった。彼は自分の仕事が正しく、仏の道にかなっている事を篤く信じていた。彫刻の秘密は、相方のうちに隠れている仏を己が仏によって呼びさますことだ。仏を呼びさまされた者は生きている。生きている者は皆美しい。美は仏の相だ。一つでも本当に仏の相が刻まれたら仏の下僕たる自分の使命は足る。と彼は言っていた。ともあれ、かくもあれ、彼はどんな運命の中でも絶望したり身を持ち崩したりするには余りに帰依の心が純にして深かった。彼のこの世に対する態度は、この世の彼に対する態度の如何によって動かされるようなものではなかった。いかに暗い境遇の中にいる時も、彼は不幸な人間のようにはまるで見えなかった。それほど、彼はいつも和気あいあいたるおもしろい明るい心を持っていたので、彼と接する事は誰にも気持ちがよかったにちがいない。結局、仏体を刻みさえしなければ差しつかえないというので、彼に再びのみは与えられた。彼は、それでいろいろのものを彫刻する事を覚えた。しかし、彼が何気

なくただの人物を彫ると、たちまち、彼がまた仏像を彫っているというううわさがたった。それも道理。実際、それは期せずしてあらたかな仏像の如く見えたから、普通の女人も彼の手にかかれば吉祥天女の如く輝いた。これぱかりは、いかんともしようがないので、とどのつまり、東大寺のなんとかいう和尚（おしょう）の許可で、彼だけは、特に在家の身で仏像を造ってもよいということになった。それ以来、彼はかえって有名にもなり、生活もわりに楽になった。

彼の生活については大分いろいろの非難もあったようだ。彼はごく無邪気な、無頓着な男だった。人の所で酒を出されれば、それを拒まなかった。本来、酒は好物だったらしい。ある時、彼が千鳥足で友だちの所からふらふら帰って来るところを運悪く人に見つかって、それがまた一物議をかもしたことかある。なんでもそれは、彼にしっとをしているたちのよくない同業者がはかって彼を酔わせた形跡がある。その時は、さすがに彼も少ししょげこんでいたとか。

が、それは、とにかく、彼がその工室でのみを片手に持ち、右手につちをとって一心に合掌黙禱（もくとう）して後、じっと作に向かう時の様子はまるでふだんとは別人の観がある。全身霊魂の塊かと思われ、何か恐ろしいものにつかれた者の如く見える。その全身全心にみなぎる熱

と、夢中さとは雲をも呼び起こす力があるかと見える。しかし、彼は決して勢よく興奮した体でそれにかかりはしない。人間にこれほどの荘重な静寂が現われ得るものかと思われるほどの重い、端厳な姿で、彼は限りなきていねいさと、細密極まる丹念さをもってこつこつかすかなのみの音を立てている。どこをそんなにいつまでも執拗に突っついているのか、ちょっと見たのではわからない。二日も三日も一つの小さい部分にかかっていながら、その労力は、すべて作の内部に吸収されてしまったように表には変り目がまるで目立たないことがある。そんな隠然たる労力が時には随分永い間つづくので、日の暮れにのみを手離す時はさすがの五体も綿のように疲れて見える。「梵（ぼん）鐘には黄金を沢山（たくさん）まぜないといい音色は出ない。だがその黄金は銅の中に隠れているのだ。よき彫刻を作るにもその隠れた黄金が大事だ。」彼はこう言った事がある。

だが、わたしは彼のわきにいたのは永いことではなかった。なんとかいう寺の住職が、わたしを引き取ることになった。いよいよ彼の家からわたしが運び出される時、彼はわたしにこう言った。

「おまえは苦労するだろう。わしも少しは苦労した。わしには淋しい時があったようにおまえにも淋しい時が多く

あるだろう。だがおまえを造った事でわしはとこしえに生きるだろう。わしの名はわしのからだのようにじき消える。わしの名は決して後世に伝わりはしまい。だがそれでもよい。わしの内に生き給うた仏のうつし身であるおまえは死なない。おまえは木の破片だ。焼かれれば煙となってしまうのだ。だがそれでもおまえが作られ、そして生きたということは死なない。永遠に生きよ。人の心を打て。深く深く打て。そしてそこに仏を呼びさませ。さらば健在であれよ。しあわせであれよ。わが血と肉よ。」

そして彼は淋しそうに、つらそうにわたしをなでた。

彼の名まえは義道（ぎどう）といった。その名まえを知っているものは、今ではわたしだけだ。

わたしの買われた寺は、小さな貧しい寺だった。なんでも大そう安い価だったというが、大きな名ある寺では彼の作物は買わないことになっていたと見える。わたしがその寺のものになってからも彼はしばしばわたしを見に来た。わたしの置かれた場所は、本尊の薬師三尊からずっとへだたった本堂の隅の薄暗い所で、参拝者はわたしに目も止めずに帰ることが多かった。

「ぷーっ。なんという俗なつらだ。」

義道は本尊を初めて見たとき思わずこうつぶやいた。

「これが薬師如来かいな。なるほどこんな珍しい顔は、ちょっと人間界にはありがたいわい。」

そして、円い頭をふりながらわたしのそばに来て自ら慰めるように、
「だが、まあいいわ。おまえはいくらよくても地蔵さんで格が低いのだからな。」と言った。
しかし、その後の姿はぱったり見られなくなった。そして間もなくわたしの寺に、ある貧しい葬いが来た。それが義道の葬式だった。思うに、それはわたしを離れ難く愛していた彼の遺言だったのであろう。わたしは、そのときなんとも言えない無常のさびしさに打たれた。それと同時に、わたしが造られた意味もそれまでよりなおよくわかった気がした。おもしろい、善い男だっちが、仕方のないことだ。わたしは彼の霊のために祈った。

ところが、それから半月もたたないうちに、わたしは、誰かしらの目に止まったのが縁で他の寺に移されることになった。義道からまるでただのようにわたしを買いとったかの和尚はその事でにわかに豊かな身上になったとか。
それは、前のより数倍大きくもあり、美しくもある寺だった。そしてわたしは前よりもずっとだいじにされた。毎朝、わたしの前に新しい水が手向けられ、香のよい伽羅(きゃら)がたかれ、左右には寺に咲く種々の花が生けられ、わたしの周囲は掃き清められた。

そこには何よりもまず優美があり、しんみりとした物静けさがあり、かなりの真心と、細心とがあり、自然な礼があった。それらの華のうちに包まれてわたしは安泰と、愉楽とを感じた。前の寺も真夏にも変に寒かったが、この寺の中は厳冬にも温かい。この温かみはわたしの何にもまして愛するものだ。それは尼寺であった。

わたしにつかえるものはみな比丘尼（びくに）である。わたしが、その尼寺に移って七日目にはわたしのために大きな法会が営まれ、数百の人が参詣した。その頭主となって来た人は、わたしがそれまで人間のうちに見た最もみめかたちのうるわしい人で、身には鮮やかな緋（ひ）の衣をまとい、頭には輝く宝冠をいただいていた。で、わたしはそれが皇后という方であることを覚った。

紫・萌黄（もえぎ）・鳶（とび）色・褪紅（たいこう）色・黄など、さまざまの色の衣をつけ、かわいい頭をば青くそりたてた品のよい比丘尼たちが、口々に念仏を唱えながら堂の中を織るようにくねり回る様はいとも愛らしく、美しいものだった。わたしは、極楽に住む稚児たちの遊戯を見るような心地で、楽しくそれを眺めた。

わたしは、何にもまして人の真心を好むけれど、またかゝる形式のおもしろさを愛（め）ずるものだ。それは、心の美と相伴って浄土の美わしさを人に示唆するものだ。

ある風の吹く春の深夜、庫裡から火を発して比丘尼どもの黄色い声をたててあわて惑う中に見る見る本堂は火焔につつまれ、須弥壇（しゅみだん）は怒れる不動明王のように燃えた。華麗を極めた堂のうち何一つ余すものはなく灰になった。ただ不思議にも独りわたしだけは、ひだのすそをこがし、全身の色を変えただけで取り出された。わたしを取り出した者はやはり一人の尼であったのだが、そんなことはかよわい女一人の腕ぐらいでは到底叶わないことというので、わたし自身の不思議な法力によるとされた。

それから永い永い年月がたった。諸所方々の寺々をわたしは転々して回った。巻物をひろげるように移り変る世相を次々と眺める事は興のないことでもなかったが、おおむね、わたしは寒い思いをした。なんでも都がよそに遷ったとか聞いた。さもあろう。あぶらぎった坊主たちはやせこけ、法要や、祭は稀になり、たまにあってもごく貧しいものだった。寺は荒れに荒れ、雨はわたしの丸ぼうずの上にもり、くもの巣はわたしのひじと胸との間に張られた。そうこうする中にまた火災にもあった。それは戦争のために寺が焼き打たれためであった。しかし、どういう運か、わたしはそのときもやはり灰になることを免れた。ただし、ほうり出されたとき下になったわたしの左のひじは、なかばもげてなくなった。

なんのために、そのとき、わたしが助け出されたのか、今なお合点がいかない。なんとなれば、わたしは、それきりしばらくの間は焼跡の空地に投げ捨てられたままであったからである。あるいは、寺の僧がわたしを持ってのがれようとして、そのひまがなく逃げ失せたのであろうか。かくて、青てんじょうのわたしの周囲はがらんとして明るくはなったが、わたしの上には風が吹き、雨はほしいままに降り注ぎ、雪は積もった。煙にいぶされ、ぬれた上を日に照りつけられてわたしの色はますます黒く、しみだらけになった。そして、湿地に触れているわたしの背中は腐朽し、虫が食った。

ある日の悪いばあさんは、わたしを何か木の端とでも思ったものか、しばらく、わたしの腹の上に腰かけて一服しながら休んだが、「やれやれ、情けない世の中になったものだ。阿弥陀様はこの荒れかたをなんと見ていらっしゃるだろう。なんだかまだありがたい灰のにおいがする。ああ、なんという罰当たりめ。」

と言って去った。が、そのご、また一人の見知らぬ僧がわたしのそばをすぎ、わたしに気づき、

「おお、もったいない。」

と言って、わたしを抱き起こして立たせ、そして、南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏と唱えながら去った。

さらにいく度となく春は来、秋は去った。わたしはたい

くつで、孤独だった。そして、からだがしだいに腐っていくのを感じた。しかし、どうせなるようにしかならないわたしのからだだ。わたしはのんきな心持を持って四季の移り変わる様や、大空の月や星や、雲を眺めることにした。わたしの心は閑散で、わびしかったが、依然としてのどかで、晴朗であった。人は訪ねては来なかったが、ひばりやすずめやうぐいすは来た。小鳥はわたしの頭に止まり、肩や膝に糞をたれた。わたしは、そのかわいい声を楽しく聞きながらうつらうつらと眠った。うとうとしているうちにまたがやがやとそうぞうしい音を幾度か耳にした。それは耳のわきで蚊の群が騒いでいたのか、それともまた何かの戦争を始めていたのかどっちとも知れない。どっちにしても、わたしには用のないものだからわたしは眠い目を開こうともしなかった。

ふと目をさますとわたしは小さな屋根の下にいた。それは百姓屋だった。坊主ではないが、いかにも人のよい、このごろの世には珍しい温かい心を持った感心なじいさんとばあさんだった。なんでもわたしが原の中で鳥の糞をあびているのを見て、とんでもないことだといって夫婦で車に乗せて家へ持ってきたのださうだ。

「あんまりひどくよごれてなさるからねえ。」

ばあさんはこう言って、泥だらけのわたしのからだに水でぞうきんがけをし、顔をたわしでこすってくれた。そし

て、じいさんをふりかえって、
「まあ見なせえ。こんなきれいなきれいな仏様におなりなすった。」
と言った。

ところが、ある晩、抜身の刀をさげて頬かぶりをした大の男がはいって来て、なんとも恐ろしい顔でこの老人夫婦をおどかしていたが、結局なにも得るところがなかったので、腹だちまぎれに、わたしを小脇にかかえて外へ出た。外へは出たが、何しろ重いわたしが荷やっかいになったとみえて、「ええ、重てえ野郎だ。めんどくさい。このでくめ。」と言いざまわたしをまた道端へほうり捨てて行った。それをまた拾いとったのが、ある坊主だった。恐ろしい強欲ななまぐさ坊主だった。この坊主の家に来たときばかりは、さしも楽天家のわたしもこの人間世界に少し心細くなり、世は末になったのか、わたしの運命もいよいよかくして果てるのか、と思ったほどだった。人間がわたしを見捨てればわたしも人間を見捨てるよりない。

ある晩来た友だちが、こう言った。
「おまえさん、あんなもの拾ってきてどうするつもりだい。ほんとに物好きだな。せめて金仏ででもありあ、つぶしても金になるけれど、あんな腐ったでくのぼうをさ。ばかばかしい。」

「まあ、だまって見ておいで。ことによったら酒代ぐらいには売れないものでもないさ。運慶の作だなんて札をつけておきゃあな。かなり時代はついているし。」
「まあ、どこの馬鹿が今どきこんな木っ屑のお地蔵さんなんぞにびた一文出すものかね。おまえさんもまだまだ坊さんのにおいが抜けないね。」
「ふん。そうしたらたたきつぶして、たきぎにでもすりやあいいじゃないか。ぶつぶつ言うな。ちくしょう。」
ところが、どういう相談がまとまったものか、この坊主はここに茶みせを開き、その家の面目は急に一変してしまった。家の前にはのれんが垂れ「おやすみどころ」というかけ札がかかった。そして、わたしはというと、そのみせの前につつ立てられ、頭には編み笠をかぶせられた。それから右の垂れている手の先にはなんのつもりか、いたずらか、わらじがぶらさげられた。
みせの前には赤い布を敷いた縁台が置かれ、その縁台の前に太い桜の木が二、三本ある。その花はいかにも美しいものだった。で、わたしは、そのらんまんたる花をすかして青空を眺めては楽しんだ。わたしの背に、胸に、ひじに、膝にその白い花びらは快い春風にあおられて雪の様に散りかかった。
世はしばし泰平であるとみえて、いろいろおもしろい

なりをした花見の客は、絶えずそのみせの前を通りその縁に休んだ。わたしは人間ではないから、それらの様をただそのままに眺められる。だから、ひさごを太刀のつかにぶらさげて馬鹿げた面をかぶった酔いざむらいも、自いきやはんをはき、赤い裾をからげていぎたなくさわぐ女も、おもしろく眺められる。子どもらが桜の花びらを糸に通して遊ぶのもかわいい。仰々しい、大名らしい者の行列も美しい。一人の酔った女は、わたしの首に紫の頭巾（ずきん）をくくりつけていった。すると、このみせの主婦はそのちりめんの頭巾を自分で取ってしまって、そのかわりに手拭をわたしの首に巻きつけた、そして「よく似あうわ。」と言って笑った。

しかし、あるとき、わたしは子どもたちがへんなものを持って遊んでいるのを見た。それはわたしと同じような仏像の腕と、首だった。子どもはその腕を刀にし、首を「敵の首だ」と言って奪い合っていた。わたしもそれを見たときはさすがに不安を感じた。あぶないやつだと思った。

あるとき、商人とも、さむらいともわからない二人の男がそのみせに腰をかけた。

「やれやれ、お地蔵さんもこうたぬき同様に扱われちゃ、かたなしだな。」

と一人が言った。

「このお地蔵さんはね、そりゃあ美男子なんですよ。」

と例の女主人は言った。
「だからこうして看板に出しておくんですの。お客さんはこれに目をとめてここへ腰をかけますからね。」
「けしからぬな。」と男は言って、その縁の上に長々と横になりながら頬杖をついてわたしを見ていたが、
「なるほど、これやいいお地蔵さんだ。」
と言った。
「いいでしょ。まあ、顔をよく見てごらんなさい。」
と言って、女はわたしの編み笠をとった。
「おお。これはどうしてなかなかたいしたものだぞ。ねえさん、こんなものをどこで手に入れたね。」
と、男は起きあがりながら言った。
「いいえね。わたしの家に昔から伝わっていたものですの。なんでも運慶の作だって言いますよ。」
「ははは。馬鹿言っちゃいけない。こんな運慶があるものか。これはてっきり藤原ものだよ。大方定朝（じょうちょう）あたりの作だね。」
「運慶でないことは確かだが、定朝も怪しいな。」
と連れの男が言った。そして爪でこつこつわたしのひたいをはじいてみて、
「木だな。」
と言った。
「じゃ、弘法かな。」

「そうさ。弘法の作ぐらいのことは言ったっていいだろう。そう言って一つもうけ物にするかな。」
二人はこんな相談をしてなんとか主婦にかけ合いを始めた。
「そうですね。まあおいくらぐらいで？」
と主婦はもったいらしくたずねた。
「一文。」
と男は答えた。
「じゃうだん言っちゃいけませんよ。あなた。」
女は赤くなって言ったが、奥にはいって行った。例の坊主の亭主が出てきて、しばらく押問答をしたが、結局、客はまじめではなかった。
「ちくしょうめ。」二人の客の後ろ姿を見送りながらつぶやいた。「人の物を散々ひやかしゃがって、太い野郎だ。小判の一枚とでも代えて行きゃいいに。」
あとで、夫婦は夜になるまでぶつぶつののしり合い、くやしがった。
世はまた乱れた。誰もわたしなぞに目をとめるものはなかった。その乱がしずまってからしばらくたって、わたしはまた拾われて他人の手にあった。
わたしは、ある日、その家にひょっこりはいって来た青年の顔を永く忘れないであろう。

「あれはなんです。」
とその青年はその貧しい家の主に聞いた。
「へ、あれですか。お地蔵様ですよ。このあいだ、ある家の前を通ったら、そこのかみさんが、このお地蔵さんをたきぎにすると言ってぶち割ろうとしているんやすよ。もったいないことだ。たきぎにするくらいならわたしがもらって行くと言って、わらじ五足とひきかえにもらってきたんですがね。」
青年はわたしの方に近よった。
「おやおや。」
彼は並々ならぬいぶかしげな調子でこう言いだした。
「これゃいい！」
そして、ちょっとだまったあとで、
「すてきだ。すばらしいものです。えらいものを手に入れましたね。」
とさらに驚嘆してつけ足した。
「へえ。一体いつごろのものでしょうな。」
主人は、前と少し変った調子で乗り出しながらこう言った。
「確かに天平（てんぴょう）のものです。まちがいはありません。そうでなければとてもこんな豊かさはありません。」
青年は、全くうっとりとした上気したていで、顔を赤らめ

ながらなおもほとばしる語を継いだ。
「なんという、ふっくらした、やわらかさだ。この線、この肉づげ。この生きている不思議さ！このじんわりとした美しさ、温かさ！こんな美が、こんな傑作がわれわれの先祖の手によって作られたかと思うと、本当にありがたいほど気丈夫ではありませんか。なんと肩身が広いではありませんか。これが千年以上の昔に作られたとは、いやが上にも驚くべきではありませんか。ああ、これは世界的なものです。日本以外に類のないりっぱさです。ああ僕らの先祖はえらかったのだ！」
わたしは満足した。生き返ったような気がした。この青年の今のことばをあの義道が聞いたらどんなにか満足したであろう。だが、こういう会心なことばを発する知己にめぐりあうまで、ああ、わたしたちはいかに永い間淋しく待たなければならなかったであろう。
青年はどんなにわたしを欲しがったことかしれない。わたしもまた彼の所に行ってやりたい気もした。しかし、青年はそれを言い出すことはできなかった。彼は貧しい一かいの青年画工にすぎなかった。そして、もし彼がそれを言い出し得たとしても、彼のことばを聞いたわたしの主人は、もはや容易にわたしを手離しはしなかったであろう。なぜなら、彼は、前のなまぐさ坊主のような人間ではなかったにしろ、やっぱり貧しい農夫にすぎなかった

から。
しかし、青年は自分でわたしを買う必要はなかった。まもなく、政府からつかわされた役人はわたしを古物商の手から買い上げた。
そして、今では、わたしはこの博物館の彫刻部の一室に、ガラス張りの大きなわくの中に、他の美しい仏像の傑作と共に荘重に並べられて、静かに公衆の面前に立っている。
わたしの前には、白い紙の札が丁重に立てられ、それにこう書いてある。
「地蔵菩薩（ぼさつ）像。木彫。天平時代。作者不詳—国宝。」

思えば、わたしもずいぶんと永いこと生きたものだ。どのくらいの年月を経たかしらない。ただ過去を思うと、長い夢のような気がする。ずいぶんいろいろの物様を見た。いろいろの目にも会った、まだまだこの外に無数の経験はあるが、たいていは忘れてしまった。ことによったら、わたしの記憶として語った事のうちにもまちがいはあるかもしれない。
しかし、これでまあようやくわたしもどうかこうか落ち着くべき所に落ち着いたようだ。これから先もまだいつまでも生き延びて、どのような憂き目に会うか知らな

いが、当分はここで安静な日を送ることだろう。
今まではどっちかといえば、わたしの方から人を眺めるわけになっていたが、これからは存分人に眺めてもらおう。その方が、わたしも楽だし、またわたしの本当の任務も務まるわけだ。
なんだか、こうして落ち着いてみると、実際、今まで腕を一本なくしただけで、
（１５７．ｊｐｇ　挿絵、ことば一覧表あり）
ともかく生きながらえてこられた事が不思議に思われてならない。
思えば、人間というやつは変なやつだ。

長与善郎（一八八八―一九六一年）著述家

東京に生まれた。東大中退後、「白樺」同人として、小説、戯曲を発表し、文壇に活動した。「青銅のキリスト」「陸奥（むつ）直次郎」「項羽と劉邦（りゅうほう）」「陶淵明」などの作品がよく知られている。

課　外

一　サントスへの遠い道

六月のサン・パウロの空は、よく晴れていた。農務局前の街路は人通りも少なく、イペーの並木がくっきりと影を舗道にうつしていた。

農務局の玄関からひとりの男が現われた。舗道を一歩一歩踏みしめるように歩いていった。

背はあまり高くないが、肩幅の広い四十歳前後の男であった。しかし、その顔には深い疲労の色がただよっており、目は何かを思いなやんでいるようにくもっていた。

彼は、ふと眉をあげ、低いが力のこもった声でいった。

「いや、おれは止めない。止めるものか。そうだ友人に相談しよう。」

彼は、中心街の方へむかって歩をはやめた。

これは、サン・パウロ〜サントス間を結ぶ道路建設に身も心も打ち込んでいるルジェ＝ラモスのある日の姿であった。

ラモスは、この日、長官に呼びつけられて、農務局に出頭したのであった。あいさつをする間もなく、長官は不気

げんな顔をして、ラモス（新ポル語　Ｓａｎｔｏｓ／Ｉｐｅ／Ｒｕｊｅ　Ｒａｍｏｓ）に新聞をつきつけた。
「君、この記事は、どういうことかね。」
見ると、それは、ラモスの監督下に進められているサン・パウロ～サントス間の道路工事に、サン・パウロ鉄道会社が、全面的に協調することになったという記事で、同社との交渉に成功したのは、司法治安長官の手腕による、と報じであった。ラモスは、内心「しまった。」と思った。
　ラモスと司法治安長官とはごく親しい間柄であった。ある日、ラモスは、彼に道路工事が技術面でも、資金面でも、非常を苦境にあることを話し、サン・パウロ鉄道会社の協力を得たいという希望を語った。かねがねラモスの苦闘に同情していた彼は、同社社長と親交があるので、交渉を側面的に援助することを約束してくれた。
　そして、ラモスが農務局に、その交渉方を申請するより早く、彼の非公式交渉が効を奏して、新聞発表となったのであった。
「こういう事の交渉には、誰が当たるべきかというこを、君は知らないのかね。」
「よく承知しております。長官にお願いするつもりでしたが意外に早く話が進みまして、……申しわけございませ

ん。」
「勝手な行動をされては困るね。とにかく工事は中止ということにしてもらおう。それから、再開の場合、工事に関することは一切公共事業局が行なうことにする。いいね。」
「すると、わたしは？……」
「まあ、気の毒だが、手を引いてもらうほかはないだろうね。」
取りつくしまもない長官のことばに、ラモスは、ぼう然としてしばらくつっ立っていた。彼は眼前がまっ暗になったような思いで、農務局を退出したのであった。

ラモスは友人の弁護士をたずねて善後策を相談した。友人は、気の毒そうに、こうなっては工事を手放すより外はないことを告げた。しかし、あまりにもラモスの落胆ぶりがはなはだしいので、最後に、こう、ことばを添えた。「どうしても工事を続けたいならば、州道沿いの土地を買いとり、そこに道路を作るという方法がある。これなら、誰の干渉もうけないだろう。」
ラモスは、目を輝かせた。「そうだ。まだ、そのてがあった。」ラモスは、その日から手づるを求めて、土地買収資金の調達に奔走しはじめた。
サン・パウロ市民は、最初、なぜ急に工事が中止された

のか、その事情を知らなかった。日がたつにつれて、公共事業局が、ラモスの手から工事を取りあげたことを知った。そして当局に対する非難の声がだんだん高まっていった。

公共事業局としても、市民の反感を買うことの不利をさとり、ラモスに和解を求めてきた。そして、サン・パウロ～アルト・ダ・セーラ間は従前通りラモスが受け持ち、アルト・ダ・セーラ～サントス間を公共事業局が担当して、工事を進めることを提案した。ラモスは、骨身をけずる思いで進めてきた工事が、再びわが手にかえったことを喜び、勇んで工事を再開したのだった。

サン・パウロ～サントス間の道路建設！

（新ポル語　Ａｌｔｏ　ｄａ　Ｓｅｒｒａ）

この事業にとりつかれ、まるで気ちがいのようになっている男、ルジェ＝ラモスとは、いったいどんな人物なのであろうか。

彼は、一八七五年に生まれた。豪気果断な性質で、しかも温情に富み、正義の念に厚い人であった。サン・パウロ法科大学を卒業して後、警察行政の職につき、抜群の成績をあげて昇進を続け、後にはサン・パウロ交通局長の要職

についた。

彼ははやくから、サン・パウロ市の膨張を予側して、道路の建設、整備に情熱を傾けた。ブラジルに欧米の交通システムを取り入れ、交通統制、交通信号など、みな彼によってはじめて行なわれたものである。特に、サン・パウロ～サントス間の自動車道路の建設は、彼が身命を投げうって完成した事業である。

〈ルジェ＝ラモス〉

彼がこの難事業に心魂を打ち込むにいたったのは、次のようなことが、その動機である。

ルジェ＝ラモスが、司法治安局に勤めていた時のことである。一九一一年、彼は政府から派遣されてブエノス・アイレスに旅行した。公務を終えて帰国するに際し、ブラジル政府を訪問するアルゼンチン政府の高官数人と同行した。

船がサントスに寄港して、一泊することになった。アルゼンチン政府の高官たちは、何の風情もないサントスで一夜を過ごすよりも、サン・パウロに足をのばし、陸路を

リオ・デ・ジャネイロに向うことを計画した。そして同行のラモスに、サン・パウロへの案内方を依頼した。しかし、その時は、サン・パウロ行きの汽車が発車した後であった。

「あいにく汽車は出てしまったのですが…。」

というと、高官たちは、気軽な口調で、

「じゃあ、自動車で行きましょう。」

「そりゃ名案だ。あの山脈からの眺めは、きっとすばらしいよ。」

「いいね。自動車にかぎるよ。」

と一同、大乗気で、自動車による山脈踏破を申し出た。

「ところが、その……自動車というのが…。」

「自動車がないのですか。」

「自動車はあるのですが、……じつは……。」

ラモスは、サン・パウロ〜サントス間の自動車道路が未開通であることを、話さないわけにはいかなかった。高官たちはあきれ、そして失望した。また、一方ラモスのはずかしさ、なさけなさは、言いようもないほどであった。

この時のみじめな気持は、ラモスの胸深く残った。サン・パウロに帰着したラモスは、あらためて、交通事情に目をそそいだ。都市の発展はめざましいにもかかわらず、道路は依然として貧弱をきわめ、自動車事故は毎日のように起こって市民をおびえさせていた。

ラモスは、道路関係の官庁や、政府の高官を訪問して、街路の拡張、新道路の建設について力説した。しかし、当局者はみな、はんこで押したように「予算がない。技術者がいない。」の一点張りで、誰一人として彼の意見に関心を持ってくれなかった。

ラモスは、どう考えても、当局者のことばに納得がいかなかった。特に近代都市サン・パウロが、その表玄関とするサントスへの自動車道路を持たないとは、何ごとか。一国の面目にもかかわることではないか。これに焦点をしぼって着工することがなぜできないのか。ラモスは当局者の言う不可能説に、どれ程の真実性があるかを疑った。そして、サン・パウロ～サントス間の道路に関する資料を調べてみることにした。

ラモスは、資料の中から、次のような報告書をさがし出した。一つは、一九一〇年に、時の土木課長が州議会に提出したものであった。

◇　〇キロから二六キロまで（サン・パウロ～リオ・グランデ）牛・馬車の通行可能。

◇　二六キロから四二キロまで（リオ・グランデ～アルト・ダ・セーラ）人・馬の通行可能。牛・馬車は、時に通行不可能。

◇　四二キロから六五キロまで（アルト・ダ・セーラ）牛・

馬車通行可能。

◇　これら既設の道路の維持は一九〇一年以降、サン・パウロ州政府の所層であるが、予算不足のため放置の状態にある。

次に、ラモスの目を引いたのは、サン・パウロ～サントス間、自動車競争に関する記録であった。

これは一九〇八年、良家の子弟数名が、二台の自動車に分乗して競争を試みた。それによると、途中幾度かぬかるみに落ちこみ、そのたびに牛車をやとって引きあげ、一台だけが、二五時間三〇分を費して、やっとサントスに到着したと記してあった。

また、一九〇九年、当時の司法長官ワシントン＝ルイスが、数名の同行者と共に、自動車旅行を試みた記録もあった。一行は二台の自動車に分乗して、午前六時にサン・パウロを出発、午後九時にその出発点に帰着したと報告してある。しかし、この試みが成功したか否かは記してなかった。だが、これに同行したフォンセッカ大佐が「サン・パウロ～サントス間に自動車道路を建設することは、とうてい不可能である。」という結論を記しているのが、ラモスの目を引いた。

どの資料を読んでも、希望の持てそうなものは一つもなかったが、ラモスは失望しなかった。問題は、リオ・グランデからアルト・ダ・セーラ間の一六キロである。この

難関さえ克服すれば、曲りなりにも、自動車道路を開通させることができる。事実それが不可能かどうか　ラモスは自身踏査に当たってみることを決意した。優秀なメカニコを雇い、一九一二年の中ごろ、ラモスは勇躍サン・パウロを出発した。しかし、わずか二二キロの地点に達したばかりで、それよりはすこしも前進できず、引き返さなければならなかった。第一回の踏査は失敗に終わったが、ラモスはあきらめなかった。再び慎重に準備を進め、第二回目の踏査を行なった。この時は難行ながら、アルト・ダ・セーラま近くまで進んだが、俗にインフェルノとよばれている難所で前進ははばまれてしまった。あとわずかで、雄大な大西洋の眺めをほしいままにできる地点に達しながら、引き返さねばならぬ残念さに、ラモスは歯をくいしばった。

ラモスは、猛然として、第三回目の踏査を決行した。こんどは、ブラガ公共事業局長、レフエブレ同局技師の同行を求め、二台の自動車を用意して出発した。一九一三年六月、一行は、これまでの経験を生かしてインフェルノの難関

（新ポル語　Ｒｉｏ　Ｇｒａｎｄｅ／Ｗａｓｈｉｎｇｔｏｎ　Ｌｕｉｚ／Ｆｏｎｓｅｃａ／Ｉｎｆｅｒｎｏ／Ｂｒａｇａ／Ｌｅｆｅｖｒｅ／ｍｅｃａｎｉｃｏ）

を突破し、ついにアルト・ダ・セーラに行き着いた。そして無事サントスに到着したのは、サン・パウロを出発してから、十二時間の後であった。この踏破により、道路の状態を充分見きわめたラモスは、自動車道路建設可能の信念を固くした。

後年、ラモスは当時の心境を次のように記している。

「落ちるに決まっている絶壁の上には、どれほど職務に忠実な人でも、愛国心に富んだ人でも、登ることをためらうのは当然だ。だが、人間には、自分でも説明のできないふしぎな瞬間があるものだ。それは、長い長い時間をかけて、胸の中に凝り固まらせた執念のようなものが、まったく突然に、人を決意に追いこむことがある。わたしが、意を決したのも、まさにそれなのだ。土木工事にはまったくしろうとのわたしが、またばくだいな資金をどうして調達するか、なんのあてもないわたしが、『やってみよう。』と思いたったのだから、今考えてもふしぎというほかはない。」

当時、警察所長の職にあったラモスは公職を退き、私財を投じて道路建設の準備に着手した。財務局・内務局・司法局・農務局をかけずりまわり、援助方を懇請した。各局の長官は、まるでものにつかれたようなラモスの情熱と意気にうたれ、こころよく協力を承諾してくれた。

またサン・パウロとサントスの市庁も、ラモスの要請にこ

たえて、労力と資金面に対する援助を約束してくれた。勇気百倍したラモスは、一九一三年九月、イピランガ博物館のそばから工事を開始した。

資金の調達から、現場の監督まで、ラモスは昼夜の別なく、身も心も打ちこんで働き続けた。時には無知な者の妨害に悩まされたり、監督当局の無理解にわずらわされたり、また、資金と技術に行き詰ったりした。幾度か工事は中断の危機にさらされたが、そのたびに、不屈の志を燃やし、困苦に打ちかって、工事を進めていった。

こうして、さしもの難工事も、前後七年の歳月と約九百コントを費して、一九二〇年にめでたく完成したのであった。

ラモスは、その後、交通関係の要職に歴任し、一九三〇年に退官した。そして、一九四一年、誠意と努力と愛国の至情を以て貫いた生がいを安らかに閉じたのであった。

彼の功績を永遠に記念して、サン・ベルナルド郡の一角、サントスへの道に沿う一バイロに、ルジェ＝ラモスの名がつけられている。また同郡のビラ・ムソリニには、ルジェ＝ラモスの名を冠した小学校があり、多くの学童が勉学にいそしんでいる。

（新ポル語　ｃｏｎｔｏ／Ｓａｏ　Ｂｅｒｎａｒｄｏ／Ｉｐｉｒａｎｇａ／ｂａｉｒｏ／Ｖｉｌａ　Ｍｕｓｓｏｌｉｎｉ）

その後、サン・パウロ市の膨張するにつれ、サン・パウロ～サントス間の交通量はいよいよ増大し、新路線の建設にせまられた。新路線は一九三九年着工、一九四七年に完成した。これがビア・アンシエッタである。

今日サン・パウロ～サントス間は、わずか一時間の行程となり、年間自動車の交通量は約五百万台、一日、約一万四千台（一九六二年調）となっている。

サン・パウロ市民は、サントスへのこころよいドライブを楽しみ、日がえりのピクニックに興じている。しかし、それに至るまでには、血と涙にまみれた先人の苦闘が秘められているのである。

〈アンシエッタ街道〉

二　ひ　も

ギードー＝モーパッサン

ゴデルビルに集まる街道（かいどう）という街道にあふれて、百姓とその女房たちが、町を目ざして押し寄せてくる。市日だからだ。

雌牛や子牛を引く綱の端をにぎっている者もいる。そして、女房たちは、畜生のうしろから、その歩みを早めるために、まだ葉のついている未の枝をむちにして、その尻をたたく。腕に大きなかごをかかえているが、そのかごの中から、鶏やあひるが首を出している。そして女房たちは、亭主たちよりは速い小刻みの足どりで歩いている。頭にはぴったりと白い布をまきつけ、その上に帽子が載っている。

ゴデルビルの広場は、たいへんな雑踏である。人間と家畜をこき混ぜた群衆、その群衆の波の上に、牛の角と百姓の高帽と、女のかぶりものとが浮かびあがっている。かん高く、騒々しい人声がすごいどよめきを作り、それを押さえるように、きげんのいい爆笑が響いたり、雌牛の鳴き声がきこえる。

ブレオラのオーシュコルヌどんは、今ゴデルビルに着いたところである。広場のほうに向かって歩いていたが、

ふと地面にひもの切れはしが落ちているのを見つけた。きっすいのノルマンジー人で始末屋のオーシュコルヌどんは、役にたつものは、なんでも拾っておくのがいいと考えた。地面に手をのばして、ひもを拾いあげた。それから、ていねいに巻いておこうとした。

と、そのとたんに、馬具師のアランダンが、店の戸口のところに立って、じっとこっちを見ているのに気がついた。ふたりは、以前、おもがい一つのことでいざこざを起こしたことがあった。ふたりとも執念深いたちなので、いまだに腹をたてあっていた。泥まみれのひもの切れっぱしを拾うところを、敵に見られたことで、オーシュコルヌどんは、一種のはずかしさを感じた。いきなり、拾ったひもを仕事着の下に隠しそれから、ズボンのポケットへ押しこんだ。それからなお地面の上に何かを捜すような、そして、それが見つからないようなふりをした。それから、

オーシュコルヌどんは、市場の方へ歩いていった。やがて、彼の姿は、ざわめいている群衆の中に消えた。

百姓たちは、雌牛に手を触、向こうへ行ったと思うとまた引き返してきて、思い迷っている。買おうか、買うまいか、どうしても決心がつかず、売り手の目の色をうかがい、そのごまかしを見破り、雌牛に難くせをつけようと、しきりにねらっている。

女たちは、足もとに大きなかごをおろして、中から鶏を取りだして売っている。客の言い分をじっときき、顔色一つ動かさずに、つけ値をゆずろうとしない。かと思うと、客の出した値引きに応じ、追いすがるように叫ぶ。

「もうし、決めたで、売りますだよ。」

少しずつ広場の人数が減っていった。ジュルダンの店では、大広間で食事をする客でいっぱいだった。テーブルに着いているお客のすぐかたわらに、途方もなく大きな暖炉が勢いよく燃えていて、右側の並びの連中の背中に、激しいぬくみを投げてよこす。暖炉の火に、とりとはとと羊の肉をさした金ぐしが幾本かかけてある。焼ける肉のうまそうなにおいがたちのぼり、人人の陽気な気分をいっそうかきたて、くちびるを湿らせる。

村でも上層階級にぞくする者が、ジュルダンおやじの店で食事をするのである。ジュルダンは宿屋の亭主兼ば

くろうで、しこたま金をためこんでいるしたたか者である。
さらがどんどん運ばれ、からになっていく。リンゴ酒のはいったびんも同様である。めいめいが、買ったもの、売ったもののことを話している。作柄をききあったりしている。
だしぬけに、前庭で、たいこのすり打ちの音が響いた。二、三人を除いて、たちまち総立ちになった。口いっぱいにほおばったまま、ナプキンを手に一同は戸口のほうへ、窓のほうへかけよった。
たいこのすり打ちを終えると、ひろめ屋は、一句一句切って歌うような調子で、口上を始めた。
「ええい。ゴデルビルの皆さまに、してまた、今日市場においでの皆さま方に—申しあげます。けさ、ブーズビル街におきまして、—九時より十時までの間に、黒皮製の財布一個、金五百フランならびに書類入りのもの、—紛失つかまつりました。ご拾得のかたは—たぁだちに、町役場、もしくは、マヌビルのフォルチュネ＝ウルブレック氏かたへお届けのほど、お敵い申しあげます—。お届けのかたには、二十フランの謝礼をいたしまぁす。」
それがすむと、男はむこうへ行った。遠くから、もう一度、たいこの音と、ひろめ屋の口上の声がかすかにきこえた。
一同は、この事件について話しはじめた。ウルブレック

どんがなくした財布を見つけるだろうか、それとも見つけないだろうかと。
　そうして、食事は終わった。
　一同がコーヒーを飲み終わったところへ、憲兵分隊隊長がきた。
「ブレオラのオーシュコルヌどんはいるかね。」
食卓の向こうの端にすわっていたオーシュコルヌは答えた。
「はあ、いますだよ。」
隊長はことばを続けた。
「オーシュコルヌどん、町役場までいっしょに行ってもらおう。町長が話したいことがあるとさ。」
オーシュコルヌはおどろき、不安になり、あわててぐいとプチ・ベール（コニャックの杯）をあけ、立ちあがった。
「はあ、今行きますだよ、はあ。」
　町長は、ひじかけいすにどっかと腰をおろして待っていた。この土地の公証人で、でっぷり太った男であるが、しかつめらしい顔をして、もったいぶったことばばかりを使う。
「オーシュコルヌどん、けさ、あんたが、ブーズビル街で、マヌビルのウルブレックどんのなくした財布を拾得したのを、見た者があるが……。」
オーシュコルヌは、あっけにとられ、町長の顔を見つめ

た。理由はのみこめないながらも、自分の身に降りかかってきたこの嫌疑に、はやくもおじけづいていた。
「おらが、おらが、財布を拾いましたと？」
「さよう、まさしくおまえさんがね。」
「こんりんざい、そんなものは見たこともねえ。」
「見た者がある。」
「見た者が？　おらを？　だれが見ただか。」
「馬貝屋のマランダンどんだ。」
これをきくと、オーシュコルヌは思いあたり、のみこめた。そして、激怒でまっかになった。
「ああ！　わかっただ。あの野郎が見たと言うなら！　ほら、見てくだせぇ、町長さん。おらが、このひもを拾うのを、あの野郎が見たんでがす。」
こういって、ポケットの奥をさぐって、例のひもの切れっ端を引っぱりだした。
　しかし、町長はうたぐり深く、かぶりを振った。
「そんなことを言ったって信じられないね。マランダンどんは信用できる人だ。その人が、ひもと財布とを見まちがえたというのは、ちとおかしいね。」
オーシュコルヌは、自分の名誉のあかしをするためにくりかえした。
「そんなことを言ったって、これが正真正銘、ほんとのことでがすぞ、町長さん。おらの魂にかけて、神様のお救い

にかけて、なんべんでも申しますだ。」
町長は、ことばを続けた。
「品物を拾ったあとで、なおしばらく、そのへんを捜したそうじゃないか、銭が一枚でもこぼれてはいなかったかと、ね。」
「そりゃあんまりだ。……あんまりだ。正直な人間を傷つけるために、そんなうそをつくとは！あんまりだ！」
いくら抗弁してもだめだった。信じてもらえなかった。
マランダンと対決させられたが、マランダンは前言をくり返し、断定を曲げなかった。ふたりは、一時間たっぷりののしりあった。本人の申し出で、オーシュコルヌどんの身体検査をしたが、なんにも見つからなかった。
ついに町長はすっかり当惑して、オーシュコルヌの帰宅を許した。検事局に報告して、さしずを仰ぐから、そのつもりで、と言いながら。
うわさはすでに広まっていた。役場から出てくると、たちまち、彼は大ぜいに取り巻まれ、質問の雨を浴びせられた。まじめに、あるいは、ふざけ半分に、好奇心をもってたずねるのだが、いっしょに憤慨してくれるものはなかった。彼は、ひもの一件をくどくどと語った。だれも信じなかった。みんな、にやにや笑っていた。
彼は、だれかれから引き止められ、たずねられた。知った顔に行きあえば、彼の方から引き止めて、果てしもな

く、自分の話と抗弁とをくりかえした。何一つとらなかったことを証明するために、ポケットをひっくりかえして見せた。

こんなことを言うやつもあった。

「へえ、やってるな、やっこさん！」

彼は腹をたて、いきりたった。信じてもらえないやりきれなさにいらだった。

夜になった。彼は近所の衆三人と道づれになって帰った。彼は帰りみちで、その三人に、自分がひもを拾った場所を、ここだと教えてやった。そして道々ずっと思いがけない災難のことを話した。

その夜、彼は、みんなにきいてもらうため、ブレオラ村をひと回りした。どこへ行っても、懐疑的にしかきいてもらえなかった。

そのため、彼は夜通し煩悶して、半病人になった。

翌日、午後一時ごろ、イモービルのブルトンどんところの作男マリウス＝ポメルが財布と中味とをマヌビルのウルブレックどんの家に届けた。

この男が言うには、事実往来で品物を拾うには拾うたが、字が読めないので、家に持ち帰り、主人に渡した、ということである。

うわさは、すぐに広まった。オーシュコルヌどんもきいた。彼はただちに、また村回りをはじめ、大詰めを加え、

増補訂正された話をしてまわった。どんなもんだいといわんばかりに。
「おらの残念でたまらねえのは、うそをつかれたことだ。うそっぱちがもとで、難くせつけられるほどつらいものはねえ。」
一日じゅうこの話をして歩いた。往来では通りがかりの者をつかまえて話し、酒場では、飲んでいる連中に話した。次の日曜日には、教会から出てくる人々に話した。見知らぬ人々までつかまえて話した。
彼は多少これで落ち着いた。とはいうものの、何かすっきりしなかった。彼の話を聞く方は、おもしろがってはいるようだが、心からその話を信じてくれているふうには見えなかった。
次の火曜日には、ゴデルビルの町に出かけた。ひとえに自分の立場を語りたい気持ちにかりたてられたのである。
クリクトのある男に話しかけたら、相手は、みなまで言わせず、ほんと彼の肩をたたいて、こう言った。
「へへへ、やったね。大将！」
それから、くるりと向こうをむいて行ってしまった。彼は、不安になってきた。なぜ、「やったね。」などと言うのか……。
ジュルダンの食堂に行き、彼は事件を説明しはじめた。すると、モンチビリエのあるばくろうが、大きな声で、こ

う言った。
「おい、おい、古だぬきのとっつぁん、いいかげんにしなよ。その話なら、ちゃんと知ってるぜ！」
オーシュコルヌは、どもりながら言った。
「だって、財布が出てきたでねえかよ。」
しかし、相手はすぐ言い返した。
「言うな、言うな、とっつぁん。拾ったものは、拾ったもの。返したものは、返したものさ。まかふしぎ、奇妙きてれつってわけだ。」
彼は息がつまった。やっとわかった。共謀者に、財布を届けさせたという嫌疑がかけられているのだった。彼は抗弁しようとした。食堂じゅうの者が声をそろえて笑いだした。彼は食事を終わりまですることができず、その場から立ち去った。
彼は家に帰った。はずかしくもあり、また腹だたしくもあった。のどがしめつけられるようだった。彼は、おぼろげながら、自分の潔白は、もはや証明不可能だと思った。
彼はあらためて、事件を語りはじめた。新しい理屈を加え、少しでも抗弁を強力にすることばや重みの加わる誓いのことばを考え出してはつけ加えていった。ただもう、ひもの一件で、四六時中、頭がいっぱいだった。弁解は複雑になり、理屈が巧妙になればなるほど、ますます人々は彼の言うことを信じなくなった。

彼は目に見えて衰えた。
ふざけたやつらは、おもしろ半分に、なん度も、彼に「ひもの話」をさせた。戦争に行ってきた兵隊に「戦争の話」をさせるように。そして、彼の気持ちは徹底的に打ちひしがれ、からだは弱っていった。
十二月の末に、彼は床についた。
正月早々、ついに死んだが、断末魔のうわご上に、自分の潔白を言いたて、何度も、こうくりかえした。
「短いひもでさ……、ほんの短いひもで……、ほら、見てくだせえ、町長さん。」

―杉捷夫（すぎはやお）訳による―

三　ことばのきまり（その三）

（一）　修　飾　語

総　説

修　飾　語

（1）【美しい】花が咲く。【動く】雲を見る。【静かな】日が続く。

（2）木の葉が【さびしく】散る。風が【おだやかに】吹く。

（3）おじさんが【昔】住んでいた。みかんを【三つ】食べる。

（4）【月の】光が美しい。【雨の】音がきこえる。

（5）ぼくは【これを】続む。【木から】落ちる。友だちと校庭で遊ぶ。

（1）は、単独で連体修飾語。（2）は、単独で連用修飾語となっていますが、それぞれ単独で述語にもなり、活用があるから用言です。（3）は、単独で連用修飾語ですが「が」を伴って、主語にもなれるから、名詞です。（4）は、連体修飾語ですが、名詞に助詞の「の」がついたものです。（5）は、連用修飾語ですが、名詞（代名詞をふくむ）に助詞のついたものです。

副詞と連体詞

（6）ぼくが【こう】言えば、かれは【ああ】言う。花も、【そろそろ】咲きはじめた。月の光が【たいそう】美しい。

（7）【この】花はきれいだ。【わが】国の自然は美しい。【あらゆる】材料を集める。

（6）—の語は、（イ）活用がなく、（ロ）単独で連用修飾語になっています。このような単語を副詞といいます。

（7）の—の語は、（イ）活用がなく、（ロ）単独で連体修飾語になっています。このような単語を、連体詞といいます。副詞も連体詞も、「が」を伴って主語になることはできません。

副詞

副詞は、（イ）活用がない。（ロ）単独で連用修飾語になる。（ハ）付属語を伴って、述語や連体修飾語になることもできる。（ニ）主語にはなれない。

（1）机を【ドンドン】たたく。【バタバタ】音をたてる。馬車が【ガラガラ】走る。

（2）水面が【きらきら】光る。腕を【にゅっと】突き出す。【すっと】前に出る。

右の（1）のような語を擬声語（ぎせいご）、（2）のよう

な語を擬態語（ぎたいご）といいますが、ともに副詞です。これらは、「しばらく、ゆっくり」などとともに、状態を表わす副詞です。

注　擬声語はかたかなで書き、擬態語は、ひらがなで書く。

特別の言い方を要求する副詞

（1）【たぶん】来る【だろう】。【さぞ】ご心配で【しょう】。……推量

（2）決して行かも【ない】。【断じて】許せ【ない】。……打ち消し

（3）【まさか】降る【まい】。よもや欠席などということは【ないだろう】。……打ち消しと推量

（4）【どうか】おいで【ください】。【どうぞ】お話し【ください】。……願望

（5）【もし】雨が降っ【たら】。【たとい】雨が降っ【ても】。仮定

（6）【まるで】つばめのように。【ちょうど】花の【ようだ】。……たとえ

（7）【なぜ】そんなことをするの（か）。疑問

右の類の副詞は、特別の言い方を要求します。この類の副詞があると、これから述べられることばを予知することができます。したがって、この類の副詞を適当に使え

ば、わかりやすい文となるわけです。

（1）【もっと】《ゆっくり》歩け。
【ずっと】《はっきり》写る。
【たいそう】《ゆっくり》話す。
【はなはだ】《ぼんやり》写った。
【すこぶる】・【すこし】・【よほど】。

（2）【もっと】《右》。【ずっと】《昔》。【すこし】《前》。
【たいそう】《遠方》に行った。

の右―の副詞は、程度を表わすものですが、この類の副詞は用言を修飾するだけでなく、（1）副詞を修飾し。（2）名詞を修飾することがあります。なお、（2）の場合の体言は、場所・方向・時間などに関するものに限られています。

連体詞

連体詞は、（1）活用がない。（2）単独で連体修飾語になる。（3）主語・連用修飾語・述語などにはならない。ふつう使われる連体詞は次のようなものです。

この、その、あの、どの、（これ、それ、あれ、どれ、は名詞、こう、そう、ああ、どうは副詞）、ある（人）、あらゆる、いわゆる、わが、とんだ、たいした、いろんな、たった、大きな、小さな、（大きい、小さい、は形容詞である。形容詞の活用には、「……な」の形はない。）

連体詞には、右の例のように、他の品詞から転じたものが多い。

（二）　独立語になる語

独立詞

（1）【おとうさん】本を買ってちょうだい。【さびしさ】、それはとてもがまんができないほどだ。

（2）　美しい、けれども、とげがある。問題がむずかしい。【だから】、ぼくには解けない。

（3）【まあ】、ずいぶんきれいね。【もしもし】、こちらへおいでください。【はい】、出席いたします。

右の―の語は、みな単独で独立語です。そのうち、（1）は、呼びかけや、提示した用法で、独立語になっていますが、ほかに「が」を伴って主語にもなれます。すなわち名詞です。

（2）は、単独で文と文とを接続するはたらきをもち、主語・述語・修飾語にはなれません。このような語を接続詞といいます。

（3）畑は、単独で感動・呼びかけ・応答などを表わし、これも独立語以外にはなれません。このような語を感動詞といいます。

接続詞

接続詞は、（1）活用がない。（2）単独で独立語にだけなる。（3）文と文、文節と文節とを接続する。

（1）　雨が降った。地面がぬかる。知っている。教えてくれない。（接続する語は表面にない。）

（2）　雨が降り、地面がぬかる。（接続する語は表面にない。中止法。）

（3）　雨が降っ【て】、地面がぬかる。知ってい【て】教えてくれない。（助詞）

（4）　雨が降った【ので】、地面がぬかる。知っている【のに】教えてくれない。（助詞）

（5）　雨が降った。【だから】地面がぬかる。知っている。【けれども】、教えてくれない。（接続詞）

（6）　雨が降った。降ったから地面がぬかる。知っている、【知っているのに】教えて、くれない。（くり返し）

右の例でもわかるように、接続詞なしでも話題の展開はできます。しかし、（1）（2）（3）の場合には、ただ並べただけなのか、原因・結果の関係にあるのか、相反する関係にあるのか、などという前後二つの文の関係は、はっきりしません。

（4）になると、それがはっきりしてきます。（5）になる

と、さらに、はっきりしてきます。このことは、もっと複雑な文章になればなるほど強く浮き出てきます。なお、（6）のように述語をくり返してもいいわけですが、複雑な文章の場合、一々それをくり返していたのでは、非常に煩雑になります。

このように、接続詞は、文章を簡潔にすると同時に、展開のすじをはっきり示すはたらきをもっています。

接続詞には、文と文とを接続する場合と、文節と文節とを接続する場合とがあります。

（1）　ぼくは、頭がよいとは言えない。【でも】（しかし・けれども・だが・だけど）、努力によってそれを補うのだ。

かれはよく勉強する。【だから】（それで・それゆえ・ゆえに・したがって）、成績もよい。

（2）　父【あるいは】（または・もしくは）、母が出席します。

ばらが赤く【そして】（かつ）美しい。

右の（1）は、文と文、（2）は、文節と文節とを接続しています。（1）のような場合には、単独で独立語とし、（2）のような場合には、文節としての役割りだけを考えれば、独立の文節ですが、文の成分としては「父あるいは母が」「赤くそして美しい」を一まとまりとして、一つの主語・

修飾語・述語とするのです。

なお、文と文とを接続する場合の接続詞の下には、読点をうつのがふつうです。

接続詞の種類

接続詞を、接続の意味の上から分類すると、次のようになります。

逆接　前の文とあとの文とがそぐわないとか、反対とかの関係にあることを表わす。

だが・が・しかし・けれど（も）・だけど・でも・ところが。

順接　前の文が原因・理由、あとの文が、その順当な結果・結論であるという関係にあることを表わす。

だから・それで・それゆえ・ゆえに・したがって・そこで・すると。

添加　前のことがらにあとのことがらをつけ加えたり、並べたりすることを表わす。

そして・それから・また・かつ・および・そのうえ・それに・さらに。

説明　前のことがらに関する説明などを補うことを表わす。

なぜなら・ただし・もっとも（つまり・すなわち・たとえば）。

選択　前のことがらと、あとのことがらとの、どちらかを選ぶことを表わす。

または・あるいは・もしくは・それとも。

話題転換　話題を変えることを表わす。

さて・ところで・では・ときに。

接続詞には、他の品詞から単独で、あるいは複合して転じたものが多いのです。

したがって、接続詞として用いられているのか、もとの品詞として用いられているのか、文脈のうえからその語の性質をよく考える必要があります。

（1）それから

いろいろな実験を重ねたが、【それから】結論を得ることはできなかった。（名詞＋助詞）

南米旅行でアルゼンチンに行った。【それから】ペルーにも行った。（接続詞）

（2）だから

これはきみの【だから】、きみに返す。（助動詞＋助詞）

ほら、【だから】、あれほど注意したじゃないか。（接続詞）

感動詞

感動詞は、（1）活用がない。（2）単独で独立語にだけなる（3）一つの文と同じような資格をもつ。

（１）【きれい】。きれいだなあ。
【まあ】。あらっ。ほう。
（２）〈あなたは出席しますか。〉「出席します。」
〈あなたは出席しますか。〉「はい。ええ。はあ。うん。」
（３）中村さん、中村さんじゃありませんか。
【もしもし】、中村さんじゃありませんか。
【おい】、中村君じゃないか。

右の（１）は、感動、（２）は、応答、（３）は、呼びかけを表わしています。しかし、それぞれの右相と左側とを比べてみると、左側の―の語は、

（１７２．ｊｐｇ【】アンダーラインあり）

活用もなく、単独で独立語にだけなるのに対して、右側のは活用があったり、「が」を伴って主語になったりします。また左側のほうは、表わし方も分析的でなく、総合的に、じかに表わしています。このような語が感動詞です。

感動詞の種類

（１）感動・失望・怒り・疑いなどの気持ちを表わす。
あ・ああ・あら・まあ・ほう・やっ・へえ・おう・ふや・おやおや・やれやれ・はてな・さあ。
（２）相手に対する呼びかけや、さそいかけの気持ちを表わす。

もしもし・かい・やい・あの・ねえ・なあ・さあ。

（3）相手に対する応答や反問を表わす。

ええ・はい・はあ・うん・いいえ・ううん・いや・えっ・なにっ。

（4）あいさつの気持ちを表わす。

おはよう・こんにちは・こんばんは・さようなら。

（5）かけ声

どっこいしょ・よいさ・ほいきた・ほれ・それ・よいしょ。

付属語

総説

（1）字を・書く

書か【ない】。書か【せる】。書い【た】。書か【れる】。書き【ます】。書き【たい】。書く【らしい】。書く【そうだ】。書くの【だ】。書く【ようだ】。

右の―のある語は、すべて付属語である。「書く」という述語の表わしきれないところを助けて、いろいろな意味をつけ加えています。それぞれどのようにちがうかを考えてみましょう。

（2）わたし【が】行く。

わたし【は】　行く。
わたし【も】　行く。
わたし　【だって】　行く。
わたし　【と】　行く。
わたし　【だけ】　行く。

日本へ　行った。行った【よ】。
日本【まで】　行った。行った【わ】。
日本【から】　行った。行った【ね】。
日本【も】　行った。行った【ぞ】。
日本　【だって】　行った。行った【か】。
日本　【だけ】　行った。行った【さ】。

右の―のある語もすべて付属語です。それぞれ上の自立語と下の自立語との関係を示したり、いろいろな意味をつけ加えています。どういう場面のちがいがあるか、どう意味がちがうかなどについて考えてみましょう。

（1）の付属語は活用があるから「助動詞」です。

（2）の付属語は活用がないから「助詞」です。

助動詞は、（1）付属語で、活用がある。（2）自立語を助けて、いろいろな意味をつけ加える。

打消・意志・推量・受身・可能・自発・尊敬・使役・過去・完了・ていねい・希望・断定・たとえ・様態・伝聞を

表わすのに使われます。

（173．jpg【】アンダーラインあり。活用表あり）

助動詞の種類分けには、いくつかの方法がありますが、一般に、その語の表わす意味によって分けます。

打ち消し―ない・ぬ（ん）

書く―書か【ない】・書か【ぬ】。

する―し【ない】・せ【ぬ】。

形容詞の「ない」と区別しましょう。

（1）動詞に続く。間に「は・も」がはいりません。

（2）「ない」をそのまま「ぬ」と置きかえられます。

意志・推量―う・よう

書く―書こ【う】。　取る―【取】ろう。

起きる―起き【よう】。来る―来【よう】。

する―し【よう】。　受ける　受け【よう】。

動詞に続いた「う・よう」は、主として意志を表わします。ただし、推量の意を表わす場合もあります。

秋には解散【しよう】。（するだろう）

朝までには雨もやも【う】。（やむだろう）

連体形の（う）（よう）は「こと・はず・もの」など限

られた名詞にだけ続く。
形容詞・形容動詞に続いた「う」は推量の意を表わします。
よかろ【う】。静かだろ【う】。
受け身・可能・自発・尊敬
―れる・られる
書く―書か【れる】。取る―取【られる】。
する―さ【れる】。起きる―起き【られる】。
◇受け身（動作を他から受ける意）
父がしかる―父にしかられる。
道をきれいにはき清める―道がきれいにはき清められる。
◇可能（「できる」という意味。ただし「五段活用＋れる」の場合は、可能動詞を用いるのが普通）
勉強を続ける―勉強が続け【られる】。
いつも明かるい心でいら【れる】
◇自発（自然にそうなる意）
故郷をしのぶ―故郷がしのば【れる】。
明日を待つ―明日が待た【れる】。
母の病気が案じ【られる】。
◇尊敬（相手の動作をうやまう意）

（１７４．ｊｐｇ【】アンダーラインあり　活用表あり）
先生が読む—先生が読まれ【る】。先生は賞をけら【れる】。
（活用表あり）

使役—せる・させる
・書く—書か【せる】。する—さ【せる】。
・起きる—起き【させる】。来る—来【させる】。

太郎が字を書く—太郎に字を書か【せる】。（だれかが）
太郎が字を書か【せる】。（だれかに）

過去・完了—た
書く—書い【た】。取る—取っ【た】。飛ぶ—飛ん【だ】。
（五段活用動詞は音便の形）
起きる—起き【た】。来る—来【た】。
する—し【た】。美しい—美しかっ【た】。
静か—静かだっ【た】。

（１）　過去の意……きのうは遠足だった。
（２）　完了の意……いま帰ったところです。
（３）「ている」の意……咲い【た】花を見つめる。

（４）「てある」の意……壁にかけ【た】絵は富士山だ。
（５）命令の意……さあ、早く帰っ【た】帰っ【た】。
（活用表あり）

ていねい―ます
書き【ます】。取り【ます】。起き【ます】。き【ます】。し【ます】。
仮定形に「ば」を続けた「【ますれば】」は一般に用いられず、かわりに、「【ましたら】」を用います。
命令形は「いらっしゃる・くださる・なさる・おっしゃる」などの「敬語動詞」につきます。

（１７５．ｊｐｇ【】あんだ―ラインあり。活用表あり）

（活用表あり）
希望―たい
書き【たい】。取り【たい】。起き【たい】。来【たい】。し【たい】。

（活用表あり）

本を読む―本が読みたい。
花を見る―花が【たい】。

打ち消し・推量―まい

書く―書く【まい】。起きる―起き【まい】、

来る―来【まい】。する―し【まい】。

「まい」は「う・よう」の打ち消しにあたります。

（活用表あり）

（連体の（まい）は「こと・はず・もの」など限られた名詞にだけ続く。）

（1）打ち消し推量（ないだろう）の意　　・いつまでも栄えることはある【まい】。

・つまらない本だから、彼は読む【まい】。

（2）打ち消し意志（ないようにしよう）の意

・うそはつく【まい】と心に誓った。

・二度と絵は書くまい。

断定―だ・です

本【だ】。学校【です】。（名詞に述語のはたらきを与えます。）

書く―書くのが。取る―取るのです。

する―するのが。静かだ―静かです。

（活用表あり）

（１７６．ｊｐｇ【】アンダーラインあり。活用表あり）

「だ・です」ともに用言には、原則としてつきません。ただし、「形容詞十です」の言い方はふつうに用いています。なお、未然形と仮定形は用言に直接ついて用いられます。

書く【だろ】。取る【なら】。美しい【でしょう】。

連体形の（です）は、ていねいな断定と言えます。

たとえ―ようだ

書く【ようだ】。起きる【ようだ】。する【ようだ】。

来る【ようだ】。美しい【ようだ】。静かな【ようだ】。

（活用表あり）

（１）「たとえ」の意

この風景はまるで箱庭の【ようだ】。

玉の【ような】汗を流した。

（２）不確かな断定の意

被害は少なくない【ようだ】。

どこかへさまよって行った【ようだ】。

（３）例にあげて示す意

かれの【ような】生徒こそほめてやりたい。

ほめられる【ような】絵を書きたい。

課外

「だ・です」ともに用言には、原則としてつきません。ただし、「形容詞＋です」の言い方はふつうに用いています。なお、未然形と仮定形は用言に直接ついて用いられます。

書くだろ。取るなら。美しいでしょう。

連体形の（です）は、ていねいな断定と言えます。

たとえ——ようだ

書くようだ。起きるようだ。するようだ。

来るようだ。美しいようだ。静かなようだ。

	基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形	接続
たとえ	ようだ	ようだろ	ようだっ ようで ように	ようだ	ような	ようなら		連体形助詞「の」

(1)「たとえ」の意

この風景はまるで箱庭のようだ。

玉のような汗を流した。

(2)不確かな断定の意

被害は少なくないようだ。

どこかへさまよって行ったようだ。

(3)例にあげて示す意

かれのような生徒こそほめてやりたい。

ほめられるような絵を書きたい。

様態・伝聞——そうだ

様態　書きそうだ。降りそうだ。（そういう様子だ）

伝聞　書くそうだ。降るそうだ。（そういう話だ）

	基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形	接続
様態	そうだ	そうだろ	そうだっ そうで そうに	そうだ	そうな	そうなら		動詞の連用形 形動の語幹
伝聞	そうだ		そうで	そうだ				終止形

ていねいに言うときには、語幹「そう」に助動詞「です」をつけます。これは、前の「ようだ」についても同じことです。

推量——らしい

書くらしい。美しいらしい。静からしい。

学校らしい。晴れるらしい。ぼくのらしい。

	基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形	接続
推量	らしい		らしかっ らしく	らしい	らしい	（らしけれ		動・形の終止形、形動の語幹、体言・助詞「の」

様態・伝聞―そうだ

様態　書き【そうだ】。降り【そうだ】（そういう様子だ）

伝聞　書くそうだ。降るそうだ。（そういう話だ）

ていねいに言うときには、語幹「そう」に助動詞「です」をつけます。これは直前の「ようだ」についても同じことです。

推量―らしい

書く【らしい】。美しい【らしい】。静か【らしい】。学校【らしい】。晴れる【らしい】。ぼくの【らしい】

（活用表あり）

（１７７．ｊｐｇ【】アンダーラインあり、《》囲いあり）

「らしい」は単なる推量ではなく、何か根拠のある推量の場合に、用いられます。形容詞の「―らしい」と区別する必要があります。

（１）こども【らしい】やりかた。男【らしい】態度。（形容詞）

（２）あそこにいるのは子ども【らしい】。

これを書いたのは男【らしい】。（助動詞）

助詞

助詞は、（1）付属語で、活用がない。（2）語と語の関係を示したり、ある意味を添えたりします。

助詞は、どういう意味を表わすか、どういう語につくかによって、格助詞・接続助詞・副助詞・終助詞の四種類に分けられます。

（1）主として体言につく。

（2）その体言が、他の語に対して、どんな関係に立つかを示す。

《が》

（イ）主語であることを示す。

（ロ）対象を示す

《の》

（イ）連体修飾語を示す。

《ロ》主語を示す。（述語は連体形をとる。）

（ハ）「こと・もの」の音を表わす。

（ニ）国並べていう（並立の風【が】吹く。寒さが残る。

かばん【が】ほしい。

ことば【が】わかる。

わたし【の】名。

春【の】日の午後。

動物【の】歩いた跡だ。

話し方【の】うまい人。
歌っている【の】が、わかる。
喜んだ【の】、喜ばない【の】関係）ではない。

《に》

（イ）時や場所を示す。（連用修飾語）
十五時【に】はじめる。道ばた【に】休む。
（ロ）到達点を示す。（適用修飾語）
学校【に】つく。くびを右【に】まげる。
（ハ）動作や作用の結果を示す。（連用修飾語）
ひどいめ【に】あう。
（ニ）相手や目標を示す。（連用修飾語）
父母【に】紹介する。
（ホ）受け身や使役の原因、目標を示す。（連用修飾語）
みんな【に】ほめられる。汽車【に】手をふる。
（ヘ）並べていう。（並立）
雑誌【に】新聞【に】たばこ。
（ト）同じ語を重ねて意味を強める。
ではない。待ち【に】待った日が来た。

《を》

（イ）動作の目的や対象を示す。（連用修飾語）
海【を】見る。詩【を】書かせる。

（ロ）動作や作用の起点を示す。（連用修飾語）
故郷【を】離れる。丘【を】くだる。
（ハ）経過する場所を示す。（連用修飾語）
大通り【を】歩く。空【を】飛ぶ。

《へ》
（イ）方向を示す。（連用修飾語）
村のほう【へ】下る。街道【へ】出る道。
（ロ）到着点を示す。（連用修飾語）
家【へ】帰る。大学【へ】進む。
（ハ）動作の対象を示す。（連用修飾語）
母【へ】手紙を出す。どなた【へ】さしあげたの。

《と》
（イ）相手や共同者を示　太郎といっしょ。

（次ぎページへ続く）

（１７８．ｊｐｇ【】アンダーラインあり《》囲いあり）
す。（連用修飾語）
兄【と】争った。
（ロ）動作や作用の結果を示す。（連用修飾語）
とうとう入選【と】なった。子を医者【と】する。

（ハ）引用語句を受ける。
「文は人なり」【と】いうことばがある。
（ニ）並べていう。（並立）
ブラジルと日本。
この世【と】あの世。
（ホ）同じ語を重ねて意味を強める。
ありとあらゆる。

から

（イ）出発点、起点を示す。（連用修飾語）
今【から】二十年前。
電車【から】降りる。
（ロ）原料や材料を示す。（連用修飾語）
石炭【から】とる。
へちま【から】作る。
（ハ）理由や動機を示す。（連用修飾語）
興奮【から】わめきだした。
（ニ）聞く、教わるの相手。（連用修飾語）
彼【から】聞いた話だ。
先生【から】教わる。

より

（イ）比較の基準を示す。（連用修飾語）

愛は死【より】も強い。

雪【より】白い。

（ロ）それに限る意で、あとに打ち消しがくる。

その虫は殺してしまう【より】ほかはない。

で

（イ）時や場所を示す。（連用修飾語）

正午【で】終わる。

校庭【で】写真をとる。

（ロ）手段や材料を示す。（連用修飾語）

万年筆【で】書く。

テレビ【で】見た。

（ハ）原因や理由を示す。（連用修飾語）

父の一言【で】話はきまった。

や

（イ）並べていう。（並立）

おじさん【や】おばさん【や】いとこたち。

二、接続助詞

（1）活用のある語につく。

（2）前の意味をあとの用言に準ずる語に続ける《ば》仮定形につく。

（イ）仮定の順接条件を示す。

あの山を越えれ【ば】すぐだ。

（ロ）ある条件がととのえばそうなる。

春が来れ【ば】花が咲く。

（ハ）並べていう。

勉強もできれ【ば】運動もできる。

《と》終止形につく。

（イ）仮定の順接条件を示す。

ともする（と）、不自然になる。

（ロ）同時に、相ついで起こる。

窓をあけると夜風が吹きこんだ。

（ハ）仮定の逆接条件を示す。

からかわれよう【と】彼は気にしない。

《ても》（でも）連用形につく。

（イ）仮定の逆接条件を示す。

たとえ、雨が降っ【ても】おこないます。

（ロ）既定の逆接条件を示す。

父が呼ん【でも】返事をしない。

《から》終止形につく。

（イ）の原因の既定順接条件を示す。

虫が鳴く【から】あしたは天気でしょう。

《ので》連体形につく。

（イ）原因の既定順接条件を示す。

いちばんはじめなので困ったでしょう。

《けれど》（けれども）終止形につく。

（イ）既定の逆接条件を示

悲しかった【けれど】泣か

（次ページへ続く）

（１７９．ｊｐｇ【】アンダーラインあり《》囲いあり）

す。

なかった。

（ロ）並べていう。

あの学校は、野球も強い【けれど】、卓球も強い。

《のに》連体形につく。

（イ）既定の逆接条件を示す。

かすりきずな【のに】大さわぎをしている。

《が》終止形につく。

（イ）仮定の逆接条件を示す。

だれ【が】笑おうが、自分はかまわない。

（ロ）既定の逆接条件を示す。

出ようとした【が】、出られなかった。

（ハ）並べていう。

行こう【が】、行くまいが、自由だ。

《て》連用形につく。

（イ）原因の既定順接条件を示す。

からだが疲れ【て】、手紙が書けない。

（ロ）前後を接続する。

暑い夏が過ぎ【て】涼しくなった。

（ハ）補助用言に連なる。

かたくなっ【て】いた気持がほぐれた。

《ながら》動詞の連用形、形容詞の終止形につく。

（イ）既定の逆接条件を示す。

知っていながら教えてくれない。

（ロ）同時に動作がおこる。

にこにこ笑い【ながら】話した。

《し》終止形につく。

（イ）並べていう。

日は暮れる【し】、腹はへる【し】、困った。

（ロ）一つをあげて理由条件を示す。

あそこに行くはずはない【し】、おかしい。

《たり》連用形につく。

（イ）並べていう。

泣い【たり】、笑っ【たり】した。

（ロ）一つをあげて他を暗示する。

へんなことを言われ【た】りします。

三、副助詞

（1）いろいろな語につく。

（2）意味をつけ加えたり、述語の意味を限定したりする。

《まで》

（イ）動作や作用の及ぶはんいを示す。

道は山のふもと【まで】で続いている。

（ロ）極端な場合をあげて強調する。

赤ちゃん【まで】連れて来た。

《ばかり》

（イ）およその程度を表わす。

あれから半年【ばかり】たった。

（ロ）それと限って強調する。

あの子は水【ばかり】飲みたがった。

《だけ》

（イ）限度、程度を表わす。

できる【だけ】正しいことを書きたい。

（ロ）それと限って強調する。

それ【だけ】言ってけろっとしている。

《きり》

（イ）それと限って強調する。

ふたり【きり】で出かけた。

（ロ）打ち消しのことばと呼応して限定する。

これ【きり】ありません。

《ほど》程度を表わす。

バケツに五はい【ほど】水をくんだ。

（ロ）程度の高まりに比例

見れば見る【ほど】しろい。

（次ぎページに続く）

（１８０．ｊｐｇ【】アンダーラインあり、《》囲いあり）

する意を示す。

《くらい》（ぐらい）

（イ）およその程度を示す。

かばんにはいる【くらい】の大きさ。

（ロ）例示したものを軽くみなす。

忘れたのはあの子【ぐらい】だ。

《など》

（イ）大体を例示する。

落ち葉【など】を拾う。

（ロ）例示したものを軽くみなす。

決して声【など】出しはしません。

《なり》

（イ）例示して言外に意味を残す。

先生に【なり】相談すればよかった。

（ロ）一つを選択する。

音楽【なり】、美術【なり】を鑑賞する。

《やら》

（イ）疑問の語について不確かな意を示す。

どう【やら】来たかいがあった。

（ロ）並べていう。

かべをぬる【やら】、ガラスをはめる【やら】。

《か》

（イ）疑問の語について不確かな意を示す。

またどこ【か】へ出て行ってしまった。

（ロ）一つを選択する。

着いたの【か】、つかないの【か】はっきりしない。

《は》

（イ）他と区別し、特に取り出していう。

あの人【は】、もともとそういう人です。

（ロ）二つのことを対照的に取り出す。

右【は】かし屋で、左【は】本屋です。

《も》

（イ）同類のものとして並べていう。

へやに【も】、台所に【も】ない。

（ロ）一つをあげて、他をおしはからせる。

かれは絵【も】じょうずだ。

（ハ）不定称の語について、全体を示す。

だれ【も】相手にならない。

（ニ）強調する。

あまりおかしく【も】ない

《こそ》

（イ）強調する。

知識【こそ】力である。

《さえ》

（イ）一つをあげて他を暗示する。

かんじんの母【さえ】来なかった。

（ロ）一つを強くあげて、他をかえりみない。

あの人【さえ】承知すればよいのだ。

《でも》

（イ）一つをあげて他をおしはからせる。

子どもの本【でも】おもしろい。

（ロ）軽い気持ちで例示する。
カフェー【でも】飲みましょう。

《しか》
（イ）打ち消しの語と呼応して限定する。
せいが低いので頭【しか】見えない。

四、終助詞
（1）いろいろな語につく。
（2）文の終わりにあって、疑問、禁止、感動、強め、などの意を表わす。
（3）文節の切れ目に用いられるものもある。

《か》文の終末につく。
（イ）質問、疑問の意。
今、なん時です【か】。
（ロ）反語、反ぱつする意。
そんなことがあるもの【か】。
（ハ）自答。
ああ、雨【か】。もうやめ

（次ページへ続く）

（１８１．ｊｐｇ【】アンダーラインあり《》囲いあり）

ようか。

《な》文の終末につく。

（イ）禁止の意。

だれにも言う【な】。

（ロ）命令、依頼する意。

さあ、ねんねしな。

見てください【な】。

（ハ）感動、詠嘆の意。

ああ、いい天気だ【な】。

《ぞ》文の終末につく。

（イ）用念を押す。

そんなことをしてはだめだ【ぞ。】

（ロ）自分に言いきかせる

どうもおかしいぞ。

《とも》文の終末につく。

（イ）の意味を強める。

それでいい【とも】。買ってやる【とも】。

《よ》文の終末につく。

（イ）念を押す。
もうすぐ【よ】。きっと【よ】。
（ロ）相手をなじる。
なんです【よ】、こんなことして。
（ハ）人をさそう。
早く行こう【よ】。
休もう【よ】。

《ね》（ねえ）文の終末につく。
（イ）感動を表わす。
きれい【ねえ】。
高いわ【ねえ】。
（ロ）問いかけ。
きみ、どうした【ね】。
（ハ）念を押す。
クルゼイロだね。

《さ》文の終末につく。
（イ）余情を含めて言いはなす。
だれかが捨てたの【さ】。

《わ》文の終末につく。
（イ）軽い主張（女性用語）

大よろこびだ【わ】。
もうおそい【わ】。

《ぜ》文の終末につく。
（イ）軽く念を押す（男性用語）
あしただ【ぜ】。午後行く【ぜ】。

《ね》文節の切れ目につく。
（イ）文句をつなぎ、語勢をそえる。
会長さんが【ね】。……だが【ね】、君。

《な》文節の切れ目につく。
（イ）文句をつなぎ、語勢をそえる。
学校へ行って【な】、きいておいで。

《や》文節の切れ目につく。
（イ）文句をつなぎ、語勢をそえる。
春子【や】、戸をあけておくれ。

《さ》文節の切れ目につく。
（イ）文句をつなぎ、語勢をそえる。
だけど【さ】、行きたかったんだ。

四　文の種類

文は、意味の上から、平叙文、疑問文、命令文、感動文の四種に分けられます。

平叙文―断定（肯定・否定）推量、決意を表わす。

急に雨が降りだした。きょうは魚がよくつれるだろう。あの人は来ないだろう。あの店には行くまい。

疑問文―疑問、質問、反語を表わす。

だれが持ってきてくれるのかなあ。先生はどちらへおでかけですか。そんなおかしなことがあるものか。

命令文―命令、禁止、要求、願望を表わす。

全員、広場に集まれ。ここで遊んではいけない。危険なところに近づくな。これを書いて

（１８２．ＪＰＧ【】アンダーライン、《》囲いあり）

ください。どうか二時までにいらしってください。

《感動文》―感動を表わす。

大きな池だなあ。あっ、ごめんなさい。

ほら、気をつけて。

文は、構造の上から、単文、複文、重文の三種に分けられます。

《単文》――一つの文の中で主語・述語の関係が一回だけで成り立っている文。

風が吹いている。

大きな犬と小さなねこが仲よく遊んでいる。

あの子は正直でまじめな生徒だ。

《複文》――一つの文の中に、二つ以上の単文を含み、単文と単文との間が従属関係になっている文。

【海が見えてくると、子どもたちは大声をあげた。わたしが植えた、つつじの花が咲きはじめた。

《重文》――一つの文の中に、二つ以上の単文を含み、単文と単文との関係が、並立関係になっている文。

【空は青いし、すなはまは白い。兄は五時に出かけ、弟は七時に出かけた。

五　現代かなづかいの要領

「現代かなづかい」は、大体、現代語音にもとづいて、現代語をかなで書きあらわす場合の準則を示したものである。

このかなづかいは、主として現代文のうち口語体のものに通用する。

原文のかなづかいによる必要のあるもの、またはこれを変更しがたいものは除く。

（一）　かなの使い方は、大体発音どおりにする。
ただし、助詞「を」は、もとのままであり、助詞「は」「へ」も、もとのままに書くことを本則とする。したがって「ゐ」「ゑ」のかなは使わない。「を」は、助詞以外は使わない。

ゐる（居）→いる　うゑる（植）→うえる
をどり（踊）→おどり　たふす（倒）→たおす　あらはない（洗）→あらわない
おもひます（思）→おもいます　なは（尚）・猶）→なお　あやふい（危）→あやうい……でさへ→でさえ　……でせう→でしょう　くわし（菓子）→かしぐわいこく（外国）→がいこく

助詞
本【を】読む　字【を】書く　わたし【は】　それで【は】　など【は】　あるい【は】　また【は】　ついて【は】
東山【へ】行く…さん【へ】
（二）　「ぢ」「づ」は、原則として使わないで、「じ」「ず」で書きあらわす。ただし二語の連合によって「ち」「つ」が濁る場合、同音の連呼の場合だけは、「ぢ」「づ」を使う。

ふぢ（藤）→ふじ　はぢる（恥）→ほじるぢしん（地震）→じしん　まづ（先）→まず　づつ（宛）→ずつ　なかんづく（就中）→なかんずく　さかづき（杯）→さかずきづぐわ（図画）→ずが

二語の連合

はなぢ（鼻血）　ひぢりめん（緋縮緬）　ちかぢか（近々）　いれぢえ（入知恵）　ちゃのみぢゃわん（茶飲茶碗）　みそづけ（味噌漬）　みかづき（三日月）　ちかづく（近付）　―ぢから（力）　―ぢょうちん（提燈）　―ぢょうし（調子）　―づえ（杖）　―づか（塚・柄）　―づかい（使・遣）　―づかえ（仕）　―づかみ（掴）　―づかれ（疲）　―づき（付）　―づく（付）　―づくえ（机）　―づくり（作・造）　―づくし（尽）　―づけ（付）　―づた（蔦）　―づたい（伝）　―づち（槌）　―づつ（筒）　―づて（伝手）　―づつみ（包）　―づとめ（勤）　―づま（妻・棲）　―づまる（詰）　―づみ（積）　―づり（釣）　―づる（鶴・弦・蔓）　―づれ（連）

同音の連呼の場合

ちぢむ　つづみ　つづら　つづく　つづる

（三）　長音は、それぞれのかなで書きあらわす。ただし、オ列の長音だけは「う」で書くことを本則とする。

おかあさん　にいさん　ゆうがた　あそぼう　あたらしゅう　きゅうしゅう　にゅうがく　おとうさん　とうきょう　きのう　いきましょう　ちょう（蝶）

（四）　よう音をあらわす「や」「ゆ」「よ」、つまる音をあらわす「つ」は、なるべく右わきに小さく書く。

（五）　「くゎ・か」「ぐゎ・が」および「ぢ・じ」「づ・ず」を言い分けている地方に限り、これを書き分けてもさしつかえない。

注意

（1）「多い」などは、次のように書く。

多い（おうい・お）　大きい（おうきい・お）　氷（こおり・お）　通る（とおる・お）　遠い（とおい・お）　滞る（とどこおる・お）

（2）「言う」は「ゆう」と書かないで、「いう」と書く。

（3）敬礼・兵営・衛生などの漢語は、けいれい・へいえい・えいせい　というよ　うにかく。

（4）方言の発音によらないで、次のように標準的発音にもとづいて書く。

あろう（洗）→あらう。うたごう（疑）→うたがう。かいる（帰）→かえる。ぜね（銭）→ぜに。ちい（血）→ち

六　送りがなのつけ方

まえがき

（一）　この「送りがなのつけ方」は、現代口語文（184．JPG【】アンダーラインあり）を書く場合の送りがなのつけ方のよりどころを示したものである。

（二）　この「送りがなのつけ方」は、

（1）　活用語およびこれを含む語は、その活用語の語尾を送る。

（2）　なるべく誤読・難読のおそれのないようにする。

（3）　慣用が固定していると認められるものは、それに従う。

の三か条を方針として定めたものである。

（三）　この「送りがなのつけ方」の通則は、便宜上、品詞別に配列した。なお、用例は、送りがなのつけ方を示したものであって、その語を書くのに漢字を用いるかどうかを示すものではない。

通則

第一　動詞

（一）　動詞は、活用語尾を送る。

書【く】 読【む】 生【きる】 考【える】

ただし、次の語は、活用語尾の前の音節から送る。

表【わす】 著【わす】 現【われる】 行【なう】 脅【かす】 異【なる】 断【わる】 賜【わる】 群【がる】 和【ら】ぐ

（二） 活用しない部分に他の動詞の活用形またはそれに準ずるものを含む動詞は、含まれている動詞の送りがなによって送る。

浮【か】ぶ（浮く） 動【か】す（動く） 及【ぼ】す（及ぶ） 語【らう】（語る） 開【こ】える（聞く） 積【も】る（積む） 照【ら】す（照る） 計【ら】う（計る） 向【か】う（向く）

起【こ】す・起【こ】る（起きる） 終【わ】る（終える） 悔【や】む（悔いる） 定【ま】る（定める）

（三） 活用しない部分に形容詞の語幹を含む動詞は、その形容詞の送りがなによって送る。

近づく 遠のく 赤らめる 重んずる 怪（し）む 悲（し）む 苦（し）がる

（四） 活用しない部分に形容動詞の語幹を含む動詞は、その形容動詞の送りがなによって送る。

確【か】める

（五） 活用しない部分に名詞を含む動詞は、その名詞の送りがなによって送る。

黄ばむ　春めく　先んずる　横たわる

（六）　動詞と動詞とが結びついた動詞は、それぞれの動詞の送りがなによって送る。

移【り】変わる　思【い】出【す】　流【れ】込【む】

譲【り】　渡【す】

第二　形容詞

（七）　形容詞は、活用語尾を送る。語幹が「し」で終わるものは、「し」から送る。

暑【い】　白【い】　高【い】　若【い】　新【し】い

美【し】い　苦【し】い　珍【し】い

ただし、次の語は、活用語尾の前の音節から送る。

明【る】い　危【う】い　大【き】い　少【な】い

小【さ】い　冷【た】い　平【た】い

（八）　活用しない部分に他の形容詞の語幹を含む形容詞は、含まれている形容詞の送りがなによって送る。

重たい　憎らしい　古めかしい

（九）　活用しない部分に動詞の活用形またはそれに準ずるものを含む形容詞は、その動詞の送りがなによって送る。

（１８５．ＪＰＧ【】アンダーラインあり）

勇【ま】しい　輝【か】しい　頼【も】しい　喜【ば】しい　恐【ろ】しい

（十）　活用しない部分に形容動詞の語幹を含む形容詞は、その形容動詞の送りがなによって送る。

暖【か】い　細【か】い　柔【らか】い　愚【か】しい

（一一）　動詞と形容詞とが結びついた形容詞は、その動詞と形容詞との送りがなによって送る。

聞き苦【しい】　待ち遠【しい】

第三　形容動詞

（一二）　形容動詞は、活用語尾を送る。

急【だ】（な）　別【だ】（な）　適切【だ】（な）　積極的【だ】（な）

（一三）　活用語尾の前に「た」「か」「ら」「やか」「らか」を含む形容動詞は、その音節から送る。

新【た】だ　静【か】だ　確【か】だ　平【ら】だ　穏【やか】だ　健【やか】だ　明【らか】だ　朗【らか】だ

（一四）　活用しない部分に形容詞の語幹を含む形容動詞は、その形容詞の送りがなによって送る。

清【らか】だ　高【らか】だ　同【じ】だ

（一五）　活用しない部分に動詞の活用形またはそれに準ずるものを含む形容動詞は、その動詞の送りがなによって送る。

晴【れ】やかだ　冷【や】やかだ

第四　名詞

（一六）　名詞は、送りがなをつけない。

頂　帯　趣　畳　隣

ただし、次の語は、最後の音節を送る。

哀【れ】　後【ろ】　幸【い】　互【い】　半【ば】

情【け】　斜【め】　誉【れ】　災【い】

（一七）　活用語から転じた感じの明らかな名詞は、その活用語の送りがなをつける。

動【き】　戦【い】　残【り】　苦【しみ】　近【く】

遠【く】

ただし、

（1）誤読・難読のおそれのないものは、かっこの中に示したように送りがなを省いてもよい。

現【わ】れ（現れ）　行【な】い（行い）　断【わ】り（断り）　聞【こ】え（聞え）　向【か】い（向い）　起【こ】り（起り）　終【わ】り（終り）　代【わ】り（代り）

（2）慣用が固定していると認められる次の語は、送り

がなをつけなくてもよい。

卸　組　恋　志　次　富　恥　話　光　舞　巻

雇

（一八）　形容詞、形容動詞の語幹に「さ」「み」「げ」などがついて名詞になっているものは、その形容詞、形容動詞の送りがなによって送る。

大【き】さ　正【し】さ　明【る】み　惜【し】げ　確【か】さ

（一九）　活用語を含む複合名詞は、その活用語の送りがなによって送る。

心構【え】　日延【べ】　物知【り】　山登【り】　教【え】子　考【え】方　続【き】物　包【み】紙　大写し　長生【き】　早起【き】　歩【み】寄【り】　見送【り】　読【み】書【き】

ただし、誤読・難読のおそれのないものは、かっこの中に示したように送りがなを省いてもよい。

帯止【め】（帯止）　気持【ち】（気持）　綱引

（１８６．ＪＰＧ　【】アンダーラインあり）

【き】（綱引）　封切【り】（封切）　金詰【ま】り（金詰り）　心当た【り】（心当り）　身代【わ】り（身代り）　大向【こ】う（大向う）　編【み】物（編物）　受【け】身（受

身）　掛【け】図（掛図）　死【に】時（死時）　合【わ】せ鏡（合せ鏡）　打【ち】切り（打切り）　売【り】出し（売出し）　落【ち】着き（落着き）　申【し】込み（申込み）　取【り】締【ま】り（取締り）　果【た】し合い（果し合い）　向【か】い合【わ】せ（向い合せ）　書【引】入れ時（書入れ時）　打【ち】合【わ】せ会（打合せ会）

〔備考〕「置【き】みやげ」「払【い】もどし」のようにあとの部分をかなで書く場合には、前の動詞の送りがなを省かない。

（二〇）　慣用が固定していると認められる次のような語は、原則として送りがなをつけない。

献立　座敷　関取　手当　頭取　仲買　場合
番付　日付　歩合　物語　役割　屋敷　夕立　両替　…
係（進行係）
…割（二割）　小包　植木　織物　係員　切手
切符　消印　立場　建物　請負　受付　受取　書留　組合　踏切　振替　割合　割引　貸付金　借入金　繰越金
積立金　取扱所　取締役　取次店　取引所　乗換駅
乗組員　引受人　振出人　待合室　見積書　申込所　浮世絵　小売商　代金引換

（二一）　数をかぞえる「つ」を含む名詞は、その「つ」を送る。

一【つ】二【つ】三【つ】

第五　代名詞

（二二）　代名詞は、送りがなをつけない。

彼　彼女　何

第六　副詞

（二三）　副詞は、最後の音節を送る。

必【ず】　少【し】　再【び】　全【く】　最【も】

ただし、次の語はその前の音節から送る。

直【ち】に　大【い】に

（二四）　他の副詞を含む副詞は、含まれている副詞の送りがなによって送る。

必【ず】しも

（二五）　名詞を含む副詞は、その名詞の送りがなによって送る。

幸【い】に　互【い】に　斜【め】に

（二六）　活用語を含む副詞は、その活用語の送りがなによって送る。

絶【え】ず少【な】くとも

〔注意〕　動詞と動詞とが結びついた動詞については、

特に短く書き表わす必要のある場合、「打（ち）切る」「繰（り）返す」「差（し）上げる」のようにかっこの中の送りがなを省いてもよい。

表に記入したり記号的に用いたりする場合には、「晴（れ）」「曇（り）」「間（い）」「答（へ）」「終（わり）」「生（まれ）」「押（す）」のように、かっこの中の送りがなを省いてもよい。

七　これからの敬語（昭和２７年、国語審議会の発表による）

まえがき

この小冊子は、日常の言語生活における最も身近な問題を取り上げてこれからは、こうあるほうが望ましいと思われる形をまとめたものである。

これからの敬語についての問題は、もちろんこれに尽きるものではない。元来、敬語の問題は単なることばの上だけの問題でなく、実生活における作法と一体をなすものであるから、これからの敬語は、これからの新しい時代の生活に即した新しい作法の成長とともに、平明・簡素な新しい敬語法として健全な発達をとげることを望むしだいである。

基本の方針

一　これまでの敬語は、旧時代に発達したままで、必要以上に煩雑な点があった。これからの敬語は、その行きすぎを戒め、誤用を正し、できるだけ平明簡素にありたいものである。

二　これまでの敬語は、主として上下関係に立って発達してきたが、これからの敬語は、各人の基本的人格を尊重する相互尊敬の上に立たなければならない。

三　女性のことばでは、必要以上に敬語または美称が多く使われている。（たとえば「お」のつけすぎなど）この点、女性の反省・自覚によって、しだいに純化されることが望ましい。

四　奉仕の精神を取り違えて、不当に高い尊敬語や、不当に低い謙そん語を使うことが特に商業方面などに多かった。そういうことによって、しらずしらず自他の人格的尊厳を見失うことがあるのは、はなはだ戒むべきことである。この点において国民一般の自覚が望ましい。

一　人をさすことば

（一）自分をさすことば

1　「わたし」を標準の形とする。

2　「わたくし」は、あらたまった場合の用語とする。

付記　女性の発音では「あたくし」「あたし」という形も認められるが、原則としては、男女を通じて「わたし」「わたくし」を標準の形とする。

3　「ぼく」は男子学生の用語であるが、社会人となれば、あらためて「わたし」を使うように、教育上、注意すること。

4　「じぶん」を「わたし」の意味に使うことは避けたい。

（二）相手をさすことば

1　「あなた」を標準の形とする。

2　手紙（公私とも）の用語として、これまで「貴殿」「貴下」などを使っているのも、これからは「あなた」で通用するようにありたい。

3　「きみ」「ぼく」は、いわゆる「きみ・ぼく」の親しい間がらだけの用語として、一般には、標準の形である「わたし」「あなた」を使いたい。したがって「おれ」「おまえ」も、しだいに「わたし」「あなた」を使うようにしたい。

二　敬称

1　「さん」を標準の形とする。

２　「さま（様）」は、あらたまった場合の形、または慣用語に見られるが、主として手紙のあて名に使う。

将来は、公用文の「殿」も「様」に統一されることが望ましい。

３　「氏」は書きことば用で、話しことば用には一般に「さん」を用いる。

４　「くん（君）は男子学生の用語である。それに準じて若い人に対して用いられることもあるが、社会人としての対話には、原則として「さん」を用いる。

付記　議会用語の「某君」は特殊の慣用語である。

５　職場用語として、たとえば「先生」「局長」「課長」「社長」「専務」などに「さん」をつけて呼ぶには及ばない。（男女を通じて。）

三　「たち」と「ら」

１　「たち」は、たとえば「わたしたち」というふうに、現代語としては、自分のほうにつけてよい。

２　「ら」は書きことばで、たとえば「Ａ氏・Ｂ氏・Ｃ氏ら」というふうに、だれに使ってもよい。

四　「お」「ご」の整理

（一）つけてよい場合

1　相手の物事を表わす「お」「ご」で、それを訳せば「あなたの」という意味になるような場合。たとえば、

お帽子は、どれでしょうか。

ご意見は、いかがですか。

2　真に尊敬の意を表わす場合。たとえば、先生のお話

先生のご出席

3　慣用が固定している場合。たとえば、おはよう　おかず　おたまじゃくし　ごはん　ごらん　ごくろうさま

おいでになる（すべて「お―になる」の型）ごらんになる（すべて「ご―になる」の型）

4　自分の物事ではあるが、相手の人に対する物事である関係上、それをつけることに慣用が固定している場合。たとえば、お手紙（お返事）をさしあげましたが

お願い　お礼　ご遠慮　ご報告いたします

（二）省けば省ける場合

女性のことばとしては「お」がつくが、男子のことばとしては省いて言えるもの。たとえば、

（お）米　（お）菓子　（お）茶わん　（お）ひる

（三）省くほうがよい場合。たとえば、

（お）チョッキ　（お）くつした　（お）ビール　（ご）芳名　（ご）令息　（ご）父兄　（ご）調査された（これは「調査された」または「ご調査になった」が正しい。）（ご）

卒業された（これは「卒業された」または「ご卒業になった」が正しい。）

五　対話の基調

これからの対話の基調は「です・ます」体としたい。

付記　これは社会人としての一般的対話の基調を定めたものであって、講演の「であります」や、あらたまった場合の「ございます」など、そのほか親愛体としての「だ」調の使用を制限するものではない。

六　動作のことば

動詞の敬語法には、およそ三つの型がある。すなわち、第一の「れる」「られる」の型は、受け身の言い方とまぎらわしい欠点はあるが、すべての動詞に規則的につき、かつ簡単であるので、むしろ将来性があると認められる。

第二の「お――になる」の型を「お　――になられる」という必要はない。

第三の型は、いわゆる「あそばせことば」であって、これからの平明簡素な敬語としては、おいおいにすたれる形であろう。

七　形容詞と「です」

これまで久しく問題となっていた形容詞の結び方――たとえば、「大きいです」「小さいです」などは、平明簡素な形として認めてよい。

八　あいさつ語

あいさつ語は、慣用語句として、きまった形のままでよい。たとえば、

（おはよう。　おやすみ。　おはようございます。　おやすみなさい。）

いただきます。　いってきます。　ごちそうさま。

いってまいります。　いってらっしゃい。

九　学校用語

1　幼稚園から小・中・高校に至るまで、一般に女の先生のことばに「お」を使いすぎる傾向があるから、その点、注意すべきであろう。

たとえば、

（お）教室　（お）チョーク　（お）つくえ　（お）こしかけ　（お）家事

２　先生と生徒との対話にも、相互に「です・ます」体を原則とすることが望ましい。

付記　このことは、親愛体としての「だ」調の使用をさまたげるものではない。

３　戦前、父母・先生に対する敬語がすべて「おっしゃった」「お――になった」式であったのは少し行きすぎの感があった。戦後、反動的に、すべて「言った」「何々した」の式で通すのもまた少し行きすぎであろう。その中庸を得たいものである。たとえば、「来た」でなく、「来られた」「見えた」など。

一〇　新聞・ラジオの用語

新聞・ラジオの用語として、いちばん問題になるのは、敬称のつけ方である。それについて、

１　一般に文章・用語がやさしくなり、それにしたがって敬称も「さん」が多く使われる傾向があるのは妥当である。

２　政治的記事における「氏」の用法も妥当であるが、一面、社会的記事において「翁・女史・くん・ちゃん」そのほかの敬称・愛称をその時、その場、その人、その事による文体上の必要に応じて用いることは認めざるをえない。

3　犯罪容疑者に関する報道でも、刑が確定するまでは敬称をつけるのが理想的であるが、たとえば現行犯またはそれに準ずるものなどで、社会感情の許さないような場合に、適宜これを省略することがあるのもやむをえないと認められる。

4　次のような場合には、敬称をつけないでよい。

青山荘アパート（責任者　甲野乙雄）

十一　皇室用語

これまで、皇室に関する敬語として、特別にむずかしい漢語が多く使われてきたが、これからは普通のことばの範囲内で最上級の敬語を使うということに、昭和二十二年八月、当時の宮内府当局と報道関係との間に基本的了解が成り立っていた。その具体的な用例は、たとえば、「玉体・聖体」は「おからだ」

「天顔・竜（りゅう）顔」は「お顔」

「宝算・聖寿」は「お年・ご年齢」

「叡慮（えいりよ）・聖旨・宗襟（しんきん）・懿旨（いし）」は「おぼしめし・お考え」

の類である。その後、国会開会式における「勅語」は「おことば」となり、ご自称の「朕（ちん）」は「わたくし」となったが、これを今日の報道上の用例について見ても、す

でに第六項で述べた「れる・られる」の型または「お――になる」「ご――になる」の型をとって、平明簡素なこれからの敬語の目標を示している。

一二　むすび

一般に、社会人としての対話は、相互に対等で、しかも敬意を含むべきである。

この点で、たとえば、公衆と公務員との間、または各種の職場における職員相互の間のことばづかいなども、すべて「です・ます」体を基調とした、やさしい、ていねいな形でありたい。

（１９１．ＪＰＧ～１９５．ＪＰＧまで　漢字一覧表）

元文部省図書監修官

監　修　林　実　元

（在東京）

編集執筆　（ＡＢＣ順）

古野菊生

二木秀人

加藤千永子

岡崎　親

坂田忠夫

武本由夫

表紙・挿絵

間部　学

星　ルリ子

日本語（12）
中級用

一九六七年　四月一日　印刷
一九六七年　四月五日　発行
著作者　日伯文化普及会
日本語教科書刊行委員会

発行者　日伯文化普及会
ブラジル、サン・パウロ市サン・ジョアキン街三八一

印刷者　株式会社　帝国書院
代表者　守屋紀美雄
東京都千代田区神田神保町三ノ二九

発行所　日伯文化普及会
ブラジル、サン・パウロ市サン・ジョアキン街三八一